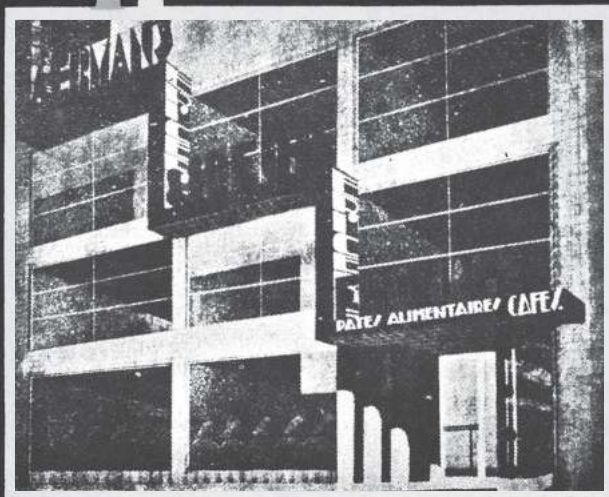


建築と社会

レストラン・カフェ一瞥



昭和四年三月一日

第十二輯
第三號

日本建築協會

歴代の会誌表紙 Vol.12

特集 第1回片岡安賞
(日本建築協会論考コンクール)

2018 06
Vol.99 No.1155

建築と社会

Architecture and Society

日本建築協会

会誌「建築と社会」の電子化公開に伴う掲載論文、図版、 写真等の著作権譲渡のお願い

日本建築協会（以下「本会」という）は、1917年（大正6年）の創立以来、会誌「建築と社会」（創刊時は「関西建築協会雑誌」以下「本誌」という）を刊行して参りました。101年の長きに渡り本誌を刊行できましたことは、ひとえに会員各位のご支援、ご協力の賜物と深く感謝申し上げます。

この度、本会は本誌に掲載された貴重な資料の容易な閲覧を目的として、創刊号に遡って電子化し、直近一定年を除く全文を本会会員に向けて無料公開することが2018年4月の常任理事会で了承されました。

本誌を電子化公開するにあたり、掲載された論文、記事、図版、写真は、著作権（複製権、公衆送信権を含む）が本会に帰属していることが必要となります。そこで本会では、本誌に掲載された論文、記事の著作権を著者から本会に譲渡願うこととし、また図版、写真に関しては「複製権」「公衆送信権」の使用許諾をお願いする次第です。

著作者のみなさまには、電子化公開の目的と意義をご理解いただき、著作権の譲渡および、使用許諾をお願い申し上げます。

この件に関しましてご了承いただけない場合、あるいはご質問等がある場合は2018年11月末日までに本会事務局宛にご連絡ください。

お申し出のなかった論文、記事、図版、写真等につきましては、ご了承いただけたものとし、電子化公開の作業を進めさせていただきます。

なお、期限後にお申し出があった場合においても、ご相談の上、対応させていただきます。

今回のお願いは本誌電子化公開が目的であり、これまで著作者のみなさまが有していた権利としての研究活動のための論文の個人的利用等についてはこれまでと同様です。

みなさまのご理解とご協力を何卒よろしくお願い申し上げます

【本件に関するお問い合わせ】

〒540-6591 大阪市中央区大手前1丁目7番31号 OMMビル7階B室（私書箱107号）

TEL：06-6946-6981 / FAX：06-6946-6984 / E-mail：soumu@aaj.or.jp

一般社団法人 日本建築協会 事務局

平成30年度 定時総会

6月21日（木）に日本建築協会定時総会を開催します。
定時総会終了後に総会出席者及び会員を対象に下記のとおり講演会並びに会員交流懇親会を開催します。
多数のご参加をお願いいたします。

と き 2018年 6月21日(木)
15時
ところ 「東天紅」／大阪マーチャン
ダイズ・マートビル20階
大阪市中央区大手前1-7-31

※当日は軽装でご出席ください。

議 題 ①平成29年度事業報告（案）
②平成29年度収支決算報告（案）
③常設委員会新設（案）
④平成30年度事業計画（案）
⑤平成30年度収支予算（案）
⑥役員改選（案）
⑦その他

※総会開催通知は5月中旬に各会員にあてて別途送付しました。

谷直樹氏講演会 と会員交流懇親 会のご案内

と き 2018年 6月21日(木)
16:30～20:00
ところ 東天紅(大阪マーチャン
ダイズ・マートビル 20階)

*第17回「建築と社会」賞、第65回青年技術者、第1回片岡安賞の表彰式も行います。



講演会講師
谷 直樹 (Naoki Tani)
大阪くらしの今昔館館長

昭和23年生まれ。京都大学工学部建築学科、同大学院工学研究科修了。工学博士。
堺市博物館主任研究員、大阪市立大学(生活科学部)講師・助教授・教授。大阪市立大学大学院生活科学研究科長、大阪市立大学文化交流センター所長。現在、大阪市立大学名誉教授。大阪くらしの今昔館館長。日本建築史・博物館学専攻。

〔著書〕『中井家大工支配の研究』(思文閣出版)、『大工頭中井家建築指図集』(編著・思文閣出版)、『まち祇園祭すまい—都市祭礼の現代』(共編著・思文閣出版)、『町に住まう知恵—上方三都のライフスタイル』(平凡社刊) ほか。

〔展覧会図録〕『世界遺産をつくった大工棟梁—中井大和守の仕事』、『大坂の陣と大坂城・四天王寺・住吉大社の建築』、『天下人の城大工』 ほか。
〔受賞〕日本建築協会賞特別賞(大阪市立住まいのミュージアムの運営)：大阪市立住まいのミュージアム館長として受賞、2007年3月2008年日本建築学会賞受賞(大阪市立住まいのミュージアムの企画と運営)2010年日本建築学会教育賞受賞(大阪長屋の再生—ストック活用能力養成教育プログラム)2015年日本建築学会教育賞受賞(シニアボランティアから世代をつなぐ居住文化体験プログラムの実践) など。

■谷直樹氏講演会

タイトル：

「大大阪モダニズムと都市の文化」

大正14年(1925)4月1日、大阪市は市域拡張によって面積・人口ともに東京市を抜き、日本第一の都市になった。世界でも第6位の大都市であった「大大阪」の誕生である。この前後、御堂筋の建設や公営地下鉄の開通、築港整備などの都市計画が進み、大阪市は近代都市の基盤を固めた。また、大阪市中央公会堂、大阪商科大学(現大阪市立大学)、大阪城天守閣、大阪市立美術館などの教育文化施設が誕生し、さらに公営住宅や北市民館などの社会事業も充実して、近代都市の文化が開花した。「大大阪モダニズム」の所以である。この大大阪建設を指導したのは、名市長と謳われた關一と、関西建築協会(現在の日本建築協会)に結集した建築家たちであった。今回の講演では、絵画史上の名品を中心に、写真集・絵はがき・パンフレットなどの歴史資料を加えて、日本建築協会が主導した大大阪時代の建築文化・都市文化、そして生活文化を紹介したい。

なお、平成30年7月21日から9月2日まで、大阪くらしの今昔館において、「大大阪モダニズム — 片岡安の仕事と都市の文化 —」展を開催する。この展覧会は、日本建築協会の創立者のひとりである片岡安が初代校長を務めた常翔学園(学園の前身は関西工學専修学校)の常翔歴史館と、大阪における住まい・建築・まちづくりの専門博物館である大阪市立住まいのミュージアム(大阪くらしの今昔館)が共催するものである。併せて鑑賞していただければ幸いである。

■会員交流懇親会

●第1部

第17回「建築と社会」賞、第65回青年技術者、第1回片岡安賞の表彰式

●第2部

会員交流懇親会
会員相互の情報交換、交流、親交を深めるため会員交流懇親会を開催します。

■日時、場所等

と き 2018年 6月21日(木)
●谷直樹氏講演会
16:30～17:30

●会員交流懇親会

・第1部 表彰式

17:40～18:20

・第2部 会員交流懇親会

18:30～20:00

と ころ 「東天紅」
大阪マーチャンダイズ・マートビル20階
大阪市中央区大手前1-7-31

定 員 講演会 80名
懇親会 150名
※いずれも先着順

会 費 講演会 無料
懇親会 5000円(当日徴収)
事前にお支払いいただく場合は下記口座へ

振込先 三井住友銀行大阪中央支店
(普通 860034)

申込先 一般社団法人日本建築協会
電 話 06-6946-6981

FAX 06-6946-6984

(下記申込書)

E-Mail soumu@aaj.or.jp

申込締切 6月11日(月)

*当日は軽装でご出席ください。

問合せ 06-6946-6981

講演会・懇親会FAX申込書

1. 申込区分 (○印をお願いします)

- ①講演会のみ参加
②懇親会のみ参加
③講演会・懇親会の両方参加

2. 懇親会会費の事前振込

(○印をお願いします)

- ①あり ②なし

申込者氏名	(ふりがな)
ご連絡先	(職場・自宅)
ご連絡先電話	

平成30年度 第64回工高生デザインコンクール

設計課題 みんなの「こども食堂」

課題の趣旨

こども食堂は子どもやその親、および地域の人々に対し、無料または安価で栄養のある食事や団らんを提供するための社会活動の場です。

こども食堂を利用する対象者は様々で、一緒に食べる家族がいない「孤食」、いつも同じものを食べる「個食」、一種類しか食べ物が無い「固食」等、これらの「こしょく」や食事を抜きがちな「欠食」を解消するための活動が大きな機能のひとつであると考えられます。



こども食堂の歴史はあまり長くはありません。地域で見かけることも少ないかもしれませんが、しかし徐々にその数は増えています。

こども食堂は、子どもたちだけでなく地域とのつながりを生む場となるかもしれません。あなたが考える空間で暖かいごはんとながりを提供する、新たなみんなの「こども食堂」をオープンさせてください。

設計条件

1. 敷地：敷地の大きさ形状とも自由とし、具体的な敷地を設定する。
2. 規模：延べ面積、構造、階数は自由とする。
3. 所要室：使用方法を想定し、必要と思われるスペースを適宜設ける。

所要図等

1. 設計説明：設計意図を表すサブタイトルを必ずつけること。設計趣旨（建物の使い方、立地、周囲の状況等についての説明を含む）を記入すること。
2. 建築概要：敷地面積、建築物の構造、階数、各階床面積および建築面積、延べ床面積などを示す。
3. 敷地周辺図：敷地周辺の環境や状況を示す。縮尺を明示する。
4. 配置図：敷地における建物の位置、道路との関係、方位、縮尺を明示する。
5. 平面図：室名、寸法を記入する。縮尺を明示する。
6. 立面図：縮尺を明示する。（2面以上）
7. 断面図：室名、寸法を記入する。縮尺を明示する。（1面以上）
8. 透視図等：設計意図が最も反映するところを表現する。透視図は手書きによる作図を原則とするが、コンピュータグラフィックス、模型写真に代えてもよい。その他必要とされる手書きの図面は加えてもよい。
9. その他：応募図面には、氏名や学校名、マークなど応募者を特定あるいは類推できる内容は記載しないこと。

応募条件

1. 用紙：用紙はケント紙などの厚手の製図用紙A1判（594mm×841mm）1枚を使用し、直接描くこと。トレーシングペーパーと裏打ち用紙の重ね使用や図面のパネル化は認めない。
2. 仕上げ：所要図等は手書きによる鉛筆仕上げとする。（作図、文字）ただし、色鉛筆による着色は可。また、所要図等のうち、透視図（コンピュータグラフィックスも含む）、模型写真のほか、設計説明を補完する図や写真などは用紙に貼り付けてもよい。なお、製図用紙への図表等の印刷出力など上記以外の仕上げは禁止する。

審査員（50音順・敬称略）

審査員長 大平 滋彦／㈱竹中工務店大阪本店設計部設計第4部長
審査員 一階 聡之／㈱日建設計設計部門設計部長
小笠原 絵理／間工作舎一級建築士事務所主宰
神谷 浩司／㈱大林組大阪本店建築事業部プロジェクト設計部副部長
河崎 昌之／和歌山大学システム工学部環境システム学科准教授

3. 応募資格：平成30年4月現在、高等学校在籍の生徒で、個人または共同（3人まで）で制作したものとする。

応募方法

1. 応募書類に、学校名・所在地・学年・氏名を記入の上、封筒に入れ密封し、製図用紙の裏に貼りつけること。（応募書類が足りない場合は協会ホームページ（<http://www.aaj.or.jp>）からダウンロードしてください。また封筒の貼り付けは、封筒がはがれない程度で結構です。図面を破損する恐れがありますので、糊のベタ塗りはしないでください。）
2. 応募作品は学校を通じて提出すること。

締切期日

平成30年9月30日（日）の消印、あるいは受付印のあるものをもって締め切る。

送付先

〒540-6591 大阪市中央区大手前1丁目7番31号 OMM7階
一般社団法人 日本建築協会 第64回工高生デザインコンクール係
TEL：06-6946-6981 FAX：06-6946-6984
E-mail：jigyoka@aaj.or.jp URL：http://www.aaj.or.jp

入選作品の数および賞

1. 入選作品は10点とする。
 2. 入選作品のうちから最優秀賞1点、優秀賞2点を選ぶ。
 3. 最優秀賞・優秀賞作品には、賞状および表彰盾を贈り、その他の入選作品には、賞状を贈る。
 4. 応募者全員に参加賞を贈る。
- ※入選作品の著作権は本会に属する。

入選発表および表彰式

審査の結果は、各学校ならびに本人に通知するほか、本会の会誌「建築と社会」11月号に発表し、入選作品は翌年1月号に掲載する。表彰式は、平成30年11月10日（土）に行う。

一般社団法人 日本建築協会
片岡安賞
(日本建築協会論考コンクール)
第2回 募集要項

趣旨

日本建築協会は、1917年に片岡安らによって設立されて以来、会誌『建築と社会』に多くの優れた論考を掲載し、建築界をリードする役割を担ってきました。昨年創立100周年を迎えたのを機に、本会が歩んできた歴史を見つめ直し、会誌『建築と社会』が更に優れた論考の受け皿となり、建築界全体にとって有益な媒体となることを目指します。この目的に則り、昨年より論考コンクールを実施し、優れた論考を顕彰し、会誌『建築と社会』に掲載することとなりました。ふるってご応募ください。

■募集テーマ：建築をつくるひと—これからの姿を問う

すまいや公共建築物から私たちのまちまで、更には社会の様々な制度や仕組みまで、「建築」は多様なモノやコトや行為を含みます。これらを「つくる」には、発案し企画し合意し予算をつけ発注し計画し設計し施工し維持し使い保ちしてゆくあらゆる活動が関わり、多くのひとびと— 専門家も素人も — の営みが求められます。これらの多様で錯綜した姿は、あるいはその任意の断面は、これからどのようになるか、あるべきか、その想いや答えを描いて下さい。

■審査委員会

審査委員長：舟橋國男（大阪大学名誉教授）
審査委員：岩前 篤（近畿大学教授）
花田佳明（神戸芸術工科大学教授）
山浦晋弘（安井建築設計事務所）
勝山太郎（本会編集委員長）

■審査方法

- ・全審査委員による査読の上、一次審査を行う。
- ・一次審査により選出されたものを対象とし、公開プレゼンテーションを開催する。その後最終審査を行い、受賞論考を決定する。

■応募条件

- ・投稿料は無料とする。なお選考に伴う旅費は応募者の負担とする。
- ・応募者の国籍、年齢、所属は問わない。
- ・応募論考は単著、共著を問わない。
- ・応募論考は未発表のものに限る。ただし、会誌『建築と社会』に掲載された記事の改稿による論考は可とする。
- ・使用言語は日本語に限る。
- ・質問は受け付けない。
- ・受賞者は本会会員になることとする。

■著作権・版權

- ・著作権は応募者に帰属する。
- ・ただし本会にかかわる出版・印刷においては、一般社団法人日本建築協会が自由に使用することができるものとする。

■執筆要領

- ・頁数は、会誌『建築と社会』掲載時4頁（12,000文字程度）。
- ・必要事項を記入した応募用紙とともに担当窓口へメール送付もしくはA4サイズに印刷したものを郵送する。
なお、応募用紙は本会ホームページからダウンロードする。
- ・電子データにて提出する場合、文書作成ソフトWord（Microsoft社）もしくはそれに類するもので原稿を作成する。添付画像は解像度300dpi以上とし、合計10MB以上になる場合は分割して送信すること。

■スケジュール

2018年	
5月	募集要項公開
10月31日	応募締切（消印有効、電子投稿の場合23時50分）
11月～1月31日	一次審査
2019年	
3月上旬	一次審査通過論考の公開プレゼンテーション 及び最終審査会開催（詳細は『建築と社会』に掲載）
5月	受賞論考・著者名発表（『建築と社会』2019年5月号）
6月	論考本文を会誌『建築と社会』2019年6月号に掲載
6月	表彰式（一般社団法人日本建築協会定時総会）
※なお後日受賞論考に基づく講演会・討論会を開催することがある。	

■発表と表彰

- ・受賞論考の論題と著者名を会誌『建築と社会』2019年5月号にて発表し、全文を6月号に掲載する。
- ・同6月の本会総会にて表彰し、受賞論考著者には賞状及び副賞を贈る。

■提出先

一般社団法人日本建築協会
〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31 OMM7F
電話 06-6946-6981
メールアドレス<hensyu2@aaaj.or.jp>

主催：一般社団法人 日本建築協会

〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31 OMM7F TEL 06-6946-6981 FAX 06-6946-6984 URL <http://www.aaaj.or.jp>
後援：（公社）大阪府建築士会、（一社）大阪府建築士事務所協会、（公社）日本建築家協会近畿支部、（一社）日本建築学会近畿支部

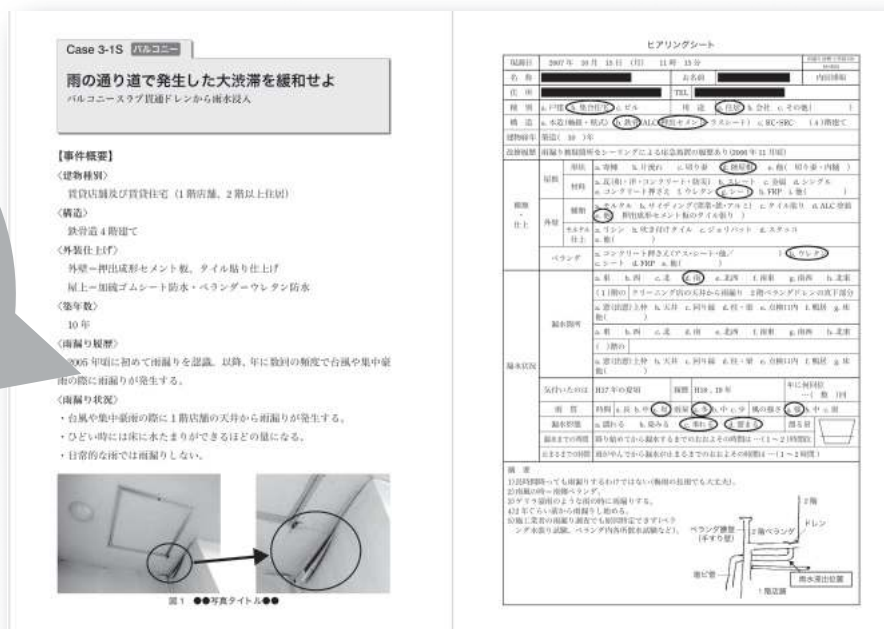
◆ 第2回 建築セミナー ◆

主催：日本建築協会出版委員会 共催：学芸出版社

日本建築協会出版委員会では、「建築の本」の著者をお招きし、手軽にご参加いただける連続セミナーを開催しています。第2回として日本建築協会企画『図解雨漏り事件簿』の出版を記念して実施いたします。お気軽にご参加ください。

日本最大のプロ集団「雨漏り 110 番」が教える 雨漏り調査の対策とポイント

講師：玉水新吾 氏・唐鎌謙二 氏



『図解雨漏り事件簿』は、住宅トラブルの大半を占める雨漏りの原因調査と対策について、修理実績1万1千件以上・解決率97%超、日本最大のプロ集団である「雨漏り110番」が総力を挙げた一冊です。多数の生の事例をもとに実務に役立つポイントをお伝えします。

〈講師プロフィール〉

玉水 新吾 (たまみず しんご)

一級建築士事務所「ドクター住まい」主宰、雨漏り診断士協会技術研究所長。

唐鎌 謙二 (からかま けんじ)

雨漏り110番グループ代表、日本外装株式会社代表取締役、NPO法人雨漏り診断士協会理事。

このセミナーは、建築 CPD 情報提供制度認定プログラム申請中です。建築関連 CPD (2単位)

日 時： **2018 年 8 月 22 日 (水)**
18:00 ~ 20:00 (17:45 開場)

場 所： **TOTOテクニカルセンター大阪**
大阪市中央区久太郎町3-6-8御堂筋ダイワビル2階 地下鉄本町駅から徒歩4分

参加費：テキスト購入+受講3900円
受講のみ1500円 (※日本建築協会会員と学生はテキスト購入+受講3400円、受講のみ1000円)

定 員：50名

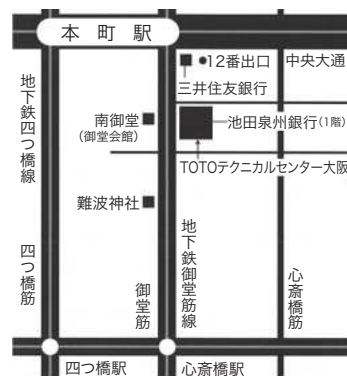
使用テキスト：玉水新吾・唐鎌謙二著『図解雨漏り事件簿』
A5判・216頁・本体2500円+税

※当日はテキストを税込2700円⇒税込特価2400円で販売します。

【申込み方法】

下記を記載の上、メールもしくはFAXにてお申込ください。

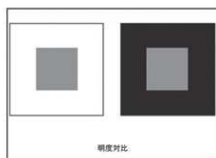
①催し名(第2回建築セミナー)②氏名(ふりがな)③所属④会員・一般・学生の別⑤当日の書籍購入希望の有無⑥受講票郵送先住所⑦電話番号⑧E-mail アドレス⑨CPDを申請される方は申請先団体名と番号
申込先：(一社)日本建築協会 TEL 06-6946-6981 FAX 06-6946-6984
E-mail:hensyu2@aaj.or.jp (担当：入谷)



渡辺安人氏 講演会

カラーテクニカルコンサルタント
(アーキタイプ工房)「生活環境の色彩心理生理・
和の色彩感覚と景観調和」主催：(一社)日本建築協会京都支部
共催：(公社)日本建築家協会京都地域
会・事業委員会文化財担当委
員会

「色彩」の知識素養は法規にはないので、建築士資格試験の範疇には含まれていません。そのため、建築学科に「色彩学」の講義が無い大学が多くあります。その結果、建築士は、色彩に関して理論的な知識が無いままに、戸建住宅から高層ビルまで、インテリア、外観共に各自の嗜好や美的センスだけに頼って色選定を行っている状況が大半ではないでしょうか。目に見えるものには全て色があります。意識せずとも色は人間の心理生理に多大な影響を与えており、色一つで快適にも不快にもなります。また外観は都市景観形成にも影響を与えています。今回は特に①色選定時に注意すべき色彩心理生理に関する内容と②日本の都市景観に相応しい外観色彩の考え方について考察します。



日 時 2018年 7 月20日(金)
18:30~20:30(質疑30分含む)
定 員 25名(先着順)
参加費 会員1,000円、一般1,500円、
学生 500円
会 場 京都建設会館別館 4 階会議室
(京都市中京区押小路通柳馬
場東入橋町641)
最寄駅 地下鉄東西線「市役所前」駅
より徒歩 7 分、地下鉄烏丸線
「烏丸御池」駅より徒歩10分

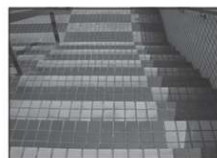
■申込方法

①講演会名「7/20渡辺安人氏講演会」
②氏名、③勤務先名、④当日連絡先、
⑤E-mailアドレスまたはFAX番号、
⑥日本建築協会会員/日本建築家協会
会員/一般(非会員)/学生の別
上記項目を明記しFAXにて京都支部へ
お申し込みください。

■申込先 (一社)日本建築協会京都支部
事務局 FAX 075-255-6077

■講師プロフィール

渡辺安人
(わたなべ やすと)
1986年総合色彩コン
サルタント(株)日本カ
ラーテクノロジー研
究所設立参画。専務取締役を経て1999
年退職。現在、アーキタイプ工房とし
て個人活動。一級カラーコーディネー
ター「環境色彩」、二級建築士。
現在、多数の大学で色彩学非常勤講師、
企業研修、セミナーなどの講師。日本
色彩学会会員「街の色研究会・京都」
副会長、長岡京市景観デザイン審査会
委員、京都府景観アドバイザー他。
著書『色彩学の実践』『建築と色彩
(共著)』共に学芸出版社。

第1回学生のための
現場見学会「国立循環器病
研究センター移
転建替整備事業」

当プロジェクトは、JR岸辺駅周辺に健康や医療関連の機能集積が進む北大阪健康医療都市開発のメイン事業である国立循環器病研究センターの移転建替整備事業です。心臓病と脳卒中を対象とした世界でも稀有な最先端の予防・治療・研究施設で、オープンインノベーションを推進させる病院・基盤センター・研究所の一体的な施設づくりを実現しています。

設計の川上段階から生産性向上の構工法を盛り込み、免震装置上部柱脚の鉄骨化をはじめ、躯体はPca柱、梁Sのハイブリット構造等、多様な省力化・省人化工法に取り組みました。見学当日は躯体工事がほぼ完了し、内外装仕上げ工事を中心に見学することができます。またBIM活用による施工についてもご紹介いたします。

建 築 主 国立研究開発法人 国立
循環器病研究センター
基本設計・監理 (株)佐藤総合計画
実 施 設 計 (株)日本設計、(株)竹中工務店
施 工 (株)竹中工務店
日 時 平成30年 7 月 9 日(月)
13:30~16:30(予定)
受 付 13:00~
講 師 (株)竹中工務店ご担当者
所 在 地 大阪府吹田市岸部新町1番
最 寄 駅 JR岸辺駅から徒歩 7 分
阪急正雀駅から徒歩15分
集 合 国立循環器病研究センター
作業所事務所
(詳細は参加証に記載)
定 員 30名(先着順)
参 加 費 500円(保険代)
締 切 日 平成30年 6 月29日(金)
*ただし定員になり次第、締め切らせていただきます。

申 込 方 法 ①催し名
②学校名・学部・学科
③学生氏名(ふりがな)・
学年
④引率者 職名・氏名
(ふりがな)
※学生のみの場合不要
⑤参加証送付先住所
⑥連絡先電話番号・E-mail
上記項目を明記しFAX (06-6946-6984)
か、E-mail (jigyoka@aaj.or.jp) にて
お申し込みください。(担当：内山)



(仮称) デサントR&D センター見学会

日時
2018年7月24日(火)
14:30~16:30
(予定)

見学先 (仮称)デサントR&Dセンター
所在地 茨木市彩都やまぶき二丁目
3番2号

締め切り
7月16日(月)

※ただし定員に達し次第、締め切ら
せていただきます

(仮称) デサントR&Dセンターはスポーツブランドのトップメーカーである株式会社デサントのオリンピックに向けたウエアの開発拠点です。最先端の実験、解析、試験、製作環境を整備し、「世界一、速いウエアを作る。」をコンセプトとして、人が集まり共創できる場、最先端技術の創造・発信の場を目指しています。特徴的な分節屋根は敷地環境に流れるベクトルとデサントスピリットである滑降をオーバーレイされ、ブランドイメージとスポーツの躍動感を表現しています。建物形状は屋根形状、軒の長さ、ハイサイドライト高さ、柱形状などをパラメトリックに検証することで、ブランドイメージの表現と設備環境(光・風・熱)、構造最適化の双方から意匠、構造、設備の最適な形状を導いています。

建物中央の2層吹き抜けの執務空間はデザインをすぐにカタチにし、テストする環境(実験・解析・試験・測定)を実現するため、すべての部屋が執務空間に隣接し、見える化を図っています。また緑豊かな周囲への眺望を確保しながら、大庇と横ルーパーによる日射遮蔽、ハイサイドライトによる自然採光、自然通風を確保した快適な光・温熱環境を創出し、研究者の創造性と生産性の向上を図った計画としています。

(有田博・岩崎宏/株竹中工務店)

講師 株式会社竹中工務店
有田博氏・岩崎宏氏(予定)
集合 現地(参加証に地図記載)
最寄駅 大阪モノレール彩都線
彩都西駅下車徒歩約10分
定員 30名(先着順)
参加費 会員1,000円/一般1,500円
学生500円
申込方法 ①催し名
②氏名(フリガナ)
③会員・一般・学生の別
④職場名または学校名
⑤郵便番号・住所
⑥当日連絡先電話番号
⑦CPD申請される方は申請
先の団体名とID番号

上記を明記しFAXかE-mailにて申込先まで
申込先 一般社団法人日本建築協会
TEL: 06-6946-6981
FAX: 06-6946-6984
E-mail: jigyoka@aaj.or.jp (担当: 内山)



南東外観



デサント共創スペース

【概要】

建築主 株式会社デサント
設計 株式会社竹中工務店
施工 株式会社竹中工務店
敷地面積 約22,220㎡
建築面積 約3,389㎡
延べ面積 約4,309㎡
構造規模 S造 地上2階
竣工年月 2018年7月
主用途 事務所

「この見学会は、建築CPD情報提供
制度認定プログラム申請中です。
(2単位)」

建築と社会

Architecture and Society

Journal of the Architectural Association of Japan

日本建築協会

2018 06

Vol.99 No.1155

■特集予告

● 7月号／第65回青年技術者

● 8月号／平成と建築

特集 第1回片岡安賞 (日本建築協会論考コンクール) 募集テーマ：これからの建築と社会 —その関係を問う—

審査経過および総評	審査委員会	11
【第1次審査通過論考】		
奨励賞	AIがもたらす新たな「知」と社会●一居康夫	13
奨励賞	スルーアーキテクチャー	
	—建築・社会・共同体のゆるい関わり合い—●西野 翔	17
佳作	これからの建築と社会—その関係を問う●岡本清文	21
佳作	これからの建築と社会—その関係を問う●北村 潤	25
佳作	人びとがつくる『場所』という現象をとらえる●林田大作	29
佳作	建築と社会の幻想曲●伊熊昌治	33
会告		
	会誌「建築と社会」の電子化公開に伴う掲載論文、図版、写真等の著作権譲渡のお願い	
	平成30年度定時総会、谷直樹氏講演会と会員交流懇親会のご案内	1
	第64回工高生デザインコンクール作品募集	2
	第2回片岡安賞(日本建築協会論考コンクール)募集要項	3
	第2回建築セミナー 日本最大のプロ集団「雨漏り110番」が教える雨漏り調査の対策とポイント	4
	(一社)日本建築協会京都支部 主催 渡辺安人氏 講演会・第1回学生のための現場見学会「国立循環器病研究センター移転建替整備事業」	5
	(仮称) デサントR&Dセンター見学会	6
作品作風	プロロジスパーク茨木	8
gallery	鳥見町の住宅●山口陽登	10
法令コーナー	健全な民泊サービスの推進に向けて ～住宅宿泊事業法の概要～●村井香葉	38
設備の頁	IoT ホーム Link 「Life Assist」●田代達一郎	39
再読	国立飛鳥資料館●福嶋啓人 三宅拓也	41
関西の建築		
information	世界報道写真展2018 記録された瞬間 記憶される永遠 ／プラド美術館展—ベラスケスと絵画の栄光—／聴竹居—藤井厚二の木造モダニズム建築—／没後50年 藤田嗣治	46
月間の動き	平成30年 4月	48

今月の表紙

昭和4年の表紙は黒と山吹色（濃い黄色）の2色刷りのモダンな図柄です。

2月号から1年分の特集テーマを決め、読者の投稿を呼びかけており、この取り組みは昭和6年まで行われていました。

昭和4年は防災、郷土建築、小住宅、貸家、庭園、照明や衛生器具など生活に近いテーマが取り上げられています。

昭和4年3月号の編集後記には「おれの方がもっと深い造詣をもってゐる等と後から仰せられず、どしどしと御投稿を給わり度く…今年からは誌上で翌月號の預告をして御投稿をご依頼しておるのですから…」とあり、記事の感想もいろいろとあったようです。



鳥瞰バース北西面



車両アプローチ



エントランス

プロロジスパーク茨木

建 築 主 株式会社プロロジス
 プロジェクトマネジメント及び企画設計 プロロジス
 デザイン監修及び監理監修 昭和設計
 設計・監理 清水建設
 施 工 清水建設

良好な地盤を最大限に活かせる土地選定からコンストラクションマネジメントを行ない、経済的な地盤レベル設計及び建物基礎と造成工事の整合、盛土品質管理をはじめ、制震ブレースの採用や建物高さ制限緩和を実現した。昭和設計と共同で、外壁カラー及び内装デザインを新たに検討し、アメニティの充実を図った。また、ドローン眺望確認でのカフェテリア位置計画、45フィートコンテナトレーラー各階着車を可能とし、環境認証のCASBEE Sランクも取得した。

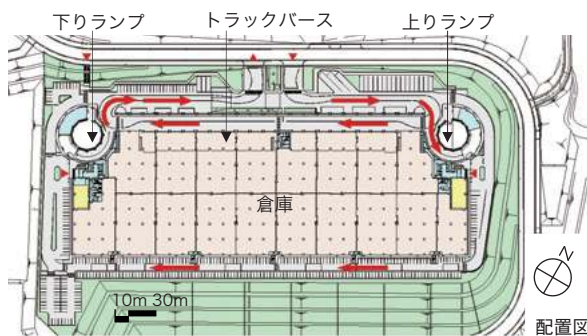
(柿田修男／プロロジス)

建築主がこれまで培ったブランド力のさらなる向上と、働く方々に安らぎを与えるアメニティ空間の提供を目的に、デザイン提案と監修を行なった。外装金属パネルは、郊外型として周辺に馴染むCIカラーのグリーンに寄せた色味とし、車路は水平ラインを際立たせた。エントランス空間はライムストーンにより格調と暖かみを感じるものとし、カフェテリアやCOMMONホールなどは木目や円形などの優しさと遊び心のあるデザインとした。

(中山 至・吉澤裕二／昭和設計)

北大阪の緑豊かな彩都に立地する日本最大級の自走式マルチテナント型物流施設。建物はトレーラーが走行する車路とランプ及び倉庫で構成される。将来の分割使用対応や眺望の優れた休憩スペースを備えており、また、外皮の断熱性を高め、全館LED、調光システムを採用するなど省エネルギー性が高く、地域の生樹木や環境条件に応じた多様性ある植栽など自然保全にも取り組んでいる。

(林 孝司・野上雅也／清水建設)



所 在 地 大阪府茨木市彩都あかね 2 番
 1 号
 敷地面積 80,243.54㎡
 建築面積 32,630.41㎡
 延床面積 189,741.77㎡
 構造規模 RC造・一部S造 地上 6 階
 工 期 2015年 6 月～2016年 9 月
 最 寄 駅 大阪モノレール線 彩都西駅
 撮 影 エスエス大阪支店



エントランスホール



エレベーターホール



6階COMMONホール



6階カフェテリア

まち
建築
ひと

gallery

鳥見町の住宅

建築家

山口 陽登

敷地は奈良県奈良市鳥見町。クライアントは若い4人家族で、2人の子供はまだ幼い。敷地周辺には、同じく若い家族が購入したであろう1ボリュームの建売住宅が顔を並べている。

敷地に仮想の線を引いた。仕上げや構造の仕様を、1つのボリュームに満遍なく計画するのではなく、母屋と下屋に分けて計画する。母屋の仕様を松竹梅の〈松〉、下屋の仕様を〈梅〉とし、2つのボリュームをバランスさせて全体の予算に収める。

母屋の構造は120mm×360mmの柱と120mm×450mmの梁による門型フレームである。重機を用いて建て方が行われた。背が高く伸びやかで、LDKなど家族の会話の中心となる大広間である。下屋の構造は60mm×60mmの柱と60mm×120mmのトラス梁の組み合わせにより構成されている。大工さん2人で軽やかに建て方が行われていった。背が低く、縦に長い空間で、利用時間の短いサーバントスペースを数珠つなぎにした。

構造体、仕上げなど質が異なる2つの空間を行き来し、回遊しながら家族は暮らす。母屋と下屋によって生み出された、いわば「あらかじめ増築されたような状態」は、母屋を残しながら、将来の増改築、一部建て替えを許容し、永く住み継がれる家となるだろう。

山口 陽登（やまぐち あきと）

1980年 大阪生まれ
2003年 大阪市立大学工学部
建築学科卒業
2005年 同大学大学院修士課程修了
2005年～ 株式会社日本設計（2013年
まで）
2009年～ 大阪市立大学 非常勤講師
2013年～ シナリ建築設計事務所主宰
2015年～ 関西大学・大阪芸術大学・
大阪工業技術専門学校＊
非常勤講師（＊2016年まで）

企画編集：菊池浩輔（作品作風小委員会）



photo by KENTA HASEGAWA

特集●第1回 片岡安賞（日本建築協会論考コンクール）

募集テーマ：これからの建築と社会—その関係を問う

審査経過および総評

審査委員会

1. はじめに

一般社団法人日本建築協会が、2017年3月30日に創立100周年を迎えた機にこれを記念し、次の100年の活動を目指した新しい事業として、表記コンクールが開始された。

ここに至るまで、事業の趣旨や賞名に関して数年に亘る協議と準備を経て、本会設立者・片岡安の名を冠した「片岡安賞」とし、査読を経た論考を顕彰することになった。審査委員会の編成と第一回コンクールの募集テーマ決定を経て、会誌「建築と社会」2017年4月号で募集開始し、2017年10月31日に締め切られた。

審査委員会としても、果たしてどれだけの応募があるか不安はあったが、結果的には18篇の論考が応募され、第一回としては一応の成功であったと考えている。

ご多用の中にもかかわらず応募くださった執筆者各位に対し、ここにそのご努力に深く敬意を表し、厚く御礼申し上げます。

2. 審査経過

1) 一次審査

締め切り後、審査委員には応募者名等を不詳にすべく、本協会事務局にて受理した順に各論考に番号（No.1～No.18）を付した上で、第一回審査委員会に提供された。

全審査委員出席のもと、まず、審査方法に関する基本的な方針を協議の結果、審査委員がそれぞれ独立に18篇全てを査読し、各論考に対する評価を行い、その結果を集約する方式とした。

次に、評価方法について協議の結果、各論考に対する絶対評価を行うこととして、一次審査合格レベルA、一次審査不合格C、いずれとも判じ難いものB、とする3段階の判定を下すとともに、併せてコメントを付した査読結果表を作成し、それら評価結果を集約することとした。

第二回審査委員会において、各審査委員による評価を集約した結果を表1に示す。

審査委員による評価の視点や水準の差異が認められたので、表1を参照しつつ、評価が下位である論考から順に、逐一各審査委員の評価理由に関する意見交換を行って、一次審査を進めた。その結果、論考番号No.4・No.6・No.7・No.13・No.17・No.18の6篇が一次審査通過と認められ、公開プレゼンテーションに参加した

べくことにした。

この結果を受け、募集要項記載の公開プレゼンテーションの実施細目を定め、一次審査通過者に通知するとともに、日時・会場のみを会誌「建築と社会」2018年2月号にて予告し、同3月号にて該当論考6篇の表題と応募者名を会告することとした。

2) 公開プレゼンテーション

本賞の選考に相応しい名建築・大阪綿業会館にて、2018年3月10日（土）13時から開催した。当日は多数の参加を得て、全審査委員出席のもと、当協会副会長・米井寛の司会により進行的な。論考番号13の応募者は急病のため欠席されたが、5名の該当者が籤引で発表順番を決め、それぞれが論考概要を発表し、審査委員からの質疑応答が行われた。

3) 最終審査会

公開プレゼンテーション終了後直ちに、全審査委員による最終審査会が開催され、6篇の論考について様々に意見交換が行われた。その結果、表2の通り、

（1）「片岡安賞」は「該当無し」とする。

（2）ただし、今回の場合、一次審査通過論考6篇は、それぞれに相応の内容を示していると認められるので、何らかの顕彰をすべきである。

（3）論考No.13ならびにNo.18は、いずれも未熟な面はあるが、募集テーマ「これからの建築と社会—その関係を問う」に応えようとして、現代の状況ならびに今後への展望を窺わせる興味深い論点が認められ、「奨励賞」と称するに値すると判断された。

（4）論考No.4・No.6・No.7・No.17は、いずれも難点はあるが意義ある考察を行っていると認められ、「佳作」と称するのが適切であると判断された。

表1 査読結果別論考番号

評価結果	該当論考番号
5A	
4A+B	7
4A+C	
3A+2B	13
3A+B+C	
3A+2C	
2A+3B	
2A+2B+C	17
2A+B+2C	4,6
2A+3C	
A+4B	
A+3B+C	
A+2B+2C	
A+B+3C	10,18
A+4C	
0A+5B	
0A+4B+C	1
0A+3B+2C	2,11,14,15,16
0A+2B+3C	9
0A+B+4C	5,8
0A+0B+5C	3,12

表2 第1回片岡安賞審査結果（受理番号順・敬称略）

片岡安賞	該当なし		
奨励賞	AIがもたらす新たな「知」と社会	一居康夫	株式会社大林組 設計本部設計部
奨励賞	スルーアーキテクチャー ー建築・社会・共同体のゆるい関わり合いー	西野 翔	慶応義塾大学大学院 政策・メディア研究科
佳作	これからの建築と社会 ーその関係を問う	岡本清文	近畿大学文芸学部 教授 AIR一級建築士事務所代表
佳作	これからの建築と社会 ーその関係を問う	北村 潤	芦原太郎建築事務所大阪オフィス
佳作	人びとがつくる『場所』という現象をとらえる	林田大作	大阪工業大学 准教授
佳作	建築と社会の幻想曲	伊熊昌治	伊熊昌治建築設計事務所

3. 総評

1) 応募論考の傾向と特徴

(1) 18篇中、共著されたものは2篇のみであり、論考という著作の性格上、単著が多いのは当然のことかと思われる。

(2) 応募者の年齢は、20代から70代まで多岐に亘ったが、30歳代が皆無であり、20歳代も2名しかなく、いわゆる中年世代以上に偏っていた。遺憾ながら、このコンクールが「これから」を背負うべき世代に強くアピールしなかったことは反省しなければならない。

(3) 応募者の勤務職域別にみた篇数は、設計事務所5篇、ゼネコン設計部5篇、各種団体2篇、教育機関4篇、大学院生2篇であった。日常的に多くの論説を著している、建築学者からの応募は少なく、いわゆる「建築評論家」は皆無であったと推認される。

(4) 本協会の歴史や事業、賞名に冠した片岡安の活動や思想に触れるものは皆無であった。これについて審査委員からは、本事業主催者や審査委員に阿ることに成りかねない恐れから敢えて避けた応募者が居た可能性や、あるいは、全く意識さえしなかった者も居たであろう、との指摘があった。しかし、日本の社会・建築界の過去一世紀における重要な事跡を顧みたと上で、「これから」の建築と社会との関係を論じる論考が皆無であったことは残念であった。

(5) 論考において論じられているテーマ・内容は、建築論・計画論から文化財保護・修復などに関わる計画系のテーマのみならず、環境工学や構造的な論題もあり多岐に亘った。ただし、応募者所属組織の事業報告的な内容のものもあり、募集テーマに答える「これから」の建築と社会との関係について、自らの思索や考察を深めようとしたものは必ずしも多くはなかった。

(6) 審査委員長は、応募された論考が総じて、本賞に相応しい水準に達していないことを遺憾に覚えている。全ての著作における基本的な課題であるが、特に論考においては、用語の定義を明確にし、それに基づき論理を厳密に構成することが重要である。

2) 一次審査通過論考について

以下、受付番号順に、多少のコメントを記し、応募者・読者諸賢の参考に付したい（敬称略）。

No4 これからの建築と社会ーその関係を問う（岡本清文）

応募者の履歴からくる、既往の建築界に対するアンビヴァレントな態度・思考、スクラップアンドビルドに終始した戦後の建築界における時間概念の特徴等への言及は興味深い。しかし、大きな課題を構想しつつ、内容的には既視感があり、独自の新鮮な指摘には乏しい。応募者の代表作という「暖簾」に関わる展開を「建築と社会」の関係により深めていく論述が望まれる。

No6 これからの建築と社会ーその関係を問う（北村潤）

敢えて特徴的な文体で論述しており、応募者の属性に興味注がれた。建築がヴァナキュラーなものになっていくけれども建築家は必要という結論について、その検証が90年代半ばで止まっており現代性を欠いている嫌がある。なお、ヴァナキュリズムの定義・意義・功罪が必ずしも明確には論じられていない点が惜しまれる。

No7 人々がつくる『場所』という現象をとらえる（林田大作）

自らの研究成果を基礎にした「論考」であるが、やや既往論文紹介の感があり、その内実を深め当否を問い直す視点が弱く、「居心地の良い場所」のモデルには、例えば「空間の主體的支配性」といった観点もあり得るかもしれない。最後の、既存町家・民家の「改修」あるいは「手入れ文化」の提唱は、現代社会・建築界周知の観点であり、より一層の探求が望まれよう。

No13 AIがもたらす新たな「知」と社会（一居康夫）

「モザイク化」という自らの言葉を紡ぎ出し、新しい価値や概念を提示し、世界に対する新しい解釈を示そうとしている姿勢が評価され、更に深めていけばより大きく飛躍する可能性が感じられた。その一方で、「モザイク化」とは単機能的なものの無秩序な集積の恐れもあり、部分の集積で全体ができるという発想等に対して、現代社会の問題はさほど単純ではないのではないかという疑問もあった。

No17 建築と社会の幻想曲（伊熊昌治）

表題に謳われている通り、正に「幻想曲」的な論考であり、社会科学者の時間論議に照らした日本固有の価値観の時間的特性を論じている。しかし、他の文化圏や時間観念のあり方の考察が見られず、論述が多様に展開して必ずしも一貫せず、結論で提唱している「先延ばし」という発想には、その決断の現実性や結果の妥当性について疑問が付された。

No18 スルーアーキテクチャー

ー建築・社会・共同体のゆるい関わり合いー（西野翔）

「スルー」とか「スルーアーキテクチャー」という平易な、しかし新鮮な言葉を使って若い世代の感覚に自分の言葉をうまく当てはめ、新しい世界観や建築観を示そうとしており、オリジナリティが高く可能性の感じられる論考であると言える。しかし、「スルー」という発想の社会的意味や限界にも論及すべきであり、他の施設タイプについての考察、「スルー」の時間軸での意味を深めることが望まれる。

以上

審査委員 舟橋國男（委員長・大阪大学名誉教授）
岩前 篤（近畿大学教授）
花田佳明（神戸芸術工科大学教授）
山浦晋弘（安井建築設計事務所）
勝山太郎（本会編集委員長）

「奨励賞」

AIがもたらす新たな「知」と社会

一居康夫

株式会社大林組
本社設計本部設計ソリューション部
担当部長

1969年生まれ
早稲田大学卒。1992年株式会社大林組入社
2014年より現職。

はじめに

最近AIの話題を頻繁に聞く。今までも何度かこうしたブームがあったが、囲碁や将棋でプロが負けるとなると、今回は少し違うような気もする。また、雑誌やネットの記事で「こんな仕事がAIに奪われる」とか「AI活用で成果をあげる企業」といった見出しを目にしたり、実際にAI（AIと言われているものも含め）が稼働しているシーンを見たりすると、さすがに興味がわいてくる。AIについて語れるほど深く研究している訳でも知識があるわけでもなく、いまだにその言葉の定義も曖昧なままであるが、仮にAIが今よりも発達し、今よりも生活に浸透した場合、自分自身の仕事や日々の生活、また社会全体がどう変わるのか考えてみたいと思った。

少しAIが魔法の言葉になっていて、なんでも解決できるし、シンギュラリティが確実に起こるような過度の期待があるのは気がかりだ。ただ、社会は画期的な技術で変わるとするならば、AIがそれに当たるのかどうかを考察することで、すこし先に来る社会が予想できればと考えた。

今、社会状況や国際情勢も想定外の状況が発生し、普段の生活においては便利にはなっているものの、顕在的、潜在的な社会課題はなかなか解決されていかない。過去と現在を結んだ延長線上に未来があるとするならば、我々がアニメやSF映画の影響で子供の頃描いていたイメージや未来への憧れを、現代社会において子供たちが持てないのも納得出来る。AIが万能ではないとしても、今とは違う新たな道を開く無視できない要素であることは間違いない。少しでも未来が明るくなるよう、AIを前提とした社会において我々の果たすべき役割を考察してみる。

「知」の蓄積と社会の変化

活版印刷が発明されて、個々に内包されていた「知」を拡散させることが可能になった。知の伝達が「言葉」から「活字」への変革が起こった意味は大きい。宗教の布教が進んだことや、教育が一般化したことなど社会や生活が変革したといえる。また、書物を保管する箱として図書館という新たなビルディングタイプも生み出されている。近年のインターネットの普及も社会に対し、制度や仕組みを大きく変革させた。新たな社会課題を引き起こしている側面もあるが、確実に日々の生活が便利になっている。ネット上にはありとあらゆる分野の情報が蓄積され、場所を超越して閲覧することができる。「メディア論」のマーシャル・マクルーハンが、コンピュータやテレビの発展が地球を「地球村」にする、つまり距離を超越し、地球全体が一つの村のような感覚で共有されると言ったように、絶対的であった物理的な距離も超越させている。今では、世界中の砂粒より多いバイト数の情報がどこかに保存され、それを保管するためのデータセンターという新たなビルディングタイプも、世界各地で建設され続けている。

活版印刷もインターネットも共通して「知」の所在のあり様を変革させた。またそうした「知」の蓄積や拡散により社会制度や生活に影響をあたえ、それまでになかった価値観の建築も生み出している。まさに画期的な技術であったといえる。

しかし、これらも万能では無い。「知」そのものを他者が直接認識または共有することはできないため、その間には「言語」が媒介している。活版印刷もインターネットも基本は「言語」の集積だ。「知」は「言語」に置換され、逆に言語化できないものは共有できない。

い。そもそも「言語」は非常に強い。例えば、都市や建築において、我々が実際に体感して認識できているのはごく身近な部分に限定されており、多くの部分は「言語」から引き出されるイメージを記憶しているのではないかと思う。同じ建物を見たとしても「公共建築」と「オフィスビル」では記憶する建物のイメージは異なるように、記憶し「知」となるプロセスで「言語」の果たす役割は非常に大きい。社会のような実体のないものに至ってはその傾向がさらに強い。だが、「言語」も普遍的なモノではない。最近のニュースでもあったが「優性遺伝」、「劣性遺伝」が「顕在的」、「潜在的」と言い換えられたように、社会状況や情勢に左右される不確定さも持ち合わせている。また「言語」と「イメージ」との置換も個人差が大きく、ある言語に対するイメージも個々で異なるため、他者と「知」の共有ができていないかどうかは証明することができない。

AIの「知」

では、AIの「知」はどうだろうか。個人的なAIのイメージは、「2001年宇宙の旅」のHALから抜け出ていない。人が問いかけると、その答えをAIが自ら考えて「言語」として返してくる。そのやりとりには我々は「未来」を感じ、逆に怖さも覚えることになった。

現在、各社で出しているAIツールを少し試しているが、基本機能は「言語」、「画像」、「音声」を認識して「言語」となって返ってくる。前述のように人の認識が「言語」によるならば、当たり前だがAIからの答えも「言語」でなければ我々が認識できない。どうしても人との関係性においては、活版印刷もインターネットもAIでもやはり「言語」なのである。

しかし、AIが考えたことや問いかけられたことを人に認識させる前提がないとすればどうだろうか。最近の研究ではAIがディープラーニングによって概念や判断基準を自ら形成しているということだ。過去のデータを大量に学習することで、見せられた画像を判断するのは理解できるが、将棋AIが過去の棋譜にない手を打ち始めるとなると、そのロジックはすでに理解を超えている。ただし、そこには大きな可能性の広がりを感じられる。最初は人が設定したプログラムやデータを基本としているが、そこから新たな「知」を導き出していると考えられるからだ。人とAIは「言語」を媒介とするが、それらのデータ数が多くなれば、AIはそこから「言語化」していない、ある種の感情や感覚的なものを認識できるのではないかと思う。もちろんSF映画に出てくるように、人の意識や思考は読み取ることができないだろうが、少なくとも潜在的なニーズや「言語化」していない個人的な嗜

好などを把握することは可能である。すでにイー・コマースの世界ではそういった技術が確立されつつあるように思う。それが進んでいけば、経験から導き出したいいわゆる「暗黙知」を人とAIで共有することも可能になるだろう。

このように見てくると、社会に影響を与える画期的な技術は「知」と関係している。活版印刷は「知」の伝達、インターネットは「知」の距離の廃絶、AIは「暗黙知」の共有をもたらした（もたらす）と言えよう。また、この共有こそが、今までの社会に影響を与える技術と大きく異なる点でもある。

こうした「知」のあり方は当然社会や都市や建築や、身近な我々の生活に影響を与え、変化をもたらすことになるだろう。逆の言い方をすれば、社会も都市も生活も「知」で形成されているからに他ならないからだ。

「知」の結集の衰退

我々が生活している社会というのは、先に述べたように「知」の結集であり「知」の蓄積の結果だと考えている。建築も都市も同様で個々の「知」を結集し、その時点までの課題を解決してきた結果が、現在のあり様を形成している。国や地域や情勢などでその程度差こそあれ、場所ごとや環境条件ごとに、様々な「知」が集合することで、「より快適」でとか、「より便利で安全に」といった意志のもと生み出してきたものだ。ところがネット社会が隆盛してくると、実空間での「知」を結集しようとする意思が、徐々に薄れてきているように感じられてならない。実空間に比べ、仮想空間上での「知」の結びつきは強固になり、さらに影響力が強くなった。ネット上ではあらゆる場面でいわゆる「集合知」がすすみ、素早く課題が解決され、今も多くのサービスが生み出され続けている。

それに比べ、実空間では社会課題がなかなか解決されていかない。一つには社会構造が複雑になりすぎ、これまでの技術の蓄積だけでは解決できなくなり、また個々の「知」が社会の複雑化にともない、高度に細分化されすぎて、いざそれを結集しても、集合させるだけでは解決できないという側面もあるのではないだろうか。また、課題の解決は多大な労力があるし、実社会のコミュニケーションは煩わしい部分もある。社会や都市に対し無関心なのは、あらゆるところで面倒なのである。現在の不寛容な社会状況をみると、関心の範囲がごく身近な部分だけに限定されていて、自らが知覚できる範囲での利便性のみを追求しているように思われてならない。

毎年小学生の将来になりたい職業が発表されているが、最近では「YouTuber」が上位に来ているのが特徴的だ。高度成長期には「建築設計士」が上位に来ていたようで、自分の身

近な街や建築へ興味を持っていたのが、仮想空間上に関心が移っていることを顕著に表している。決してネット社会を否定しているわけでもないが、人が生活していく以上、都市も建築も仮想化できず、リアルなものとして存在しつづけるのだから、少しでも多くの人に関心を持ってもらい、もっと社会への積極的な参加も促していきたい。そこにAIが活用できるのではないかと考えた。

AIの群知能

最近興味が有り、アルゴリズム関連の書籍や資料を目にすることが多い。そこに魚の群れや、渡り鳥の隊列、蟻塚など自然発生的な事象を、関数で再現する例が記載されている。全体の動きを統率するリーダー的な存在がいなくても、それぞれがある一定のルールと目的を持って行動するとき、全体の統率が自然ととれ、その結果餌が取りやすいとか、天敵から身を守ることができた、というようなある種の「知」を獲得している。こうした集団として生み出される「知」を「群知能」と言うようだ。同じ「知」の集合でも「集合知」は形式知、つまり言語化できる「知」の集合によるものであるが、この「群知能」は「暗黙知」の集合や連動で生み出される新たな「知」と捉えられる。

AIとAIは言語を必要としないため、「暗黙知」自体を直接共有することができ、自然現象に見ることの「群知能」が形成しやすいのではないかと考えた。AIというとこれもHALのイメージかもしれないが、中央的なもので集中的なものイメージが強く、それ単体が多機能で、あらゆるものを制御していくイメージが強い。ちょうど人間の脳のように、様々なことが認識でき、認識したものから即座に判断し、その結果を表現することができるといったイメージだ。それを人よりはるかに高速で、より正確に処理できるものを「AI」と呼んでいることが多いように思う。AIと聞いた場合、多くの人が抱くイメージもそうしたものではないだろうか。

しかし、そのような全能的なAIは必要ないと考えている。結果的に全能的なAIができるのかもしれないが、もっと単機能というか、個別の目的に特化したAIが、その機能においてより深化していくことに期待したい。それはある意味現時点でも実現できていることが多い。AIと謳っていないものでも、ある部分では最適な制御が実施されている。おそらく今後のAIはそうした各部分の機能が充実し、それぞれが連携することで、あたかも群知能を持つように、全体として最適な方向に変化していくようになって考えられる。複雑化した社会構造のなかでも、細分化された各課題に対し、個々の問題解決に特化したAIが、それぞれを解決していけばよい。どれだけ面倒

な作業であっても、膨大なデータ数であっても、AIでは問題ない。また暗黙知も共有するため、言語化されていない感覚的な問題に対しても、具体的な解答を提供するようになると考えられる。

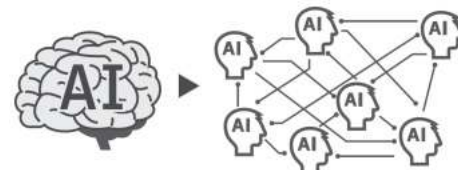


図1 AIの群知能イメージ

群知能がつくり出す新たな都市、建築像

では、仮にAIが様々な場面で活用され、「暗黙知」を共有し群知能を発揮した場合、都市や建築にはどのような変化が起こるだろうか。

例えば新たな街区を開発しようとする。今まではここはオフィス、ここは集合住宅といったように敷地、環境、経済条件をもとに配置を決めていく。過去の事例をもとに、「この立地ならテナントが入る」、「高い販売価格が見込める」といったような予測を行いながら計画していく。その時点では経験から得た「知」を反映した結果となっているのは間違いない。ただし、そこではオフィスビルや商業施設、住宅街などといった言語によるカテゴリーが存在し、街区計画はその組み合わせであるため、将来そこで生活する人々の、個々のニーズは当然わからないし反映することはできない。

「カテゴリー化」はそもそも自然発生的、計画的に関与せず集約することが目的だ。一般的には集約することで効率が良く利便性が高いとされていたが、感覚的なところに落とし込んでいくと、必ずしも快適ではないし、効率的でない部分を含んでいる。また都市問題の多くもそこに起因しているともいえる。

逆にAIの群知能を活用した場合はどうか。人が発信している情報や、行動から取得できるデータは多い。それぞれ単体だけで見ると、それほど意味のあるデータでなくても、それがつながると別の意味を持つようになる。例えばあるAIはひたすら交通信号の最適制御を繰り返す、別のAIは建物の空調制御を最適化し続けているとする。一見そこには因果関係はないが、AIがそれぞれから取得した「便利になった」とか「快適になった」というような「暗黙知」を共有することで、相関関係を見いだすようになると、そこに新たな「知」が形成される。現代社会において子供であっても高齢者であっても、生活している限り、行動や発言した記録を全く残さずにいることは不可能だ。どんな些細なものであっても今までは抽出するのが面倒で、残す意味を見出さなかっただけで、すでにデータは多くある。

バイタルセンサーの普及がもっと進めば、さらに個人的なデータは厚みを増していくだろう。そうした相関関係から、人々の顕在的、潜在的ニーズをAIが捉え、経済の動向、環境条件などと合わせて解析していくことになれば、その場所における、個々の細かなニーズを計画に反映することが可能になるのではないだろうか。例えばその場所では「働く場所と、住む場所と医療施設が求められ、住まいのとなりに病院、またその上に店舗。オフィスは中庭に面してカフェと向き合い住宅とも隣り合う」といったようなニーズがわかり、その組み合わせが街にとってより良い方向に行くとわかれば、建物や街区の用途が分散されていき、結果としては非カテゴリー化、言い換えると機能や空間の「モザイク化」が起きると考えられる。

「モザイク化」した計画ではオフィスビルという全体としての規定や言語化されたカテゴリーはなく、機能が混在し用途の細分化が起こり、〇〇ビルや〇〇フロアといった概念も消滅する可能性がある。街区レベルでも同様に、オフィス街、住宅街、商業地区というような街区としての「言語」はない。



図2 建築・都市のモザイク化イメージ

今、コンパクトシティや都市のダイバーシティ化などの議論も多く聞く。しかし、これらはまずコンパクトシティや街の多様化ありきで、「全体」を規定して部分を形成していくことになっており、その「言語化」が目的になっている。そういう意味では、従来型の街や建物の形成と同じだ。これに対し「モザイク化」はAIにより個々のデータをもとに算出されたものが結果として「モザイク化」するもので、「モザイク化」が目的ではない。魚が結果として、群れをつくり出しているように、都市でも建築でも、人々の生活に関する思いやニーズといった感情的、感覚的な情報が重要であり、結果として全体が良い方向に向かうことがAIの群知能に期待できるところだ。

全体が重要ではなくあくまでの部分の集合が全体をつくること、すなわちAIによる部分の最適化が最重要であり、そこには「言語」は必要ない。

都市や建築の変化がもたらす新たな社会

都市や建築の姿が「カテゴリー化」から「モザイク化」に変化した場合、社会はどのよ

うに変化するのか。一番大きな変化は、人が都市や建築に大きく関わるようになることだろう。それは専門家に限らず、また年齢や性別や国籍などにもよらず、全ての人が参加するようになると考えている。それは能動的な参加だけでなく、知らないうちに参加してきることもある。それほど意識していなくてもSNSに投稿した内容によって、その周りを取り巻く環境に変化を与えるということも十分考えられる。どんな細かなことでも、一見して意味のないものであっても、普通に生活しているだけで、考えていくことが仮想空間だけでなく、実空間にも反映されていくのだ。急進的な変化ではなくても、徐々にまた確実に変化が起こっていく。そういう体験をすることで、都市や建築や社会に対する興味も膨らんできて、より積極的な関与が促されていくことになると考えている。

こうした話題ではいつもジョージ・オーウェルの小説「1984」が描く監視社会との比較になる。小説と同様に生活自体が見透かされているような心地悪さがあるのも否定できない。だがAIがもたらす社会は、そうならないと考えている。「監視」社会ではやはり「全体」が規制され、「部分」へと展開されている。あくまでも全体をある方向に導くために手段として「監視」という規定を行い、部分として市民の情報を集めていく。しかし、ここで考えている社会はその逆だ。個々の思いや考えが全体を形成していく。「部分」が「全体」をつくっていく、あくまでもそこには目的としての「全体」があるわけではなく、結果でしかない。「全体」が最初から目的化されたり、規定されていないので、人の生活や考えにより常に変化し柔軟に対応していくと考えられる。AIは特定の意図した発言や行動から得るデータだけを処理するわけでもないため、人のコントロールはなかなか効かない。そういう意味では、人がコントロールする社会より、むしろ安心できる。

これは何も都市や建築に限ったことでなく、あらゆる部分で個人的な意見や潜在的なものが社会全体に反映されていくことになると考えられる。またそれぞれの思いが反映されていくと、今までの価値観に変化が生じるのは必至だ。全部がそうなるわけではないが、例えばモノを所有することよりも、モノを使用することに価値を見出すようになるのではないかと考えられる。最近レンタカーでも高級外車がラインナップされている。当然それを所有することに価値を見出す人もいるが、高額なレンタル料を払ってもそれを使用することに価値を見出している人もいるということだ。単にモノを運ぶとか、移動するという目的だけでなく、その付加価値自体にアクセスしているところが興味深い。また、最近では仮想通貨の浸透も著しい。絶対的な「モノ」

だった貨幣までもが仮想化されている。実物があるが、仮想であろうが、そこに価値を見出し、マイニングすることさえできれば、十分に機能するし、同等のモノと扱う事ができる。

おそらくこうした例に限らず、あらゆる面で使用価値を求めることになると考えられよう。もちろん建築も例外ではなく、「モザイク化」はある一例かもしれないが、使用価値を求めることで、その姿を確実に変えていくだろう。人の関与や関心もより強くなり、都市や建築がもっと身近になっていくに違いない。

知のオープン化と統合

こうした社会の変化に対し、我々は何をなすべきか。街や建物に関わり、それを通し少なからず人々の生活に影響を与えている建築従事者としてはより真摯に考えなくてはならない。

一番になすべきは情報のオープン化、いわば「知」のオープン化になるだろう。各個人、企業や団体が確保している情報をより広く開示していくべきだと考えている。先ほど所有することから使用価値に直接アクセスするようになる述べたが、当然情報も同様である。情報を囲っているだけではその価値は十分に発揮できなくなる。重要なのはそれらの情報を使いどういうサービスを生み出すかであり、情報を開示しても、各事業者の差別化は、その使用方法で競えば良いのだ。また価値観の変化は「企業」という「カテゴリー」も必要としなくなる可能性が高く、そもそも抱えている意味もなくなるかもしれない。AIを活用し、全体としていい方向に向かうためにはそうしたオープン化は不可欠であり、実施しなければならない。またオープン化されたデータをいかにマイニングするかも重要だ。一見無意味に見えるものでも、そこに意味を見出せば、その情報はただのデータから「知」に変化する。AIはデータを処理していくことはできるが、人の生活に照らし合わせ価値観を見いだすことは不可能だ。それこそ人の領域であり、人の「知」や今までの経験値を発揮できる点である。

二番目には「知の統合」を進めなければならないと考えている。現代社会は高度に細分化された知識や技術がそれぞれ進化・深化してきたものである。深化が進んだため、なかなか他分野との融合がはかれていない。文献によると大正9年の国勢調査で申告された職業は約3万5000種、現在の「日本標準職業分類」によると2167種となっており、100年弱の間に16分の1に縮小しているとのことだ。100年前は一人で多様な職種をこなしていたと読み取れる。これには仕事に関しカテゴリー化されていなかったのに違いない。そうした時代から変化し、仕事が企業という「カテゴ

リー」に帰属することになり、統合され職種自体が減ってしまったのだろう。専門知識は必要だし、資格が必要な職業もある。ただ重要なのはその専門知識を、その専門分野だけで止めないことではないだろうか。専門が何であれ、日々の生活を営んでいるのであれば、解決すべき課題に対する考えはきっとある。どんな分野であろうと関与できるのではないだろうか。また、専門領域での「知」が実は他分野で活かされる可能性もあるかもしれないのだ。現代社会のように複雑な課題が多い社会では、それぞれの業界や産業分野にとらわれず、課題の解決に「知」を統合すべきである。どの業界にしても情報技術は欠かせないように、もっと多様な技術、異分野の関与が必要になるのは間違いない。最近自動車メーカーにも機械系以外の学生が多く就職していると聞くように、課題解決に向けてAIを有効に活用するためにも、多様化の範囲を拡大していく必要がある。難しく専門的な計算や煩わしい基礎的な処理はAIがこなすのであれば、他の分野も身近になるに違いない。

今「オープンイノベーション」があらゆる業界においてキーワードになっているようだが、組む相手を見つければオープンでも、結果はクローズされており、企業内や組織などの特定の技術に帰属されている状況が多いように思う。だが必要なのは結果も含めたオープン化であり、そのオープンされたものの、イノベーションで創り出されたものにも、多くの人がアクセスできることが重要である。そこでこそ「知」の統合がはかれるのではないかと考えている。

こうしたオープン化が進めば2167種に2176種をかけるくらいの、今までと比較して桁違いな可能性があり、そうした可能性もAIの媒介があってこそだと思う。その複雑な組み合わせにより、統合された「知」に期待したい。

デザインすること

2011年の東日本大震災時に道路の崩壊で、車両の通行に支障が生じた。ホンダは自社製のカーナビから収集した通行データを公開し、通行可能箇所を見える化することで、運行状況の改善を促したことがあった。これが2011年度のグッドデザイン大賞を受賞している。

具体的なモノのデザインではなく、情報を収集するシステムとデータのオープン化、またそれが問題を解決することまでも含めて評価されている点に着目したい。

デザインとはそもそも問題を解決するための考えや、概念を構成して、それを様々な手法により表現することである。単体のカタチやコトの表現がデザインと解釈されることが一般的だが、本来の意味は問題解決であり、結果だけがデザインではないと言える。こうしたデザインの領域を拡大していくことが今

後重要になってくると考えている。プロダクトでも建築や都市でも社会システムでもあらゆる分野でこうした領域の拡大が必要だ。また、そこには「知」を結集させていくことこそデザインと認識することが重要だろう。多くの人が関与し、AIも活用されていき、課題解決に向けたモノや、表現や、システムが構築されていくこと。どこまでが専門家の関与でどこまでが他分野の「知」で、どこまでがAIによる解析した結果であるかは関係なく、より良い結果を導くための仕組みづくりがデザインという行為になるだろう。

高度な解析や、蓄積が必要な知識や煩わしい解析は、「群知能」も「暗黙知」も持つAIが担うとすれば、様々な分野に個々の考えを発信していくことは容易になり、それに対するハードルも下がる。より広い分野に、より多くの人が個々の領域にとらわれず関与していくことができれば、様々な課題は解決されていくに違いない。当然、いままで通りモノやコトを表現することもデザインだし、全体の仕組みを考えることもデザインだ。また今後はAIに学習するためのデータを揃えることやマイニングすること。また、データ化されていない項目を数値化することもデザインと言えるだろう。言語のカテゴリーにとらわれないという価値観が、一般化するだけでもその領域は広がっていくと考えている。

明るい未来につなげる

かつてMITのネグロポンティがインターネットの発達した社会状況を言い当てたようには、AIが一般化した社会像を明確な確信をもって描ける訳でもない。またAIの可能性がどこまで、限界がどこにあるかも自分自身よくわかっていない。AIにより画期的な未来が近くまで来ているかもしれないし、そうではないかもしれない。ただ考えていることは明るい未来になるよう、また明るい未来になると思えるよう動き出さないといけないということだ。予想もしていないようなイノベーションが起これ、社会に変革をもたらすことも重要だが、もっと大切なことは、日々の生活に関する問題をいかに解決していくかということだろう。生活での課題、より身近な課題の解決の積み重ねが社会問題の解決につながると考えているからだ。より身近な問題の解決はAIが得意とするところだし、その部分については現在でも確立できているところもある。当面はその組み合わせを考えるというところが必要である。特に生活に直結している建築に携わる我々としては、建物単体だけでなく、それを創り、また運用していく部分まで含めたデザインが重要であり、課題の抽出や、より多くの人の意見を集めるための仕組みをデザインすることも重要であると考えている。今後その仕組みの中でAIは欠かせな

い存在になるのは間違いない。AIが導いた解答を具体的なカタチに表現することも重要であり、気持ち良いと思える空間や、例えば海外の教会で感じる神々しさみたいな空間体験をAIに教えることや数値化することも必要である。仮想空間と実空間の橋渡しを行うのは実空間の住人である、人の仕事である。AIが発達すればするほどその役割の重要度は増していくに違いない。なぜなら仮想空間と実空間は表裏一体の関係で、仮想空間の厚みが増せば、バランスをとるため、それに呼応して実空間の厚みも増加させる必要があるためだ。

少し話はそれるが、最近自動車の変革に関する話題が多い。エンジンから電気自動車へ変革し、自動運転がここ何年かで起こるといいう。既存の自動車メーカーだけでなく多くの新たなメーカーから電気自動車が発売されるようになった。将来の完成形はわからないが、そこにはイノベーションを少なからず感じている。しかし、当然変わらないものもある。タイヤがあり、ハンドルで操作し、窓にはワイパーが付いている。100年前に発売されたフォードも最新のテスラでもその構成はほとんど変わらない。SFが描く世界のように自動車が空を飛ばなくても、自動車に関する課題は解決の方向に向かっている。地上を走ることから、空を飛ぶという変革に向けてデザインしたのではなく、より身近な部分での課題解決に向けたデザインの積み重ねが、新たな方向を示している良い例だろう。

車は今まで通り地上を走り、都市も雲を超えるような超高層でなくてもよい。ただ人々がより快適で、健康で、便利で安心な生活を送れるよう、またそれらが「より」から「いつも」に変わり、ずっと継続していく社会にむけ、画期的なイノベーションよりも、AIやあらゆる分野の専門家や、多くの人が関わる仕組み、また「知」の統合が容易な開かれた仕組み、言うなれば「オープン・コラボレーション」による新たなスタイルをデザインしていきたいと考えている。

最近、日本のものづくりの信頼がゆらいでいる。ソフトやコンテンツ分野の充実も必要だが、日本としてのプライドはやはり高品質なものづくりにあると考えている。信頼の回復に向けて、あらゆるものをオープン化し「知」を統合することが急務ではないだろうか。

参考文献

「ナリワイをつくる：人生を盗まれない働き方」
伊藤 洋志 東京書籍

「奨励賞」

スルーアーキテクチャー

—建築・社会・共同体の
ゆるい関わり合い—

西野 翔

慶應義塾大学大学院
政策・メディア研究科修士課程

1993年埼玉県出身。千葉県育ち。慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科石川初研究室所属。東洋大学理工学部建築学科藤村龍至研究室卒業後、木元洋佑建築設計室にてアルバイト、neucitoraにてインターンを経て現所属。

概要

スルーアーキテクチャーとは「目的地化しない、交通インフラによって必然的に作られ、無視され通過される建築」である。その一つである高速道路のサービスエリアでは、廊下と売店やフードコートが一体となっており土産物が必ず目に入る。手に取っても良いし、手に取ったとしても買わなくても良いという緩い宣伝がなされており、スルーしてもしなくてもよい、利用者と売店の緩い関係が生まれている。この緩い繋がりを利用し、これまでにスルーされてきた問題との関わりを作る方法がスルーアーキテクチャーである。

1 はじめに

スルーアーキテクチャーとは、「目的地化しない建築」のことである。人々は日々の生活の中で様々な建築と関わる。特に都市に住む私たちは自然かつ無意識に建築と関わりを持っている。もちろん望んで関わる建築もある。それは例えばテーマパークであったり、良い景色の見える展望台であったり、あるいは毎日通う会社や学校、住んでいる家であったりする。それらの建築は人々の生活のランドマーク的存在であり、人々の意識の上にある建築である。一方で人々の目に留まらない、使っているけれども見向きもされない建築がある。それがスルーアーキテクチャーである。私はこのスルーアーキテクチャーを鉄道の駅、高速道路のサービスエリアや一般道のバス停といった、「交通インフラによって必然的に作られ、無視され通過される建築」と定義した。これらの建築は日々利用されているが、あくまでその先の目的地への通過点でしかなく、目的地化しない建築と言えるのではないだろうか、と考えたためである。しかし、駅やサービスエリアも近年は商業化や機能併設が益々進み目的地となりつつあるとも言える。また無視されている物として広義にスルーアーキテクチャーを捉えると、道にある電柱やブロック塀、通りすぎるだけの住宅街や商店街といった、もはやこの世にあるすべてのものがスルーアーキテクチャーではないのだろうか、とさえ思ってしまうのである。ゆえにここでスルーアーキテクチャーという言葉を文としてまとめ、定めていきたい。人々に目を向けられないほど生活に密接しつつも、適度なキョリを保っている建築こそが、多くの人々の生活や精神に影響を与えていると私は考えている。よってこの建築を変えることが社会を変える第一歩だろうと思いを綴る。

2 スルーとは

2.1 「スルー」という言葉の意味

「スルー」という言葉の意味からまず考えてみる。スルーとはもともと英語の「Through」という言葉から生まれた和製英語である。英語のThroughは「通過する、貫く」という意味の単語である。それがカタカナとなり「無視する」という意味で使われ始めた。わかりやすくいうと、ドライブスルーのスルーは通過する意味の「Through」であり、既読スルーのスルーは無視するという意味の「スルー」である。

スルーという和製英語の始まりは90年代に空気の読めない書きこみをスルーして、話を進める、という行為から始まった。その後様々なところで使われ、00年代の漫画、久米田康治著『さよなら絶望先生11』（講談社、2007）では、仏教の放生会と絡めて、「スルーフード」ならぬ「スルーライフ」¹としてネタに出され、自分にとって都合の悪いことを無視しなければ、人間は生きてはゆけない、と現代社会を揶揄している。（図表1）

また最近では「既読スルー」という言葉としてスルーが再び現れてきた。メールやチャットに似たSNS、LINEでは、メッセージの受信者がメッセージを見たことが「既読」という文字で送信者側に伝わるという仕組みがある。そこで受信者がメッセージを見たにも関わらず一向に返信をしないことを「既読スルー」と呼び、揶揄している。

「スルー」という言葉は再び現代性を持ち始めているのではないだろうか。



図表1
(久米田康治著『さよなら絶望先生第十一集』
講談社、2007年、P68)

2.2 絶望先生における「スルーライフ」

絶望先生の「スルーライフ」という言葉は、その場しのぎや現代社会を揶揄するという意味だけではなく、私たちの人間というものの性質を表わしているのではないだろうか。

この漫画では、「都合の悪いことを無視すること」として「スルー」を捉えている。また様々な問題が隠されている世の中では、それを見たとしても、見て見ぬ振りをすることで安定した生活を送ることができ、そのような生き方を揶揄しネタにこれをスローライフならぬ「スルーライフ」として名付けている。しかしこの「スルーライフ」という言葉はその意味に留まらない。

2.3 情報のスルー

実は私たちは世の中全てのものをスルーしているとも言える。地面の道路のひび割れ、空

の雲、今読んでいる文章の拙さ、人々は生きるうちに途方もない量の情報に囲まれて生きている。その状況の中で全てのものを意識することはできず、目に見えるもののほとんどの情報を無視せざるをえない。スルーせずには生きていくことはできないのである。また今日食べたハンバーガーは誰が作ったか、どこで作られたか、牛はどのように肉になったのか等、目に見えない物事の背景もスルーせずには生きてはゆけない。では人はどの情報をスルーし、どの情報を意識しているのだろうか。例えば、トランプの神経衰弱。このゲームをやっている時、人はトランプに集中する。同一のトランプの裏の柄、トランプの置いてある机の目地や、相手の表情等は見えているが見えていない、意識されず無視される情報である。一方で意識しているのはトランプの配置やその裏に隠された数字とマークである。

このように人は無意識の内に意識するもの、認識するものを選択している。選択された情報は、その人にとって必要な目的をもったものであり、そしてその人の目的とは関係ないほとんどのものは意識から排除され、スルーされるのである。

竹内薫、丸山篤史によると、
「僕らは、流通している情報量の約2.7万分の1しか消費できず、消費したと言っても、その1000分の1しか知覚できていない」²
という。それほどまでに日常的に私たちは沢山のものをスルーしている。絶望先生の「スルーライフ」という言葉は、ただの不都合な真実を無視する生き方に留まらず、人間の生き方そのものをあらわしていると言えるだろう。

2.4 情報の繰り返し

一方で特定の目的、人が求める行為と関係ない情報が認識されることがある。

例えば昔、アメリカの映画館で、映画を見終わった人がしきりにコーラを飲みたくなるという事件が起こった。これは映画の一秒24枚のフィルムの中にコーラのフィルムを混ぜ、人々がコーラを見たにも関わらず、コーラを見たと思わせない一瞬だけコーラを見せることで、コーラの購買欲をあおるというものである。「サブリミナル効果」として名前も付けられており、人々の意識にも上がらない一瞬だけでも関わらず広告として成り立っている。一瞬のものでなくてもテレビのCMや電車の中吊り広告のようにしばらく目に入るものも、人々の欲望を喚起しようとしている。

「好きでも嫌いでもない対象の刺激を繰り返すと、その対象の好ましさは増す。」³
これを「露出効果」⁴という。始めはスルーされていても、たくさん見せられることで人々の意識の中に刷り込まれ、スルーさせず購買につなげる方法である。

2.5 大量の情報に埋没する情報

パーソナルコンピュータやインターネットにより、世の中にあふれる情報が激増した。また近年では、スマートフォンからだれもが情報を気軽に発信できるようになり、さらに情報が増殖している。情報量が増えるにつれ私たちが触れる情報の量も増えている。さらにスルーされる情報も増えているように感じる。その中で普段目に留まらないものは忘れさられてしまい、埋没してしまう。その中で埋没しないようにするためには、何度も何度も目の前に現れることが重要である。

たとえスルーされたとしても、何度も見ることによって人々の意識に上がってくる。ツイッターでは会社や新製品の宣伝用に多くのツイッターアカウントが作られている。しかし大多数のアカウントは見向きもされない。一方でごく少数のアカウントはフォロワーを多く獲得しつつある。その特徴として挙げられるのが、ある特定の数時間ごとに合間を少し開けて何度かツイートをしていることである。ここでツイート数が少ないと目に入らず、逆に多すぎると煙たがられフォローを外されてしまうのである。不足でも過剰でもない、スルーされるくらいが宣伝として成り立つのである。

3 スルーアーキテクチャー —受け流される建築—

3.1 通過される建築

英語のthroughの意味を持つ建築を考える。要するに「通過する」、もしくは「通過される建築」である。

都市は交通インフラによって作られている。移動手段の獲得により、人々は郊外に安らぎの住いを持ち、都心のオフィスに勤めることができている。移動を円滑にすることで機能を集中させ効率を上げている。交通インフラが都市を都市たらしめている。

この移動が盛んな都市において、せわしなく生きる私たちは様々なものをスルーしている。例えばさびれた商店街である。休日に訪れるショッピングモールと違い、商店街は平日にただ通り過ぎる通り道でしかない。だがもし商店街に行きつけのお店や魅力的な店ができ

た時、その商店街はスルーされる存在ではなくなり、意識に上がってくるだろう。目的が変化することにより、目的地は変わるだろう。しかし、いつまでたっても目的地とならない建築がある。それが、交通インフラに付随し、受け流される建築、スルーアーキテクチャーである。ここでは駅、バス停、サービスエリアの3つの例を挙げる。

3.2 駅

例えば駅の乗降ホームである。ホームは多くの人が利用し通り過ぎていく。通路としての余白が十分に確保され、脇に自動販売機やベンチが置かれている。いくら埋めても通行に影響しない壁には広告が所狭しと張られている。通行だけでなく多少の購買や広告がある場所である。しかし、通過することを前提に設計されており、ただの通過点でしかない。だがしかし、通勤や通学で毎日目にする駅のホームが人々に与えている情報や影響は計り知れないだろう。

元々は駅自体もただの通過点でしかなかったが、1947年に阪急電鉄の小林一三が駅に百貨店を作ったのをはじめとして、駅の商業化は進み、巨大な駅が次々と建設されている。また人が多く集まるという点で、駅は町の中心としての役割を担っている。しかし、実際のところは起こっているのは、どこでも均一な商業化であり、巨大なボリュームは既存の商店街や、元々のまちの中心や、地域性をただ食いつぶしている。埼玉県川越では、駅ができたことにより、もとあった町の中心（これもまた河川舟運という交通インフラによるものであるが）が移動し、商人たちが何十年もかけて作り上げた町は廃れた。この町は現在「小江戸 蔵の町並み」として再生したが、そこに住む人は少なく、あくまで表層が完成された観光地として成功している。

3.3 バス停

次にバス停である。道路にポツン、ポツンとあるこの建築は、建築というよりただの設置物である。地方のよくあるものは棒の上にちょこんと丸い標識の付いた簡素なものだが、海外の都市によくあるバス停では必ず屋根があり、遮蔽物があり、そして広告があり、建築としてのかたちを作っている。バス停という近くもなく遠くない距離感のスペースではしばしば会話が生まれ、程よいコミュニケーションが生まれている。しかしこのバス停もそれ以上の建築的試みがあるわけではなく、

日本では同一規格で無個性、広告止まりの商業の域をでないものである。

3.4 サービスエリア

最後に高速道路のサービスエリアを挙げる。サービスエリアとは高速道路に付随する休憩施設であり、主にトイレと自動販売機、レストランが整備されている。高速道路唯一の休憩所であるため、ハイウェイオアシスと称されることもある。ちなみにパーキングエリアはサービスエリアより規模が小さいものであり、サービスエリアが50kmごとに設置されているのに対して、パーキングエリアはそれよりも細かく15kmごとに設置されている。高速道路は用地買収や、経路を短くすることを考え、主に郊外を走っている。そのためサービスエリアも必然的に郊外に立地しており、かつ住宅などが立地しづらい高台にあることが多く、郊外の景色が見え、これがまあまあきれいであったり、微妙であったりする。絶景ではないがまあまあ楽しめる景色をサービスエリアでは見ることができる。

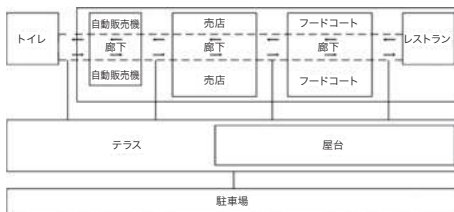
また高速道路は全国どこからでも1時間で乗れるように整備されている。かつサービスエリアは50kmごと、パーキングエリアは15kmごとに整備されているため、車道のあるところならばどんなところでも、長くとも1時間15分程でサービスエリアかパーキングエリアに行くことができるのである。サービスエリアはまあまあアクセスの良い場所なのである。

サービスエリアによるとフードコートを始め様々なものを食べることができる。フードコートではチェーン店やありきたりなメニューの中にご当地ラーメン、ご当地そばといったご当地グルメが紛れている。ガッツリご当地グルメをたべた後は、フードコートから外に出て、屋台の立ち並ぶテラスへ行く。ここでは串焼きやフライドポテト、クレープといった割高ながらもおいしいB級グルメがそろっている。濃い味のデザートを食べた後は、中に戻り、売店の土産物を漁る。色とりどりのお土産物が並び、さらにその奥には地元の特産品が並んでいる。土産物のパッケージはデザインや、色、形などで主張しあいせめぎ合っている。また超高級というわけでもないが、おいしいB級グルメがそろっている。以上、景色、アクセス、グルメの3つから、サービスエリアはある意味すべてがまあまあであり、B級な建築と言えるのではないだろうか。また土産物や食べ物、景色といったものはサービスエリアごとに違いがあり、僅か

ながらもその土地の地域性を表わしており、全国に整備された地域を気軽に知れる場だろう。サービスエリアは同一規格、パターンがありながらも、僅かながら地域を知れるという点で、駅やバス停とは違う様子を見せている。建築、駅、バス、サービスエリアは通過され、人が集まることを利用して変化を続けている。一方でどれも商業の域を出ず、それ以上の働きをなしていない。通過されるからこそ果たせる役割があるだろう。ここでサービスエリアの空間構成からそのヒントを探ってみる。

3.5 サービスエリアの空間構成

サービスエリアの建物は大きく二つに別れている。トイレ棟とそれ以外の売店やフードコートなどの機能を集約した施設である。これはトイレと売店を運営する会社が違うために現れている形である。大抵のサービスエリアは横長であり、動線が車道と平行に通っている。端っこにトイレがあり正反対の位置にレストランが位置する。車をでてトイレに向かい、トイレを出て売店やフードコートのある棟へと向かう。扉がスライドし、中に入ると、廊下の壁に自動販売機が敷き詰められている。その先には売店があり、土産物が廊下と思われる動線の右にも左にも置かれている。さらに進んだフードコートの動線にも右や左に座席が置かれている。(図表2)



サービスエリアの構成
廊下を内包するように空間が連続している。お土産やご当地グルメに自然と目がいく空間構成である。

図表2 サービスエリアの構成 (筆者作成)

サービスエリアの空間構成の特徴は廊下と室の区別が曖昧なところだ。自動販売機も売店もフードコートも目と鼻の先、ちょっと手や足を伸ばせば届く距離に、飲料、土産物、料理が並んでいる。特に売店は動線を少し塞ぐほどに商品が溢れ出している。ショッピングモールは動線が充分に確保されているため、脇の商品は目に入るものの、距離は遠い。しかし、サービスエリアは商品との距離が近く、必ず目に入る陳列となっている。陳列が動線を変化させていたり、人が少しでも多いと、意識に上げそれを避けなければならない。ここで注目したいのは土産物が

必ず目に入るが、手に取っても良いし、手に取ったとしても買わなくても良いという緩い宣伝がなされていることである。歩いている場所は動線でもあり売店でもある。そこにいる人の状況、欲望によってどちらにも捉えることができる。スルーしてもしなくてもよい、利用者と売店の緩い関係が生まれている。サービスエリアは高速道路という動線から見ても、建物の中の動線から見てもスルーする構造を利用した建築と言えるだろう。

4 スルーされた問題

ここではサービスエリアで得られた知見を踏まえて「スルーアーキテクチャー」を建築ではなく、スルーする・させる構造として考えてみる。人々が今まで見て見ぬふりをしていたために顕在化している問題として、インフラストラクチャー、地方、人間関係を取り上げてみる。

4.1 インフラ

私たちの生活は様々なインフラストラクチャーによって支えられている。トイレに入ると、明かりをつけ(電気)、用を足し(下水)、手を洗う(上水)という具合にトイレに行く行為さえも様々なインフラによって成立している。しかし、普段忙しく生活を送る私たちはそれらを意識することはなく、故障したときに怒りをぶつけるとともに認識するのである。

こういったライフラインであるインフラは普段は都市の地下に埋められ見えなくなっている。唯一見えており、日本の郊外風景のある意味象徴的であった電線さえも地中化され見えなくなりつつある。その中で起こった事故が2011年の原発事故である。

都市インフラのクラウド化により、インフラは集約され、都市から離れたところに作ることができるようになった。その代表が電気であり、発電所である。東京に電気を送るために作られた福島第一原子力発電所がニュースにできることは事故前にはなく、会社のイメージキャラクターがCMにおいて「電気を大切にね!」というばかりであった。しかしその裏では、様々な問題が隠されていた。

もし仮に、事故前に電力に関心が集まり、議論が深まっていたならば、事故は防げたかもしれない。原発事故後は原発反対運動が各地で起こり、人々の関心が多く集まった。そしてその熱はまた冷めつつある。

4.2 地方

地方がスルーされている。田中角栄の国土改造計画により 日本全国に新幹線、高速道路、トンネルなど交通インフラが整備された。人々が自由に行き来できるようにすることで、地方と都心の格差をなくするという試みであり、大都市と地方の物理的な距離が縮まった。しかしそれがもたらしたのは、大都市東京への人口流入と地方の衰退であった。

地方から都心へと人口が流れ続けると様々な弊害が起こる。特に日本で顕著なのが、少子高齢化である。出生率や既婚率の高い地方に対し、東京は出生率、既婚率が共に低く、「人口のブラックホール」(増田, 2014) といわれているほどである。また流入した人口が高齢化して、病院が不足したり、一部の地域に人口が集中して、新たな学校が必要になったりといった問題も起きている。人口の増える都心だけでなく、地方では人口減少により、駅や学校、役所といったまちの中心を統廃合で失ったり、近くの病院が無くなり、病院に何十分もバスで揺られて通うなど、最低限度の生活にすら支障が生じ、消滅の危機にある。ただ一方で全国の至る所でまちおこしの活動が活発になっている。ただ大抵のまちおこしは、実行力のある担い手となった人の力によるものであり、点であり、誰もができることではなく、かつ全てがうまくいっているわけではない。全国の地方の問題を解決するには至らぬことが現実である。

4.3 人間関係

人間関係がスルーされている。人と話そうというとき、昔は直接会って話す以外の手段はなかった。しかし電話が生まれ、インターネットが普及し、さらにメールやSNSが生まれた。そんな中で起こっているのがコミュニケーションの保留と取捨選択である。会話や電話は直ぐに応答することが求められる。だまったり、電話に出ないことも拒絶ではあるが、それらもまた応答の一つであり、反応することに変わりはない。しかし、メール等インターネットを介したコミュニケーションは一度見てすぐに返す必要はなく、緊急でない限り、その日のうちや三日以内に返すなど、コミュニケーションを保留することができるようになった。そして最近ではLINEの既読スルーに見られるように、返答を保留していることが相手にもわかるようになった。ただメールが返ってこないならば、何か事情があるだろうと、催促のメールを送り直せばよいのだが、読

むと「既読」とつくLINEにおいては催促することすらできない。そして保留される人間関係は、次に取捨選択され始めたのである。以前は人が生きていくためには向こう三軒両隣というようにご近所づきあいをし、輪に加わることが生活に求められた。しかし今となってはマンションの防犯は強化され、隣にどんな人が住んでいるのか、ということを全く知らなくても生きていける。そんな中でSNSが普及し、コミュニケーションが散発的かつ自由になった。ツイッターでは幾多の文章や言葉で人々が発言をしているが、それを見るか見ないか、応答するか応答しないかは個人の自由であり、自分が行いたいコミュニケーションだけを行うことができる。逆にそれ以外のものは、目には入るが意識の上には登らず、目にすら入らないようになっている。人間関係が取捨選択できるようになったのだ。本来人間が協働し合うのが社会の基本であり、協働によって組織を成り立たせてきた。しかし人間関係が取捨選択される社会においては、関係のない問題は対岸の火事として処理され関心は薄らぐばかりである。普段表に出ないものは一度表に出ると、人々の関心が集まる。しかしそれが持続するわけではなく、次第に風化し、人々の意識から外れていく…ただの娯楽として消費されるように。必要なのは、議論すべき問題に対して、持続的に関心を寄せ続けてもらうことである。

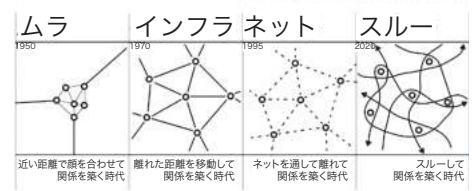
5 スルーアーキテクチャー —スルーし合うゆるい関わり 合いの形

私はこのスルーされている問題をスルーアーキテクチャーによって解決できないかと考えている。ここでいうスルーアーキテクチャーはスルーされる建築に留まらない「スルーされ、スルーしあう構造」のことである。関わりが無視される時代において、人々が目に見えないものと関係を持つためには、まずは関わりを持たせ、世間の議論の土台にあげることが第一である。しかし、強制的に関係を持たせようとしても煙たがられ関わりは生まれない。そこでスルーしあう緩やかな関係の気づき方を提案する。(図表3)

村社会のように直接会って関係を保つのではなく、交通インフラを使い直接会いにいくわけでもなく、ネットを使い全く会わないのでもなく、程よくスルーし合いつつゆるい関係を持続させることがこの時代に適した関わり方である。

スルーによるゆるい関わり

顔を付き合せての交流よりもネットで繋がるようなゆるい関係を人々は望んでいるのではないだろうか。ネットのような弱いつながりでありながらも、リアルとの偶然性を併せ持つ、関係の作り方を提案する。スルーさせまくることで、関係づくりのきっかけをつくっていく。



図表3 関わり合いのかたち (筆者作成)

2017年ハロウィーンに渋谷を訪れると、人々がスクランブル交差点、道玄坂やセンター街で仮装をして写真を撮り合う風景が見られる。渋谷スクランブル交差点が「45秒間の広場」⁵と呼ばれるように、ここでは通過するというルールのもとで人々の自由なふるまいが見られる。仮装をした人々は歩き、同じく仮装をした人を見つけては「一緒に写真撮りませんか？」と声をかけては写真を撮り、少し喋ったかと思えばまた離れていく。このようなその場で関わりつつも、本質的には関わらない、緩い関係の一つが渋谷に現れている。

—参考文献

- 竹内薫、丸山篤史著『99.996%はスルー』講談社、2015年
久米田康治著『さよなら絶望先生第十一集』講談社、2007年
松谷明彦著『東京劣化』PHP研究所、2015年
増田寛也著『地方消滅—東京一極集中が招く人口急減』中央公論新社、2014年
William Lidwell, Kritina Holden, Jill Butler『Design Rule Index [第2版] —デザイン、新・25+100の法則』ビー・エヌ・エヌ新社、2010年
吉田尚記著『ツイッターってラジオだ! 〜ナンバーワンツイッター番組のパーソナリティがつぶやくあなたの味方を増やす59の方法〜』講談社、2010年
Rem Koolhaas, Judy Chung Chuihua, Jeffrey Inaba, Sze Tsung Leong編『The Harvard Design School Guide to Shopping: Harvard Design School Project on the City (Taschen specials)』Taschen America LLC, 2002年
田村圭介著『迷い迷って渋谷駅 日本一の「迷宮ターミナル」の謎を解く』光文社、2013年

—引用文献

- 1 久米田康治著『さよなら絶望先生第十一集』講談社、2007年、P68
- 2 竹内薫、丸山篤史著『99.996%はスルー』講談社、2015年、P140
- 3, 4 William Lidwell, Kritina Holden, Jill Butler『Design Rule Index [第2版] —デザイン、新・25+100の法則』ビー・エヌ・エヌ新社、2010年、P86
- 5 田村圭介著『迷い迷って渋谷駅 日本一の「迷宮ターミナル」の謎を解く』光文社、2013年、P15

「佳作」

これからの建築と社会 —その関係を問う

岡本清文

近畿大学文芸学部 教授
AIR一級建築士事務所代表

1983年 京都市立芸術大学環境デザイン専攻卒業
同年株式会社竹中工務店設計部入社
1992～3年 TAKENAKA UK 駐在（ロンドン）
1996～7年 日米経営科学研究所（ハワイ）
シーザ、ペリ&アソシエーツ（コネチカット）
1997年 竹中工務店大阪設計部
2004年 近畿大学文芸学部芸術学科
2016年 同 文化デザイン学科教授

1 序. バラックとしての近代

この国で建築を語ることは、特別な枠組みの中でしかできない。この国で建築に携わる人々は、またとない幸運に恵まれている。と同時に、この上ない不運にも見舞われている。

日本の近代化は、内発的にではなく、応力に対する反力のような形で起こった。黒船来航に端を発する明治の開国以来、大きな世界戦争を幾度か繰り返し、遂には国中悉皆焦土と化す悲惨な結果に終わった。概ね現代社会の構造と規範は、1945年の振り出しから築かれてきたものである。それに加え、環太平洋に位置する小さな島国には、いつの世も様々な天災の試練が課せられてきた。

このように、人為的にしろ、自然現象にしろ、日本の近代化は〈災害〉によって動き出したのである。先行したヨーロッパの近代化が、宗教革命、そして市民革命から産業革命へと、内発的な革命（流血と覚悟と堅固な意思＝コンセプト）によって築き上げてきた歴史とは大きく異なる。

新しい都市は、〈破壊〉という強烈な外力で都度初期化された更地から始まり、そこには〈復興〉という明快な目的と、無意識のうちに〈措置〉という行動規範が伴わざるを得なかった。復興措置に求められる姿勢は、迅速性と刷新性である。喪失した物を再び取り戻すには、悠長に熟考してられない。戦後出現した闇市や簡易住宅に象徴されるバラック建築は、生き抜くための、なり振り構わぬ埒（ねぐら）作りであり、とりあえずという措置感が籠められている。また復興とは、従前に対する反省と改善に基づく行動であり、それまでの欠点を補う何かを提案しなければならない。ここに、「過去の否定」という根本的な姿勢が立ち現われる。敗戦後の焼け野原を原風景とする日本の都市像は、70年以上たった今日に至るまで、いわばバラックの刷新を繰り返してきた結果であり、「とりあえず精神」は、飽食と過剰の現在においても、なお連綿と続いているのではないだろうか。

最優先されるべきは、高邁な未来のコンセプトよりも明日の都市機能の再建である。インフラや交通機関や住空間の確保が国家的な重点課題となり、思いがけず建築界はその中核を担うという好機を得た。スクラップ＆ビルドが疑う余地もない前提条件であり、建築＝新築という概念が当然のごとく定着した。日本の近代化は、まさに建築という代用特性によって実現され、新しい都市建設に莫大な予算とエネルギーが注がれた。政治や経済、時に文化も、建築業界の少なからぬ影響下で体制が形成されていった。

建築に携わる人々は、確かに新しい建物一ひいてはその集合体としての新しい都市を作ってはきたものの、はたして時間をかけて熟成するような豊かな社会を作って来たのだろうか？ 国家も、時代の更新を繰り返しながら、大局的なシナリオを作る暇はなかった。そうこうしている内に、ヨーロッパでポストモダンが出現し、ご多分に漏れず直輸入した日本の建築界では、そもそも確固たる筋書きとして描き切れていないモダニズムを、必然性のない文脈で解体し、いわばブリコラージュによって、図らずも世界に類を見ないユニークな建築が誕生していった。（日本の現代アートも同じような位置付けである。）

激動の戦後を何とかすり抜けて来られたのは、判断停止（エポケー）による楽観視。その裏で常につきまとうモラトリウム意識。冒頭で述べた幸運と不運とは、戦後日本の建築家が背負わねばならなかったこのような状況であり、我々はまずその特殊性を再認識することから始めなければならない。

2 資本主義というパラダイム

丸山真男は、『日本の思想』（1956年）の中で、小林秀雄の〈歴史はつまるところ思い出〉という命題を引いて、こう継いでいる。

新たなものが過去との十全な対決なしに次々と摂取されるから、新たな物の勝利は驚くほどに早い。過去は自覚的に現在と向き合わず、傍らに追いやられ、あるいは下に沈降して意識から「忘却」される。それは時あって突如として「思い出」として噴出することになる。（中略）

E・H・カーが、「歴史とは過去と現代の絶え間ない対話である」と述べたのとは対照的である。丸山や小林の日本人に対する評論は、戦後復興において、より正鵠を得得的中した。古い過去を否定し、新しい未来だけを志向するベクトルをもって、我々は短時間で、世界中が驚愕するような復興を成し遂げた。その立役者でもある建築は、時代に牽引され、並走し、時に迷走してきた。

近代が生み出した最大のスローガンは、「成長・拡大」であり、これは資本主義の宿命でもある。第二次世界大戦を経て、冷戦構造が西側陣営の勝利に終わって以来、資本主義は怪物のように巨大化して世界中を這い回った。この怪物は、市場経済を餌に拡大し続ける成長システムであり、科学技術が拡大路線を後押しし、大量生産と大量消費社会を築いた。そういう中で刻まれた20世紀は、世界のヘゲモニーがヨーロッパ（イギリス）からアメリカに移った時代である。それと同時に人びとの価値観も大きく変化した。資本主義は新大陸に引き継がれ、更に拡大と成長を目指す、利潤を生み出せるような投資先が徐々になくなってきた。

アメリカは1975年のベトナム戦争敗退で大きく躓き、すでに地理的・物理的空間を拡大することが不可能になっている事を痛感した。これは地球上に新たな市場開拓ができるような地理的・物理的空間＝実物経済がなくなってしまった事を象徴している。本来ならばその時点で資本主義に代わる新たなシステムを模索すべきであったが、対案たる社会主義はすでに破綻している状況下、アメリカは全く別の空間を生み出すことで資本主義の延命を図った。すなわち「電子・金融空間」に利潤のチャンスを見つけて、ITと金融自由化を結合させた「金融帝国」を築こうと考えたのである。もはやモノづくりやサービスなどの実態経済では利潤を高めることはできないと、金融のグローバル化を図って、世界の余剰金を「電子・金融空間」に呼び込んだ。しかしアメリカの金融帝国化は、決して国民を豊かにすることはなく、むしろ格差社会を推し進め、その顛末が2008年のリーマンショックである。

一水野和夫『資本主義の終焉と歴史の危機』（集英社新書 2014）より

日本の建築界は、戦後復興と軌を一にして資本主義の駆動力にもなってきた結果、文化、歴史、哲学、道徳、芸術など、資本主義の文脈に馴染まない要素が次々と篩（ふるい）にかけられ、工学、経済、産業、情報という様相がより色濃く残った。例えば、世界でも稀な住宅産業という独特の巨大経済圏が出現し、家を車や電化製品と同じように商品化してしまった。現に家電メーカーが住宅もプロダクト製品として販売している。それに異を唱えるように、住宅作家たちは、デザイナーではなく、建築家と名乗って果敢に奮闘してきたが、社会を変えるには、彼らのやり方には大きな戦略が欠け、あまりにも戦術的な個別の特殊解であった。

成長・拡大と共に、もう1つの資本主義のイデオロギーは「進歩」という概念である。しかし、いつの間にか進歩こそが豊かさや幸福をもたらすという普遍的真理にすり替わっていった。日本の建築界にとっても、「進歩主義」は金科玉条のごとき基本姿勢になっている。何かしら今までにない新しい物を作る精神が、建築家と名乗る人びとに、まるで強迫観念のように憑依している。建築とは、すなわち新建築を作ることと同義語で、見たこともないような空間や、考えたこともないようなコンセプトで、世界に唯一の作品を創る事に血道を上げている。また、それを絶賛しているかのような建築ジャーナルの存在がある。建築雑誌は、新規性に満ち、前衛的な建築ばかりを取り上げて、視覚的刺激を一層デフォルメするようなグラビア写真を満載している。それらの殆どは、周囲の風景ばかりか、人や什器備品、照明まで消されて、つまり生活—もっと言えば社会—をトリミングし、あるいは社会からトリミングされ、ハイブランドファッションや美術品のように扱われている。こういう雑誌を見た若い建築家や学生達は、敏感に感受し、影響され、もっと新奇な物を、もっと強烈な物をと拍車がかかっているように思える。

もちろん世界の建築界も同じような傾向を持っているが、少なくとも、私自身がイギリスとアメリカでの建築設計業務を通じて感じたことは、ヨーロッパでは、まだ前衛という概念が成立しうるだけ、対岸として保守や正統という厚い価値体系が厳然とあり、アメリカは国家そのものが、ある意味で世界の前衛として築かれたので、個性や独創性は生きてゆく上での必須条件のようなものであるが、建築に関して言えば、新規性やモダンデザインは思いの外、一般社会には受け入れられていない。

18～19世紀に始まり、20世紀の世界を形成してきた資本主義は既に行き詰って、構造的限界を迎えている。世界史上極めて特異な長期的ゼロ金利状態の日本は、アメリカにもまして資本主義の最終局面に立っていると言える。しかし拡大主義と進歩主義という20世紀

的パラダイムを、世界中で最も信心し、享受してきた国は日本ではないだろうか。その国の建築界は、紛うことなきモダニズム・ファナティックといってもよい。

新しい時代を切り開くためには、この20世紀の価値観を乗り越えなければならないが、どちらかと言えば産業の後衛に位置付けられている建築は、そう先駆的にパラダイムシフトはできない。遍く人間の価値形成の要となるのは教育であり、特に専門領域の学びの場である高等教育の場に重要な鍵があると思う。

3 教育の視点から

明治政府は富国強兵政策に則り、殖産興業、税制、兵制と共に学制を布いた。高等教育機関として大学が設置され、建築も国家建設のための重要な科学技術として大学教育に取り入れられた。当初は工部省の管轄であったが、後に工部大学校となってより今日まで、日本の建築教育は「工学」の学術領域に立脚して行われてきた。建築に限らず、諸学問は明治以前から日本にも存在したが、西洋から取り入れた近代科学の文脈は、自国で培ってきたものとは大きく異なっていた。日本の近代社会に芽が萌した建築とは、お雇い外国人によって教授される本場の西洋建築の事であって、明治の教育以降、それまでの建築の概念が様変わりした。

一つは、伝統的な木造建築が大学教育の外に置かれたことである。当初工部省の下に置かれた工学寮では、幕末より受け継ぐ家塾的教育の中で、従来の伝統的建築技術や指物・挽物などといった伝統技術も取り入れられていたが、建築教育が大学に集約されるにつれ、いつの間にか日本古来の木造建築が蚊帳の外に置かれ、主軸は西洋文明から発生した鉄骨やRC造建築になった。強靱で近代的な国家を実現するためには、過去の伝統文化に拘泥してはいられなかったのである。

この傾向は、他の領域、中でも芸術教育において顕著であった。学制発布と共に開始された美術や音楽教育は、西洋模倣一点張りで、デッサンや遠近法など西洋絵画の美学を習得させる一方で、狩野派や浮世絵は除外された。音楽教室にはピアノが鎮座し、壁にはベートーベンやシューベルトの肖像画が掲げられる一方、謡曲や三味線が教えられることはなかった。

このような西洋崇拜主義の中で、唯一例外的に日本文化の居場所を高等教育に担保したのは、皮肉にも東京美術学校（現東京藝大）を岡倉天心と共に立ち上げた、お雇い外国人アーネスト・F・フェノロサであった。その頃の日本では、歴史上最悪のパンダリズムともいえる廃仏毀釈運動の真最中で、全国各地の寺院、仏像が次々と日本人の手によって破壊されていた。その光景を目の当たりにしたフェノロサは衝撃を受け、自らの文化遺産を塵くずのように扱う日本人に対して、自国の文化が如何に素晴らしいかを説いて回った。

引き換え、建築教育界には、ほぼ同時期にジョサイア・コンドルが来日しているが、彼は与えられた使命に従って専ら日本人の蒙を啓いた。産業革命の国から来た若者の問題意識は、フェノロサや天心とは少し異なり、日本はあくまでも教養や異国趣味、そして恋愛の対象であったようだ。

今一つの大きな変化は、設計と施工が切り離されたことである。従来の建築は、設計と施工を連続的に司る棟梁や大工頭という匠によって建物は作られた。デザインだけを行う設計者という職能は存在しなかった。しかし明治以降の建築教育では、建築家という新しいプロフェッショナルを養成し、設計という概念を定着させた。本家ヨーロッパにおいても、中世までは建築家はいなかった。建築を司っていたのは、主にはマスター・メイソン（石工の親方）で、彼らもまた設計者であり、施工者であった。ところが、ルネッサンス時代の人文学者、画家、そして建築家でもあったL・バティスタ・アルベルティが建物の設計のみを行い、建造は他の建築家に任せるといふ、設計・施工の分離を行った。当然日本の建築教育に持ち込まれたのは、アルベルティ以降の建築スタイルである。

以上のように、明治に始まった日本の建築教育の特徴は、

- 一．建築を工学の視点で捉えた。
- 二．自国の伝統的文化を除外してきた。
- 三．設計と施工を分断して捉えた。

と言えよう。その結果、建築（設計）は、ごく一般的な社会生活とはやや距離を置いた、特殊な高度専門分野として確立され、ともすれば、マニアックな技術者集団の胸襟は、社会や人間に対して親しく開かれていないように感じる。欧米で暮らした時、一般の人々の建築に対する興味の大きさと理解度の高さには常々感心させられた。様々な場で、自分が建築家であることを明かす度に、驚くほどの見識や見解を持って建築について尋ね、自らも語る。日本で専門外の人からそういった態度で接せられた事は殆どない。向こうでは、一般の人々が新しい建築情報も結構知っている代わりに、建築家達は思いの外建築メディアを気にかけていない（基本的に他人の事を必要以上に気にしていない）ので、隣の国に出来た話題作も案外知らなかったりする。日本は全くこの逆で、設計関係者は世界中の建築情報を隈なく採取しているが、一般の人びとは建築などに特別な興味を持っていない。建築が社会と離れていると、つくづく感じる。

私は建築設計の仕事に長く携わっているが、いわゆる正統な建築教育を受けていない。芸術大学で空間デザインを学び、芸術という体系の中で環境や空間や建築について考えてきた。大学があった京都という場所柄、自ずと古い物に興味を惹かれ、モダンデザインの洗礼を受ける機会より、歴史的建造物に多く接

してきた。卒業後は大手ゼネコンに入社し、工学部出身の同期に遅ればせながら、一から建築を学んだと言ってよい。

彼らと話すと、自分の専門知識の浅さもさることながら、建築言語や見方や発想がかなり異なっていることに気付いた。言い知れぬ不安と劣等感に苛まれ、ここでやっていけるだろうかと大いに動揺した。「建築教育を受けていないから、そういう素人的な発想をするのだ」という、やや差別的な批評を何度も受けた。とりわけ自分が部外者である事を実感させられたのは、建築士の受験資格であった。工学系出身の場合、大学院卒であれば入社年度に一級建築士受験資格が与えられるが、自分の場合は高卒と全く同じ扱いで、まず数年のキャリアを経た後に二級建築士の受験から始めねばならず、芸術大学で費やした時間は、建築の世界にとっては何ら意味を持たないという事実で消滅した。

他方で、彼らが思いの外、芸術や美術の世界に疎いことに驚いた。絵画や彫刻、さらに言えば、詩や音楽と併存して建築があると信じて疑わなかった私にとって、例えばアルド・ロッシを知っていながら、ジョルジュ・デ・キリコを知らないのには違和感を覚えた。80年代前半当時、ナム・ジュン・パイクやヨセフ・ボイス、ジョン・ケージといった作家を、周りの大半が知らなかったのは意外であった。建築学科ではそういう教育は殆ど成されていないのであろうか。

さらに気づいたことは、建築設計を行う人たちが、インテリアデザインにあまり関心を抱いていない事実である。当時社内には意匠設計という部門があり、インテリアデザインは主にそこで対応していた。その部門には、芸大や美大出身者が多く、私も最初はそこに配属されたが、後に設計部門に移籍した。内部空間こそ、人が実際に使用し、関わり、体験する場である。いわば建築の本質ともいえる要素であるのに、設計者は外観やプログラミングとしての空間構成に注力し、細部、素材、色彩計画、家具など、五感的もしくは身体的とでも言おうか、そのような要素はインテリアデザイナーに委ねている。例えばオフィスビルの設計はしても、オフィスの設計は家具メーカーに依頼しているといった具合である。ヨーロッパでは建築家の大半の業務が、改修工事＝インテリアデザインという事を思えば、これも日本特有の傾向である。

確かに日本の建築設計の世界では、「デザイン」という言葉には一種軽蔑の意味合いが籠められている。デザイン科出身の私自身「君はデザイナーだから…」という口調もよく聞かされた。接してきた多くの建築家たちは、自らをデザイナーとは考えていないようだ。デザイナーとは、表層の色形を飾り立てる人という認識で、建築家は、視認できる形態操作よりも、経済、法律、技術、機能、環境、エネルギー等、目には見えない複雑な諸条件を、形而上の思考操作で問題解決する高度プ

ログラマーという認識であろう。

しかし、ここで指摘しておきたいのは、その形而上の思考操作自体が、“design”の本義だということである。ライフデザインやキャリアデザインという言葉がある通り、“design”とは本来、計画や構想を意味し、決して図案や意匠を指すばかりではないので、「デザイン」という言葉や概念への偏見は払拭する必要がある。そして建築は工学にとどまらず、芸術学、デザイン学、社会学、哲学、経済学など、諸学問を統合した学術体系の中で教えられ、学ぶべきである。

私は20年間の建築設計実務を経たのち、大学に移って十余年デザイン教育に携わってきた。現在は総合大学の文芸学部で空間デザインを教えている。私のデザイン教育の根幹には建築の思考体系がある。実に建築ほど総合的叡智を集めた創造はない。

新たな学科を設立し、デザイン教育に感性学やプロデュース要素を取り込んだ。今まで工学系や芸術系で成されてきた建築・デザイン専門教育と一線を画す点は、建築家やデザイナーなど〈作り手〉を養成するばかりではなく、レベル高き〈使い手〉を育てるという視点である。専門知識と実習経験を積んだ彼らが、創造的思考を身に着けて、将来感性豊かな目利きとして発注者の立場になる時、建築や都市や社会は、自ずとより豊かさを増すであろう。

かつてロンドンで仕事をした時に痛感したのは、王室はもとより、行政担当者から企業人、一般市民に至るまでの、都市や建築、デザインに対する見識と美意識の高さである。そういう民度によって、あの街は作られているのである。これからの日本の建築教育には、優秀な技術者育成もさることながら、賢明な発注者や、良質な消費者を育てるという発想も必要ではないだろうか。

4 アルベルティの時間殺し

加藤耕一著『時がつくる建築』（東京大学出版会、2017）は、今日の建築界にきわめて多くの示唆を与えてくれる。著者は西洋建築史研究の視点から、

われわれ日本人は西洋における既存建築再利用の歴史をほとんど知らず、翻って日本の伝統的木造建築が部材の再利用を繰り返してきた歴史とも現代社会は断絶している。と前提し、近代の建築観を、

あたかもすべての建築は、はじめに敷地（更地）が与えられ、敷地から考えることが設計のスタート地点であるというのが建築教育の基本であり、じつは「敷地」が生まれる前に、そこに「建物」があったということ、既存建物が破壊され更地にされたという「エピソード・ゼロ」にはほとんど関心が払われることはなかった。

と指摘する。これは、戦後の日本建築が辿ってきた道を、災害一破壊一復興というプロセ

スと見るこの論考と共通する。その上で加藤はこう続ける。

建設に長大な時間をかけてきた前時代の建築は、その時々々の社会ニーズに応じて建てながら変化し、悪く言えば「場当たりの」であり、とても「計画的」とは言えない。近代の建築観のなかで、われわれは「最終的な完成」のことを「竣工」と呼び、「絶対的ななはじまり」を「着工」とよぶ。20世紀の建築家は多くの場合、このわずかな時間に、その建築の「作品」としての理想を見出してきた。

今でこそ、とかく異端視されるサグラダ・ファミリア以上に、何代にも引き継ぎながら造り上げられる中世の建築を見れば、そこには絶対的な始まりも、最終的な完成も存在しなかった事は想像に難くない。パリの聳えるノートルダム寺院の姿一つとっても、それは明らかである。“凍れる音楽”になぞらえて言えば、尖塔を欠いたまま何百年も佇む姿は、まさに石造りの未完成交響曲である。

一人の建築家が、建設の始まりと終わりに予定調和的な監理責任を持って関わる一今日では自明の認識や規範が根本から覆される問題提起である。さらに加藤は、建築史家のM・トラクテンバークの著作『時間のなかの建物』を引いて、前近代の世界において、建築は深く時間の恩恵を受けていたが、時間は知らぬ間に建築の敵と断定され、長期にわたる建設に内在する諸問題への伝統的な妥協を拒絶し、建築制作における確固たる力である時間を抑え込もうとした〈アルベルティの時間殺し（chronicide）〉というメルクマールを提示している。

確かに近代の建築家は原作者として建築を司る権利を得たが、その代償として、孤独感と潜在的な時間恐怖症に陥ってしまった。竣工時点が作品としての輝かしい頂点であり、シミやキズ一つない真っ白な状態は、時間とともに確実に汚れ朽ちてゆく。建築家の仕事は頭の中にあった理想的な空間を実現する（竣工）までで、建築主に引き渡された途端に手を離れ、関係を断つ。

建築主とは換言すれば〈社会〉ではないだろうか。また建築とは〈社会の翻訳〉とも考えられる。〈建築と社会〉の関係性に対する意識は、ここに露呈されている。時間恐怖症から逃れるように、建築設計者たちは工事完成後、引き渡しまでの僅かなタイミングを見計らって竣工写真を撮る。社会に放たれた現実の建築は、今から長い時間と共に紆余曲折を経てゆくが、建築家の手元に残るアイデアとしての建築は、竣工アルバムの中に焼き付けられたまま時間を止めている。そして建築雑誌は、まるでモダニストたちの時間恐怖を慰め共感するかのごとく、誕生の瞬間の、穢れなき記念写真をカタログ化し、建築は商品として月毎に入れ替えられ、消費されてゆくのである。

今日建築は、なお前世紀的価値観を引きずりながら、建築家の強烈な個を追い求めるか、さもなければ市場経済の理屈で演繹的に導き出されるか、という二極に分断されているように見える。両極のバランスを取るからこそが最も難しく、建築の社会性はその葛藤と均衡によって発揮されるのではないだろうか。勿論そのような建築も多く作られてはいるが、日本の建築界では、そういった誠実で寡黙な建築に対する評価があまりにも低い。

その要因の一端は、個性やオリジナリティを煽るような、入りの建築教育、そして出口としての建築ジャーナリズム（特に建築評論界）にあると思う。また、ナイーブな建築家を擁護する立場からなのか、設計施工という日本文化に根差したシステムに対しては、世間は概して厳しい眼や批判的態度が潜在していることも、ゼネコンに長く務めた経験からひしと感じ取っている。あたかも設計者は、独自の構想を貫徹するためには、何事からも自由な身であらねばならない、とばかりに。このような純粋主義も、もしかすると人文学的な曖昧さを許容しない自然科学〈工学〉の規範が影響しているのだろうか。あるいは逆に、近代人文主義〈ヒューマニズム〉が、個性を不可侵なまで労（いたわ）った結果なのだろうか。

とまれ、建築に携わる人たちは今一度立ち止まって、壮大な歴史軸の視点から、現代に瀾漫している時間恐怖症の自覚を促し、アルベルティによって抹殺された時間を再び蘇生させる道を模索してゆかねばならない。

5 最終章. 建築を超えて

21世紀は2001年のアメリカ同時多発テロで始まった。白昼夢のようにゆっくりと崩壊してゆく世界貿易センタービル。そこに見たのは、新しい時代が、20世紀的価値観である資本主義や合理主義の壊滅によって幕を開けるという現代の寓話であった。

9.11の翌年、2002年9月9日の早朝、突然家の電話が鳴り響いた。会社の同僚から、今「中座」が燃えているとー。受話器の向こうから現場の騒然とした様子が伝わって来る。取るものも取り敢えず駆けつけてみれば、辺り一面煙と異臭が立ち込めて、けたたましいサイレンと尋常ではない緊張感に包囲された。激しく炎上している大屋根を目の前に、強烈な熱風を浴びながらも、私はまたもや夢を見ているかの不思議な感覚に陥った。つい一週間前、解体寸前の建物に入る機会を得て、楽屋裏から奈落まで、暗い館内を隅々まで見て回った矢先であった。永遠に幕を下ろして静かに解体を待つ芝居小屋は、沈黙の中に一種独特の凄味が漂っていた。特別印象的だったのは、奈落の底に祀られた芝右衛門狸の祠で、後から、このお狸様の祟りではないかという噂も流れた。

作業員の不注意によるガス爆発であったが、

当時勤めていたゼネコンが解体工事元請けとして全責任を負うかたちで、類焼した法善寺横丁の店舗再建プロジェクトが立ち上がった。私はまさに火中の栗を拾う心境で、そのプロジェクトに自ら飛び込んだ。設計者が加害者で、施主が被害者という特異な構図の中、『正弁丹吾亭』という老舗割烹店を担当することになった。明治26年創業の長きにわたって営んできた商いが、愛着のある店舗と共に忽然と焼失したのである。初対面場で、怒りのやり場さえ見失って茫然自失する施主の前に、どういう面持ちで挨拶し、何を話したのか、今となってはもう思い出せない。

再建における施主希望は、基本的には受け入れるが、裏で保険会社が補償条件に合致させるべく逐一チェックしている為に、無制限に要望を聞き入れる訳にもいかない。難しい交渉は、最前線に立つ設計担当者が自ずと担うことになった。重い仕事であった。災害ユートピアもディストピアも見えた。運命共同体でありながら対峙する関係一。被害者の絶望に投げかける加害者からの提案一。掴み難く測り切れないものの狭間に、何とかして一歩を踏み入れなければならなかった。

店は元の姿のまま再建する方針に決まり、建築本体と外装を私が、内装は施主が直接依頼したインテリア設計事務所で行う事になった。何度目かの定例会議で、インテリア設計側から、吹き抜けに掛けるアート作品が提案された。若い作家の和紙による作品であったが、私はどうしてもそれが腑に落ちなかった。何故この作品を今ここに飾る必要があるのか？壁に飾られるアートが、被害者にとって壁以上の必然性を持つのか？

ちょうどそのころ、施主からこういう話を聞かされた。色々な物が焼かれてしまったが、最も残念なのは、代々溜めてきた暖簾である。四季それぞれに木綿や麻を使い、染色や書体も折々変えて詠えてきた数十枚の暖簾は、店の歴史と魂そのものであった。それが焼けてしまったことが何よりも悲しいー。と静かに涙された。私はこの時、改めて取り返しのつかない過ちを実感し、建築によって一体何が答えられるのかを自問した。

焼け跡から収集した全ての残留物は、証拠物品として店舗ごとにコンテナで保管されていた。私はどうするというあてもなく、暖簾の残骸が少しでも残っていないかを調べてもらうと、やがてプロジェクト対策室に段ボール2箱が持ち込まれた。箱を開けた途端、部屋中に焼け焦げた匂いと放水に濡れそぼった布束の湿気が充満し、火災の様子が生々しく蘇った。ブルーシートの上に、半ば黒焦げに焼け落ちた何種類もの暖簾を一枚ずつ慎重に並べてみると、まるで人々の集団焼死体に見えた。ふと、見も知らぬ1945年が脳裏によぎり、我々はここから立ち上がったのだという自覚が背中を突き抜けた。

数日後、インテリア事務所のアート案に異を唱え、この暖簾の残骸を繋ぎ合わせて、一

つの大きな作品に仕立てることを提案した。その時の状況からすれば、施主側についたコンサルタントの提案に、加害者側が口を扶むことはタブーであった。が、施主は私の提案を受け入れてくれた。その時どきの記憶と、馴染み客の手垢が染み込んだ暖簾の裂を継ぎ接いで、正弁丹吾亭の文字を再び並べ合わせ、最後に『十色百味千客万来』と謹んで筆で銘を記した。

「取り返しのつかない災難であったが、その惨劇がなければ、店の宝と歴史をこのような姿で多くのお客様に披露することは決まらなかった。忌まわしい火災も歴史の一行に書き加えられ、失った過去は取り戻せない。悲喜こもごも全てを丸ごと抱え込みながら、せめて未来を照らす一条の光を見失わないように、培ってきた時間を素材にして、新しい祈りの形ができたことは嬉しいー。」

最後に施主からそういう意味の言葉を頂いた。

冒頭で、この国はかねてより災害に見舞われては一から立て直し、その都度新しい社会を目指して前進してきたと述べた。法善寺横丁再建プロジェクトも、その凝縮された姿である。失ったものをどう理解し、新しい時代に歴史をいかに継ぐか。時間は巻き戻すことも、進めることも止めることもできない。しかし創造の力で、新しい時間の流れを形作ることにはできる。建築で社会を築くとは、畢竟そういう営みではないかと思う。

これまで超高層ビルや巨大商業施設、時には海外での華々しい飲食店舗や豪華な別荘など、数々の建築を作ってきたが、法善寺横丁で静かに時を見守る暖簾の額もまた、私にとっての紛うことなき『建築』であり、精根を尽くした私の代表作である。



焼け残った暖簾の残骸 2003年4月11日



正弁丹吾亭 暖簾裂地縫合額「十色百味千客万来」

「佳作」

これからの建築と社会 —その関係を問う

北村 潤

芦原太郎建築事務所
大阪オフィス

1977年 京都大学大学院工学研究科
建築学専攻修士課程修了
東畑建築事務所を経て現在に至る
作品 吹田市文化会館（メイシアター）
田原本青垣生涯学習センター
紀の川市打田生涯学習センター
堺市さかい利晶の杜

アタシさあ大阪のとある地方にあるゲーダイの建築学科の一応大学院に行ってるんだけど、同じ芸術大学でも東京上野の芸大って「藝大」っていうのよ。なんか権威がかってヘンなのよね。ゲージュツが「藝術」なんてね、誰も変えようと思わないのかしらねえ。大学改革ってんならまず名前を見直してんだよ。ところでさあ。今度のプチ論文課題っていうのが「これからの建築と社会—その関係を問う」っていうのよ。なんか頭ぐらぐらしてきちゃう。関西の地方のしかも文章偏差値のかなり低いゲーダイなんだからさあ、もっと吉本流に「建築はどんなときにずっこけるか」とか「笑える建築を問う」くらいの課題にし

てくれたらいいのに、「これからの建築と社会」だよお、こんな課題はお偉くてごりっばな「藝大」向きじゃないのかねえ。

ともあれ、課題を提出しないと卒業させないっていうからしょうがない、手探りで、少しずつ考えてみることにしますか。

建築が社会的な存在であることは誰でもが認めることで、まちなみをつくっている大きな要素なんだから。でもそれは建築の外部のことですよ。たとえば住宅の内部は、社会とどんな関わりを持っているかといえば、そこに住む人にとってはどうでもいいこと。

もっと大きな建築を考えてみても、事務所ビルなんていうのもセキュリティがきびしくて、誰でもが入れるわけじゃないんだし、そこで働く人たちをひとつの社会っていうかコミュニティとするなら社会的な場所って言えるかもしれないけれど、それは社会っていう概念をかなり限定してのことですよ。ということは、住宅も事務所ビルも私的な建築であって、社会的には内部がどんなことになっていても社会とは切り離されていると思うのよ。

ランドスケープオフィスなんていうのは、新しい働き方に対応しているんだろうけどさあ、建築と社会の関係でいえばあんまり関係なさそうだと思うわけ。最近地球温暖化に配慮した事務所ビルとかを売り物にしている、もちろん大事なことから、それを追求したビルのかたちも変わっていくことで、まちの風景も変わっていくこともあるんだろうけど、それでどうよという感じ。

もしもですよ、土地が国有化というか社会への共有化が図られて、住宅の私的領域がどんどん小さくなって、住宅の内部がまちに開かれていくようなことになったら、確かに建築は変わっていくよねえ。でもそんなことはありえないことのように思うね。だって人間の家族の在り方ってそんなに変わっていくとは思えない。

事務所ビルだっておなじ、資本が共有されない限り、みんな自分の領域を他者から守ろうとするわけよ、だからセキュリティはどんどん厳しくなって、会社の内部が社会に開かれていくことは考えにくい。だから住宅や事務所ビルっていうのは、どんなにかこよくできてても、それはそれで美しいまちをつくっていくことに貢献はしてるんだろうけど、これからの建築と社会の関係が変わるようなことにはならないと思うのよ。さっきも言ったけど、地球温暖化に対する対策を担うとか、昔はCASBEEとかなかったんだからね、あるいは高齢化社会になってきたこととか、やさしいまちづくりとかでユニバーサルデザインなんて新しい概念が建築に付加されていくことはあるんだろうけど、それがこれからの建

築と社会との新しい関係といえるほどのことではない。ということで「オシマイ」となってしまっただけ。そうはいかないよねえ。

これからの建築と社会の新しい関係がつけられていくのは、建築をつくる側からいえば、建築の内部が開いていくことと思うの。

住宅にしてもオフィスビルにしても私的領域を外部に、それはまちとは限らなくて、環境といってもいいんだけど、どんどん開いていくことかな。それは建築の境界がやわらかくなることよ。内部と外部の境界があいまいになっていくイメージ。

建築の公共性っていえば、住宅とかオフィスビルじゃなくて市庁舎とか、図書館とかホールとかいう建築のジャンルがあるじゃない。公共建築とかいわれている建築の一番のいいところはただ（無料）で過ごせるところがいっぱいあることなんだろうと思う。しかもその場所が緑に囲まれていて、気持ちのいい風が通って、だれにも文句をいわれずに座っている場所があることなんだろうね。まあいけばフリースペースって勝手に言ったりしてるんだけど。

建築って機能的な部分と回遊性を持つてる部分からできてるって思うのよ。機能的な部分は内部に閉じられていて、回遊部分が外部に開かれて、そこがフリースペースになる。だから回遊空間の割合が高いほどその建築の公共性が高いっていえる。公園なんかほぼ100%回遊空間だからね。

住宅だって周りに緑を植えて近所のひとが緑を楽しめれば立派な公共性をもつじゃない。たとえば中庭をみんなに開放して、自治会のイベントに提供するとかできていけば住宅にだって回遊空間は生まれるよね。高齢者が多くなっていく住宅地って地域コミュニティをつくっていく仕組みが必要なんだろうと思うのよ。建築というハードにはそんなに力はないんだろうけど、まちに開いていく部分をみんなが少しずつでもつくっていけば、コミュニティができていきかけにはなると期待するんだけどね。

つまりは新しい建築と社会の関係って内部と外部の関係をどうつくっていくかということ。そもそもわたしたちがつくる建築ってモダンイズム建築なわけで、現代建築といってもモダンイズムからは完全に放たれていないと思うのよ。モダンイズムの思想は機械の時代で機能優先、効率優先で走ってきたもんだから、公害っていう言い方は古いんだけどさあ、CO₂排出や原発とかいろんな問題の付けが回ってきてるわけよね。

近代建築って、西洋建築の歴史に限れば、産業革命だとか、鉄、ガラス、鉄筋コンクリートなんかの新しい素材ができてきたから、そ

れまでの建築とはまったく異なる建築が生まれてきたとかいうけど、なぜそれまでの様式建築とは違う建築のかたちが生まれてきたかはよくわかんない。建築も人間がつくるもので、建築家の表現なわけだから作り手の側が変わらないとつくるものも変わらないんじゃないか。近代建築の前には折衷主義の建築の時代があってその様式を否定することで、近代建築が生れてきたって歴史の教科書には書かれていて、折衷主義の建築って悪もの扱いで、何か折衷主義の建築を倒して近代建築それもインターナショナルスタイルが勝ち上がったみたい言い方をしている本もあったのよね。

でもさあ、そもそもルネサンスだってローマ建築を参照してルネサンス様式ができているんだから、ある意味同じなのよ。ヨーロッパの建築って古典主義の建築とゴシックに代表されるロマン主義の建築に二分して考えると分かりやすいけど、折衷主義の建築ってギリシャ建築の引用、ネオグreekというのよね、から始まってネオルネサンス、ネオゴシックって百科総攬、様式の百貨店状態の感じがする。折衷主義の時代って18世紀の初めごろから始まったらしいんだけど、この時代に博物館が初めて作られたらしいのよ。まあいわばまち全体が建築博物館みたいなもんだった。その精神的背景みたいのは、すべてを並べるということで、あらゆるかたちを等価なものとしてみるっていうこと、そりゃ自分たちの様式はなんだっていうことになるよね。

でも、近代的精神っていうものの本質がそういう客観的というか世界と距離感をもって眺めるということなんじゃないの。中世の世界って人と世界が分離してなくて、その関係が分離してきたのが近代の精神っていう気がする。そう考えれば人間主義を謳ったルネサンスという時代の建築がローマ建築を参照したということは、自分たちの様式をつくりあげるためには過去の時代を客観的な分析対象とするという科学的な精神から生まれてきたということで、それが折衷主義につながっていくと、まあ乱暴に言えばそうなるんじゃない。

様式っていうのは作り出すもんじゃないくて選択する対象であるというのが折衷主義。これってなんとなくポストモダニズムの思想に似てる。インターナショナルスタイルという一極支配からなんでもありっていう、単一性から多様性への変換みたいよね。

近代から現代への違いはひとつは多様な考え方を認めていこうってことね。でも何でもアリかということそんなことはないわけで、いったんなんにでも価値はあると認めたうえで、制御しなければいけない。それがなんなのかということなんだけども。

それはそれとして、もう少し近代について考えてみたいんだけど、近代の精神っていうのは人間が世界から分離していくこと。とすると別の言葉で言い換えれば、世界を意識化することだと思う。すべてを裸にせざるを得ないような考え方でさあ、無意識を意識化するという無意識の発見みたいなことは近代だからできたことよね。

美術の世界でもいろんな主義に基づいて作品をつくらうとするのは、美術とはどういうものか、作品をつくらうとしている行為は何に基づいているかみたいなことを、作品に塗り込める。アートに対する考え方を作品に反映させる。ということは、作品はアートに対する作者の表明が含まれているわけで、メタアートになっているのよ。

建築だってね、近代建築ってたしかにインターナショナルスタイルで一本化したい人たちもいたんだけど、その前にはいろんな考え方をする人たちがいて、構成主義とか、表現主義とか自分たちが思う理想の建築を思い描いていたのよね。

美術界にしても建築界にしてもそういう現象って、画家とか建築家とかいう人たちがいないと起こらない。言い換えれば、近代という時代は画家に限らず美術家とか建築家という職業、もちろん中世の時代だって画家や建築家はいたんだろうけど、それは宗教とか支配者にかしづく人たちで、普通の階級の人たちとはちょっと違ってたんじゃない。普通の人たちが画家や建築家になれる時代、もちろん教育を受けることができた人ということにはなるんだろうけど、そういう時代になって、昔は単純に宗教とか支配者を信じられた時代から、そうじゃなくなってきたときに、制作する対象そのものに対する自分の立場みたいなものを意識化せざるを得ないようになってきたんじゃないか。

美術や建築、それを制作するひとが、社会的に自立して署名する時代になったことが、美術や建築を変えてきたといえるんじゃないかしらね。確かに、社会と建築家の関係が建築の在り方を変えてきたのよ。

それでこれからの建築がどうなっていくか、ということなんだけど、建築を二つの層で考えることができると思うのね。層っていうのは最近の言い方でいえばレイヤーとかいうことになるんだろうけど。一つは建築内部のレイヤーで、構造や設備などの技術的な部分を含めた意匠、建築家の表現といってもいいんだけど、建築を作る側の事情というか、問題ね。もう一つは一番大きなのは建築がもつ機能ということになるんだけど、建築の外側から与えられる条件ね、ほかにたとえばまちづくりや、バリアフリーとか、地球環境なんか

の建築外部から建築に要請されるレイヤーなのね。この二つのレイヤーが重なって一つの建築ができていると考えると、これから建築がどうなっていくかというのが見えてきそうな気がする。

近代建築っていうのは作家の時代で、建築の在り方というのは結局建築内部のことだったのよ。そりゃコルビジエというすごい建築家をはじめ、建築家が都市計画的なことも考えていたんだろうけど、それはまっさらの土地に新しい都市をつくる計画理論だよ。古い町並みを残しつつそこに新しい建築を邪魔にならないように挿入するみたいなことは、あんまり考えていなかったんじゃない。

古い建築を改修して使っている建築ってなんかすごく魅力がある。

14世紀の古城を美術館に改修したスカルパのカステルヴェッキオ美術館とか、日本でも使われなくなった煉瓦造りの紡績工場を、ホテルにした倉敷のアイビィ・スクエアや、洲本の図書館は改修というかコンバージョンして素敵な空間にしている。ノーマン・フォスターが設計したロンドン王立アカデミーのサクラ・ギャラリーっていう彫刻ギャラリーなんか、19世紀の様式建築の中に、ガラスのシャープでクールな空間が外部と内部のアンビヴァレンツな関係をつくっていて、クラシックカーに最新エンジンを積んでアウトバーンを走らせるようなカッコよさがある。あたしの経験でいえば、昔のつくり酒蔵をライブハウスにしているところなんかでジャズを聴くと、もうたまらない。薄暗い中で、天井が高く、古い木材に包まれた居心地が最高ののよ。

外部に昔の姿をとどめながら内部につくられた新しい空間が魅力的なのはなぜかしらね。その魅力をつくっているのは、その空間でいうか場所に、昔の、もとの外部と内部を認識できることが前提になっているのは確かよね。クリストっていうアーティストがいるじゃない。たとえばロンドンブリッジに白い布をかぶせて何日間かその状態にままするようなハプニングアートは、布をかぶせられているのがなんなのかはわかるわけ。ただそれに白い布をかぶせられることによって、それまで何気なく見ていたものを気づかせる、意識化させるということもあるだろうし、表面の意味を消滅させることで、ものの権威みたいなものを消して、かたちそのものを露わにするというような意味があると思うんだけど、古建築のコンバージョンってその行為に似ている。もとの姿を認識させながら、新しい機能を付与することの中に魅力をつくりだす秘密があるってこと。

改修される建築が改修された後も認識される

ためには、元の建築はそれだけの強さを持っているなければならないのよ。改修される力に対抗するだけの強さをね。逆にそういう建築だからこそ、改修するほうも力量がいると思う。力と力の拮抗がその空間に魅力を与えるの。だから、元の建築は何にでも使えるような空間だとだめなのよ。強い限定された機能性を持っていることが必要だと思う。ユニバーサルスペースのような、なんにでも使えますよ、てな空間には改修されるという概念が矛盾するのよ。なんにでも使えるってことは、なんであったかの記憶がその場所にはなくて、言い換えれば常に現在が続いていくことで、時間というか歴史が発生しないのよ。

改修された空間の魅力は元の空間がなんだったかの記憶がとどめられて、認識されていて、なおかつその上に新しい機能が重ねられているという重合性が魅力を生むんじゃないかな。それは、かつての機能がズラされるってことよね。そのズレさ加減が魅力的なのよ。だから、ズラしようがないユニバーサルスペースというのは面白くない。

ユニバーサルスペースっていうのも近代建築が生んだ重要な概念で、建築が最大限機能的であるための概念だったけど、何にでも使える空間は何にも使えないってよく言われるじゃない。どっこともかしこも明るいガラスに覆われた場所が落ち着かないのと同じで、ちゃんと囲われた場所をつくらないとわたしたちの居場所がないのよ。

ユニバーサルスペースっていうのは究極の建築内部の論理だけによってつくられる空間なんだと思う。機能的だと言いながら実は外部から要求される機能を全く気にしないで建築家がつくることができる理論じゃないのかしら。だって、なんにでもつかえるわけだから、機能という外部の要請なんて気にしなくても、建築内部の論理、建築家の思想だけでつくることができることを発見したってこと。だからファンスワース邸で訴えられることになったんじゃないのかしら、ミース先生。

この前、横浜港の国際客船ターミナルに行ってきたらね、もう最新の建築というにはだいぶ時間がたっているけどやっぱり今までの建築とは全く違うよね。なんかランドスケープが直接建築になったという感じ。

この建築が1995年に行われたコンペで採用されたいきさは当時かなり話題になったということを最近知ったんだけどね、審査員の磯崎新先生が当初一番評価の高かった篠原一男先生の案にかえて、今で起きている当選案をとおす論陣を張ったもんだから、コンペが終わってから篠原先生が怒りの反論を雑誌に寄せたりしたらしい。

当選案の提案者はクールハウスの事務所にいたポロというロンドン在住のスペイン人で当時31歳。出来上がっているからわかるんだけど、提出案はコンピューターがなければ作図できない、うねった床が連続する提案で、当時の審査員でどんなものができるかを想像できたのは少なかったんだらうね。だから評価もあまりされなかったんだらうけど、磯崎先生というのはいっぱいえらいんです。

シドニーオペラハウスのコンペでオスカー・ニーマイヤがいったん落選していたウツォンの案を拾い上げたエピソードに似ている。当選してから建設費に思った以上にとんでもないお金がかかったらしいこともね。

篠原先生がコンペ結果に反論したのは、磯崎先生が篠原案をシンボリズムの建築として、退けたことにあったらしい。篠原案を今作品集なんかで見ても美しいのよ。和船を思わせるし、シャープな日本刀のイメージもある、そこに抽象的なかたちを含ませながらまとめられていて、実際に出来上がったかたちを見てみたいと思わせる。

でもね、ポロ案をみたらやっぱりその新しさに惹かれてしまうんじゃないか、審査員としてここでこれを選定しなければ後世に悔いを残すと思うんじゃないかねえ。

篠原案にあってポロ案にないのは建築のかたちだと思う。

そういう意味で磯崎先生が篠原案をシンボリズムといったのはわかるような気がする。篠原先生はシンボリズムを建築の悪しき性質といわれたように捉えて、反論されていたようだけど、形態が持つ力に対して磯崎先生はシンボリズムとっていて、ポロ案はかたちがないからいいんだということではないかしら。

近代建築の有名なテーゼに「形態は機能に従う」というのがあるよね。それに加えているんなマニフェストがあって「機能的なものが美しい」とか「形態は機能を啓示する」とか言われるけど。結局は建築のかたちを前提にしている。でも横浜ターミナルには何かしかりとしたかたちと認識されるものがないのよ。確かに輪郭はあるの、でも四角とか丸とか、ある幾何学的なかたちに収れんさせるようなかたちが認識されない。ずーっとエッジだけがある感じ。場所だけがあるような感じかな。それでランドスケープなのよね。

こんな建築を見ていると、建築がだんだん生態化していくようにも思う。

ポロさん自身、当選後のインタビューで「私たちは具体的なイメージを描いて設計を始めるのではなくて、どのような機能が必要とされているのかを正確に分析することから作業を始めるのです。……これからプロジェクトが進んでいくに従って、具体的な空間のイ

メージをつかんでゆくことになるだろう。」って言うてた記事があった。

篠原先生は自案について「求められた内部外部機能の明確な分離と融合を行い、配置や構造の合理性の強化のため、平面長方形の両方向の対称性が有利と判断した。そして、そこから算定されたボリュームの内外部の景観を整えるために、わずかに半径の異なる二つの円弧、正確には円柱面で輪郭を結んだ。」と難しい。もちろん機能は考えているんだけど、かたちをつくるのが使命みたいなね。

ポロさんもかたちを意識はしてるんだらうけど、純粋に機能を追いかけて、かたちはその結果みたいな言い方よね。篠原先生とは機能とかかたちがつくられる関係のベクトルが逆なんじゃないかと思う。このことがポロさんの新しさなんだらうね。

さっき建築が生態化していくみたいって言ったのは、このことが関係しているかもしれない。だって動物がつくる巣って自分たちが棲みやすい機能をだんだん積み上げていって、つくられてきたものでしょう。あるかたちを目指して作っているわけじゃないよね。

でも、人間がつくる以上、無意識というかつくられる先のことを考えずには絶対つくれない。かのマルクス先生が資本論で「くもがどんなに美しい巣をつくろうとも、人間の大工との決定的な違いは人間の大工は出来上がるものを彼の頭に思い描いていることだ。」というようなことを書いていた。

だからね、かたちをつくらないといったって出来上がるかたちを思い描かずには人間はつくれないの。無意識の創造なんてありえないんだから。シュールリアリズムが自動筆記とかやってたことがあるけど、ものをつくるという行為に無意識でつくるなんてできないの。無意識でつくったように見えるようにつくるっていうわけのわかんないことになるのよ。

機能を追求して建築をつくるのがかたちのない建築をつくることになるわけではないけれど、ユニバーサルスペースのように建築内部の論理で出来上がる建築とは、異なる結果になることは予想される。それでその結果が、生態的なかたちというか、建築が生態化していくということになるんじゃないかってことなのよね。

生態的な建築っていえば、ヴァナキュラーな建築ね。ルドルフ・バーナードスキーの企画で、1964年にヴァナキュラーな建築に焦点をあてた「建築家なしの建築」展というのがニューヨーク近代美術館で開かれていて、そのカタログが日本では1970年に単行本として刊行されている。

この展覧会は単一化されたインターナショナルスタイルのモダニズム建築に対して、原始

的な住居をはじめ世界各地に住む人たちが、自分たちが棲む風土、環境に合わせてつくりあげられてきた住居が、いかに多様で魅力的であるかを示すために企画された。

だから、モダニズム建築批判の展覧会だった。いいかえれば、モダニズム建築の建築としての問題だけではなく、それを生み出している近代の精神に対する警告だったと思うの。

それは、一言でいえば一元的な価値観に対する批判で、世界はこんなに多様で、豊かなんだということよね。この展覧会が「建築家なしの建築」展と称されているってことは、建築家がつくる建築は一元的で、建築家がいらない建築のほうが多様で豊かで、建築家の価値観が一元的であることを批判しているのよね。つまりは建築家が変わらなければ建築が変わらない。ヴァナキュラーな建築は、アノニマスな建築とも言われるわけだから、建築家不在の建築ってということね。

ヴァナキュラーな建築って、環境に寄り添ってつくられている。自然の風や熱を利用して快適性を取り込もうとしているのは冷暖房がないんだから当たり前で、そのための知恵がヴァナキュラーな建築のかたちをつくっているわけで、「環境が形態をつくる」のよね。

それで、それらのかたちはたいがい閉じられている、外部に開かれていない。それは建築がシェルターであるからで、まずは外部に対して防壁しながら、外部の環境を制御して取り込もうとしている。自然の力を活用しようとする外部に対して閉じられていることが制御にとって必要なのよ。ガラス張りの家なんてとんでもない。モダニズム建築がガラスという材料を全面的に採用して、内外空間の相互貫入とか言っているけど、ほんととは全然開かれていないのよね。見た目が開かれているようにみえるだけ。空間は閉じられている。皮肉なことに外部に閉ざされたようにみえるヴァナキュラーな建築が実は開かれていて、外部に開かれているように見えるモダニズム建築が実は閉じられているの。

だから建築はまずは閉じられなければいけないと思う。閉じられた後に、開いていくの。内部空間は囲まれた空間なんだから、そこから必要な外部環境を取り込んでいく。太陽の光や熱を効率的に使うことや風を取り入れるようにするために最新の技術を利用したらいいのよ。建築が外部に開いていくのがこれからの建築と思うけれど、それは建築の場所が開いていくことで、建築のかたちは逆にとじられていく。

近代とは意識化の時代で、建築は建築家が考えるメタ建築でもあったわけだから、建築家が表現するのが建築だといえるのね。建築がアノニマスで、ヴァナキュラーになっていく

としたら、その時は建築家という職業はなくなるんじゃないかしら。

建築はきっと環境装置と考えたほうがいいんじゃない。だとすると建築家はもっとエンジニアに近くなっていく。誰かの表現なんて不要なのよ。もちろん建築はまちにとって美しくなくてはいけないんだけど、ある個人の表現でなくたっていい。

山本理顕さんが設計した埼玉県立大学（1999）は、多くの部分が一階で、その上がフラットな屋上庭園になっているから、地に潜ったような建築になっている。グリッド状に通路が配置されていて、X・Yのそれぞれの方向に無限に続いていくような感じで、横浜ターミナル以上にエッジがない。むしろエッジを感じさせないようにしているみたい。屋上にはランダムに四角い穴があげられていて、一階とつながっている。一階が地下で、屋上が大地に見えるから、二階にいてもあたかも地上階のようで、地上に出ている全体のかたちが見えなくなっているのよ。

山本理顕さんはこの建築のイメージについて「実験・実習室を全て一階に配置して、その屋上をフラットなデッキにするというアイデアはかなり早くからあった。そのデッキに穴が空いている。実験・実習室のための光庭である。」と説明して、続けて「デッキにちりばめられた光庭の風景が、まるで中国の密洞（ヤオトン）の風景のようだった。」と語っている。全体の配置計画については「街の中にカメラ屋、酒屋など色々な店があり、それぞれが入れ替わっても大丈夫との意識で空間を構成した。つまりシステムをはっきりさせ、内部は置換可能としている。街のインフラをつくるのと同様だ。」ということなのね。

システムは形がないもので、そのシステムが密洞（ヤオトン）の風景になっているというのが、これからの建築を暗示しているように思える。もっとも新しい建築が、ヴァナキュラーな建築に類似してくる。システムがつくりだす風景がヴァナキュラーな風景に結びつく。それはヴァナキュラーな建築が根源的で建築の変わらぬ本質を具現しているからではないかしらね。ヴァナキュラーな建築はアノニマスで、建築家はいらないというものの、埼玉県立大学の機能条件に対して、空間構成を「街路のような建築にする。」というコンセプトを決めたのは山本理顕さんだし、そのコンセプトに基づいて設計するとして、誰がやっても、密洞（ヤオトン）のような建築になるというわけではない。山本理顕という建築家がいてはじめて、密洞（ヤオトン）になるのよね。だから、建築がヴァナキュラーになっていくとしても、建築家は必要な存在なのよね。

でもヴァナキュラーな建築というのは、建築の作家性みたいなものの要素が弱い建築。建築の作家性が強いことがシンボリズムにつながっていく。磯崎先生が篠原案をシンボリズムとして否定したのは、結局は建築の作家性を批判したんじゃないかしら。

建築の作家性が弱まっていくことは、建築が市民に開かれていくことになる。建築ができるプロセスに市民が参加していけるんじゃない。

公共建築の設計プロセスで、市民参加のワークショップをするケースが増えてきているけど、ほんとにワークショップが建築の計画に生かされるためには、建築家の作家性はどんどん弱くなっていかねばいけないと思うわけ。

とはいうものの、作家性の権化みたいないわゆるスター建築家という方たちも社会にはもとめられているんだろうね。社会には様々な要素があることが豊かな社会といえるんだろうから。

でも、先に言っただけで何でもやっていいというわけじゃない。つくる側が制御されなければいけないこともある。

日本では「建築家なしの建築」が刊行された年に、バックミンスター・フラーの「宇宙船地球号操縦マニュアル」が翻訳刊行されているの。

この本の中にはこういう言葉がある。『「宇宙船地球号」に積み立てられた化石燃料は、自動車でいえばバッテリーに当たるもので、メイン・エンジンのセルフ・スターターを始動させるためにエネルギーを貯えておかねばならないものだ。だから私たちのメイン・エンジン、つまり生命の再生プロセスは、風や潮汐や水の力。さらには直接太陽からやってくる放射エネルギーを通して、日々膨大に得られるエネルギー収入でのみで動かなければならない。」「あまりにも近視眼的に未来を見通すこともなく、化石燃料や原子力エネルギーを濫用し開発していくことは、ちょうどセルフ・スターターとバッテリーだけで自動車を走らせるようなもので、バッテリーが干上がってしまえば、自動車そのものを構成している原子を連鎖反応で消費しはじめる以外、再充電はできない。』

人間は世界一内一存在っていうけど、これからの建築は宇宙船地球号一内一存在であることを、自覚しなければいけない。そうしてヴァナキュラーになっていくのよ。

—了—

「佳作」

人びとがつくる 『場所』という現象を とらえる

林田大作

大阪工業大学 准教授

1967年 大阪府生まれ
1991年 東北大学工学部建築学科卒業
1993年 東北大学大学院修士課程修了
1993年 株式会社大林組東京本社
2004年 大阪大学大学院博士課程修了
2004年 和歌山大学システム工学部講師
2009年 和歌山大学システム工学部准教授
2010年 大阪工業大学工学部准教授

1. 序—建築と『場所』

建築は、物理的な三次元空間であると同時に、社会・文化的な存在である。建築は、それが建つ地域固有の社会と文化、そしてその地域に住まう人びとの生活とともに、過去から現在、そして未来に向かって在り続ける。そこでは、様々な出来事が起こり、その都度様々な記憶が刻み込まれる。それらの出来事や記憶は継承され、地域固有の社会と文化を形成する。これらを、物理的な三次元空間としての建築に押しとどめることは、おそらく不可能であろう。社会・文化的存在としての建築、人びとの生活とともにある建築、地域

固有の現象とともにある建築。そのような建築を、私は『場所』と呼びたい。

ここで言う『場所』の概念は、第一に「人びとが、生活環境の中で見つけ、つくり、使いこなすもの」、第二に「そこは居心地が良く、そこに居る人びとの生活の質を向上させる」、第三に「これからの建築に求められる質」と表現することができるだろう。つまり、『場所』は建築ではあるが、物理的な三次元空間のみならず、そこで生起する現象をも包み込むものとして捉えたい。そして、人びとがその現象に関わり続けることで、その建築は地域における社会・文化的な輝きを増していく。

2. 人びとがつくる『場所』

近年の場所をめぐる論考として、隈研吾の著作『場所原論^{文1)}』が挙げられる。彼は、「インターナショナリズムは世界中の多様な場所を抹殺した。」と述べ、千里ニュータウンを例に挙げて、「日本においてもそこに存在していた繊細で豊かな場所（既存の集落）は破壊された。」とする。また、その後の脱工業化時代では、「人は『物』『商品』に対してではなく、サービス、すなわちコミュニケーションに対してお金を支払う時代になり、『場所』が意味を持ち、『場所』こそがコミュニケーションの基本であり、コミュニケーションの質を決定するのが『場所』である。」と述べる。そして自らは、「場所に負ける建築」の実例として「北上川運河交流館」を設計し、「川沿いの土手のような繊細な『場所』に建築を建てる時には、建築を『弱く』するための操作が必要である。」と述べる。

一方、三浦展は、著書『人間の居る場所^{文2)}』の中で、「日本の郊外では、今まで住宅づくりばかりをしてきたが、今後はそこに、自分たちの地域に必要なもの、働く場所、遊ぶ場所、子育ての場所、お店、あるいは自然を、企業任せ、行政任せではなくて、市民自身が作っていく必要がある。」と述べている。また、同書には、2014年9月21日に国土交通省都市局の主催で行われた「プレイスメイキング・シンポジウム」の記録も収められており、その中で、伊藤香織は「プレイスメイキング」の概念を、渡和由（筑波大学）の言葉を借りながら、「人が自然に集まり、交流が進むような公共空間を作ることを指すデザイン概念であり、日本では『居場所づくり』とも訳される。」と説明している。その上で、自身が展開

する「東京ピクニッククラブ」の活動を紹介し、「ピクニック体験を通して、自分の家の中だけでなく、公共空間での居心地の良さも自分の手で変えていけるとか、パブリックライフを自分で創造していけるとか、そういう実感を持ってもらいたい。」と述べ、「シビックプライド」の概念を、「この場所をより良い場所にするために自分自身が関わっているという、ある種の当事者意識に基づく自負心」と定義している。

これらの場所をめぐる論考は大変魅力的だが、隈の主張（前者）と、三浦・伊藤（後者）の主張は対照的である。前者が対象としている「場所」は、「建築家が建築を作る上での敷地・周辺環境・地域」であり、端的には「建築物が建つ土地（大地）」である。前者では、建築家として「場所」と向き合う際の基本的姿勢が説明されているのだ。また、この著作の副題は「建築はいかにして場所と接続するか」であり、建築と「場所」は接続されるべき「別個のもの」として扱われている。

しかし、後者が対象としている「場所」「プレイスメイキング」とは、「人びとが、自らの生活環境の中に、様々な活動のための『場所』を主体的につくり、そこでの居心地の良さを作り出し、生活そのものを作る」という意味を含んでいる。「プレイスメイキング」は、日本では「居場所づくり」と訳されることから、三浦・伊藤は、「場所」「居場所」「プレイス」をほぼ同義的に用いており、そこには必ず「人びと」が居ることが前提となっている。

ここで、私が注目したいことは、公共空間であれ、私的空間であれ、屋外であれ、室内であれ、「人びとは物理的な三次元空間を生活環境としてそこに居る」という事実である。J.J.ギブソンの「affordance（アフォーダンス）」の概念^{注1)}を借りて表現すれば、「住む」「働く」「遊ぶ」などの人間の行動をアフォードするものは、床、壁もしくは柱、屋根といった三次元空間としての建築である。「ピクニック」も例外ではなく、敷物を敷き、腰を下ろせる、ある広がりを持った平面がピクニックというアクティビティをアフォードしている。あまりに日差しが強い場合や視線を遮りたい場合は、局所的にでも屋根、壁もしくは柱のような設えが必要となり、これらの設えが快適なピクニック体験をアフォードする。

つまり、「場所」「居場所」「プレイス」を成立させる要因は、第一に「そこに人びとが居

る」ことであり、第二に「その生活環境は、そこに人びとが居るために必要なアフォーダンスを有する」ことである。私は、そこに居る人びととアフォーダンスを備えた生活環境を一体的に扱い、そこで生起する現象をも包み込む概念として『場所』という語を用いている。

ところで、上述のような『場所』の概念は、一般的な人びとにとって、どのような語で表現されるのだろうか。私は「居心地の良い場所」という表現が最も適切であると考え、この語を用いて『場所』に関する研究が続けてきた^{文4)}。人びとは、生活環境の中に「〇〇ができそうだ（〇〇は行為・活動）」「△△という気持ちになれそうだ（△△は心理的状態）」などの可能性を見つけ出し、そこに『場所』をつくり、使いこなし、自分なりに意味付けている。この行動を、私は『場所構築』と呼んでいる^{文5)}。また、これらの『場所』において、人びとが見つげ出す可能性を『場所のアフォーダンス』と呼んでいる^{文4)}。

また、どのような生活環境が『場所』になり得るのだろうか。図1は、大学の演習課題として、「私が発見したちょっといい感じの場所」というテーマで学生に写真を撮影・提出させ、それらの写真に写っているものをKJ法的に分類・考察した結果である^{注2)}。テーマを「居心地の良い場所」ではなく、「私が発見したちょっといい感じの場所」とした理由は、公共空間、私的空間、屋外、室内に加え、風景や眺め、人びとなども含めた『場所』の写真データを収集しなかったことによる。

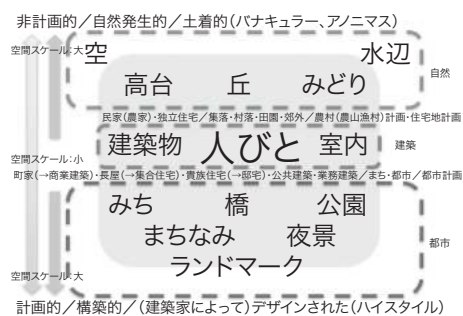


図1 私が発見したちょっといい感じの場所

図1から、『場所』になり得る生活環境は、「空」「水辺」「高台」「丘」「みどり」などの自然、「みち」「橋」「公園」「まちなみ」「夜景」「ランドマーク」などの都市、「建築物」「室内」などの建築の3つのタイプに大別されることがわかる。

また、写真データの中には、人びとが写っていない写真と写っている写真が混在している。例えば、「空」や「水辺」の水面には人

びとは立つことができず、「ランドマーク」の外部にも人びとが登ることはできない。「空」「水面」「ランドマーク」のみが写っていて、人びとが写っていない写真は、風景や眺めを見ている撮影者（自分）を含めた『場所』の写真データと解釈できる。その『場所』は、「そこから空や水面やランドマークを見ることができる」という『場所のアフォーダンス』を有しており、その写真の撮影地点は、景観計画における重要な「視点場」となっている。

一方、人びとが写っている写真は、そこに写っている人びとが「〇〇ができそうだ（〇〇は行為・活動）」「△△という気持ちになれそうだ（△△は心理的状態）」などの『場所のアフォーダンス』を見つけ出し、実際に「そこで〇〇している」「△△という気持ちになっている」ことを示している。

また、『場所』にはスケールがあり、建築というヒューマンスケールの『場所』から、まち・都市・集落・村落・田園・郊外・農山漁村などのヒューマンスケールを大きく超える『場所』まであり、もはや建築のビルディングタイプという枠で『場所』を捉えることは不可能であることがわかる。つまり、人びとの生活環境全てが『場所』となる可能性がある。

さらに、これらの『場所』は、計画的・構築的な空間から、非計画的・自然発生的な空間までを含む。A・ラボポートは、前者を「ハイスティール」、後者を「バナキュラー」と呼んでいる^{文7)}。また、B・ルドフスキーは、後者の魅力について言及し、その多くが「アノニマス（無名）な作り手によるもの、あるいは人びとの手によらず自然に発生したもの」と述べている^{文8)}。

このように、『場所』は、人びとが生活環境の中で『場所のアフォーダンス』を見つけ出し、つくるものであり、空間のスケールや計画性・非計画性にかかわらず、人びとが空間を使いこなす現象ととらえることができる。

オフィスワーカーを対象とした調査においても、「水辺」「森」などの自然、「まち」「公園」「みち」などの都市、「飲食店」「居酒屋」「専門物販店」「博物館・美術館」「教会・神社・寺院」などの建築が『場所』として構築され、図1とほぼ同様の結果を得ている^{文9)}。これらの場所は「サードプレイス」とも呼ばれ、やはりオフィスワーカーが空間を使いこなす現象ととらえることができる。

さらに、子育て中の共働き世帯を対象とし

た調査においては、自然や都市は見られず、地域子育て支援センター、こども総合支援センター、ファミリー・サポート・センター、つどいの広場などの「子育て支援施設」のほか、図書館、博物館・美術館、科学館、スーパー・マーケットなどの建築が『場所』として構築される^{文10)}。興味深いことに、スーパー・マーケットは生鮮食料品や日用品を売買するという行為・活動の為に計画された商業施設であるが、子育て中の共働き世帯は、保育所に子どもを迎えに行き、帰宅する前に日常的に立ち寄る『場所』になっているということである。このことは、「計画的・構築的な建築」の中で生起する「非計画的・自然発生的な現象」としてとらえるべきであり、計画者と生活者の間にある「乖離」を示している。

なお、この調査結果から、今後の子育て支援のためには、子育て支援施設などの建築空間を整備するだけではなく、制度・事業などの子育て支援施策の充実、イベント・アクティビティなどの子育て支援プログラムの必要性を提言した。建築空間が人びとの活動・行為を規定する側面は確かにあるが、施策やプログラムなどの社会的要因によって生起する現象をも考慮することによって、子育て支援施設は、本当に必要とされる子育て支援のための『場所』になるのではないだろうか^{注3)}。

3. カーンの「ルームの概念」

Louis I. Kahn（以下、カーン）は、「モダニズム建築の流動的空間に代わって、閉じた箱を基本とする、古典主義建築のスタティックで求心的空間を復活させようとしたポストモダニズムの建築家」である^{注4)}。カーンは、多くの「フォーム・ドローイング」と呼ばれるスケッチを残している。そして、彼は「フォーム・ドローイングは、本質を提示するもの」と述べている^{文11)}。

カーンの建築理論からは、「場所の本質はスタティック（静的）なものである」という主張が感じられる。一方、私がこれまで述べてきた『場所』の概念は、そこで生起する現象をも包み込むものであり、ダイナミック（動的）なものである。

しかしながら、カーンの「ルームの概念」は、私がこれまで述べてきた『場所』の概念に通じるものがある。図2はカーンによる「フォーム・ドローイング」であり、カーンの「ルームの概念」が端的に示されている。上段

の二つの文章を私なりに和訳すると、「建築はルームをつくることから自然発生する。計画～ルームからなる共同体は、住む、働く、学ぶなどのための良い場所である。」となる。また、下段の最初の一文の和訳は、「ルームとは心の場所である。」となろう。このことは、カーンの別の著書^{文12)}にも見られ、そこには「ルームは建築の元初です。それは心の場所です。自らの広がり」と構造と光をもつルームのなかで、人はそのルームの性格と精神的な靈氣に応答し、そして人間が企て、つくるものはみな一つの生命になることを認識します。」「街路はコミュニティ・ルームです。集会所は屋根の下コミュニティ・ルームです。集会所はまるで街路から自然に生まれたかのように見えます。」とある。さらに、カーンは「availability (効用、入手の可能性)」という語を「affordance (アフォードランス)」とほぼ同じ意味で用いている^{文13)}。



図2 カーンの「ルームの概念」(ウルス・ビュッティカー著 富岡義人・熊谷逸子共訳 (1996)『ルイス・カーン 光と空間』鹿島出版会P13より転載)

このように、カーンは建築家として「ルームをつくることによって自然に生まれる建築」「ルームの共同体からなる建築」を目指していたのだと考えられる。また、「ルームのアフォードランス」についても、「住む、働く、学ぶなどの活動・行為を人びとが自分のものにできる可能性」のようにとらえていたのではないだろうか。

4. 『場所』における「固有の時間」

『場所』は建築ではあるが、物理的な三次元空間のみならず、そこで生起する現象をも包み込む。ここでは、第四の次元としての「時間」に焦点を当てる。

「時間」に関する論考として最も有名な著作は、おそらく1941年初版のS・ギーディオ

ンによる『空間 時間 建築』であろう。また、近年では、2013年発行の早稲田大学渡辺仁史研究室時間空間研究会による『時間のデザイン16のキーワードで読み解く時間と空間の可視化』がある。

しかし、ここでは、『場所』を見つけ、つくり、使いこなす人びとは、あくまで一般の人びとであるという見地から、デンマークの伝統的な時間の過ごし方や心の持ち方を表す「ヒュッゲ (Hygge)」について考える。

「ヒュッゲ」は、日本語では「心地よい時間」と訳され、そのような時間によって自然に生まれる幸福感や充実感、暮らしを楽しむ姿勢を総称した概念である。雑誌『リンネル』2017年12月号P56には「ヒュッゲを感じるための6つのヒント」が掲載されており、そこから私は「ヒュッゲ」の概念として、「大切な人との絆を感じるひととき」「心地よく過ごせる時間の流れへの意識」「忙しい時こそ無理をせず、ナチュラルで気持ち良い状態になる」「太陽の光や雨の音などの自然を感じて心安らぐ」「居心地の良い空間や状況を自分たちで工夫してつくり出す」「普段の暮らしを丁寧に見つめ直すことで見つかる」の6つを読み取った。

つまり、「ヒュッゲ」は、人びとが空間を使いこなす現象であり、「居心地の良い場所」であり、そこに居る人びとの生活の質を向上させる『場所』であると考えられる。

また、『場所』における「時間」を考える上で、極めて示唆に富んでいる。特に私は、「ヒュッゲ」を楽しむ人びとが、自らそのための「時間」をDrive (自ら動かす) ^{注5)} しているということに着目した。「時間」は、いつでも、どこでも、誰にとっても同じように流れる普遍的概念としてとらえられがちである。現代はICT (Information and Communication Technology) が極度に発達し、いつでも、どこでも、誰とでもつながることができる時代である。しかし、生まれた時からインターネットやパソコンがあり、それとともに育ってきた「デジタル・ネイティブ」と呼ばれる世代の言動や反応を注意深く観察していると、「時間」をDriveしているとはとても思えず、逆に周囲の状況やICTが提供する「コト」に流され、そのために「時間」を費やすことを余儀なくされているように見える。つまり、「時間」にDriveされ (動かされ) ているのだ^{注6)}。そのような人びとにとっての「時間」を、私

は「受動的時間」と呼びたい。

しかし、「ヒュッゲ」のような『場所』に流れる「時間」は「能動的時間」である。現代日本は、既に「モノ」にお金を使う時代から、「コト」 (例えば人と人がつながるコト) にお金を使う時代へと推移している。さらに、近年は、より良い「時間」を過ごすことに対してお金を使う方向へと推移している^{文14)}。

『場所』に流れる「時間」は、そこに関わる人びとが能動的にDriveする「固有の時間」であり、普遍的な「時間」ではない。『場所』と「固有の時間」を考えることは、これからの建築の質を考える上でとても意義深いと考えている。

5. 地域固有の建築文化の継承

3. では、カーンの「ルームの概念」について述べたが、「Room (部屋)」の語源は、「Womb (子宮)」「Tomb (墓)」の語源と同じであるという説がある^{文15)}。このことを考え合わせると、現在生きている人びとがつくる『場所』だけではなく、これから生まれてくる人びとがつくる『場所』や、既に死んでしまった人びとがかつてつくった『場所』についても想いを馳せる必要があるだろう。

したがって、個人レベルにおける建築の継承 (相続) の問題に取り組むと同時に、社会レベルにおいても地域固有の建築文化の継承の問題に取り組む必要がある。我が国は、戦後、一貫してスクラップ・アンド・ビルドの住宅政策を展開してきたため、2013年の空家数は約820万戸、空家率は約13.5%となり、このことは深刻な社会問題と化している。特に、地方都市においては、高齢化と人口流出により、空家は増える一方である。

しかし、空家の中には、地域固有の伝統的な建築文化を継承している既存建築物が存在する^{注7)}。私は、奈良県桜井市中心部において、これら空家の再生・利活用による「プレイスメイキング」に取り組んでいる。建物内・外部の実測調査、再生・利活用設計提案が実施され、2017年春までに、ゲストハウス、コミュニティカフェがオープンした。また、2018年春にはコミュニティレストラン、高級まちやどがオープン予定である。

これらの「プレイスメイキング」を通して考えさせられたことは、これらの建築物を詳細に調査・分析することで、その地域における先人たちがつくり、使いこなしてきた『場

所』に触れ、その地域における出来事や記憶を理解できるということだ。

また、空家の再生・利活用設計提案を行う上では、所有者の意向に対応した維持・管理、修繕・改修に関する専門的支援体制を整える必要もある。ここで注意したいことは、これらの空家のほとんどは『生きられた家』^{注8)}であったということだ。『生きられた家』とは、建築家ではないアノニマスな作り手による『場所』(図1参照)であり、その『場所』は住まい手によって住みこなされ、その『場所』における行為・活動、心理的状态を包み込んできた。さらに、その『場所』の歴代の継承者によって、その都度、維持・管理、修繕・改修されてきたのだ。

6. 結—これからの建築と社会の関係

これからの建築と社会の関係を考える上で、建築の維持・管理、修繕・改修をどのように考えるべきであろうか。養老孟司は「手入れ」について、次のように述べている^{注9)}。「明治以降、日本人は急速な都市化を進めてきた。しかし、人間は都市だけでは食っていかず、田舎が必要である。田舎には自然があり、自然は「自然のまま」である。それに対して、都市は「思うようにする」ということである。自然は非常に強いものだから、思うようにはならない。そこでどうするかというと、手入れをして人工のほうに引っ張る。」「放っておけば原生林になってしまうところを、一生懸命手を入れている。「どうするつもりだ」と聞かれても「つもり」がそもそもない。「つもり」でやったのではなく、どこかで収まってしまった。実はこの感覚が手入れの感覚である。」

養老が述べる「思うようにする」「どうするつもり」は、建築の分野では「計画的・構造的」に相当し、「自然のまま」「思うようにはならない」は、「非計画的・自然発生的」に相当する(図1参照)。その両者をつなぐものが「手入れ」であり、その本質は「放置すればとんでもないことになるので手入れをするが、きちんとしたビジョンがあって手入れしているわけではない。」と読み取れる。

桜井市中心部の既存建築物を調査した際、私は、地域固有の建築文化を継承するためには、きちんとした維持・管理、修繕・改修、つまり「手入れ」が重要であると感じた。しかし、多くの既存建築物が、養老が述べる

「どこかで収まってしまった」状態で残存していたことも事実であった。トタン板やベニヤ板などの間に合わせの材料を使った維持・管理、伝統的な意匠・素材・色に似せただけの修繕・改修などからは、「こうあるべき」というビジョンは感じられない。

養老は、「都会の人は「どういう風になるのか先読みしてくれ」と答えを要求する。」と述べている。しかし、私は、都会・田舎を問わず、建築に関わる者として、地域固有の伝統的な建築文化を、その地域における出来事や記憶とともに、地域の人びとにわかりやすく発信し、その継承に対する意識を人びとの間で共有すべきであると考えている。そして、地域の人びとがつくり、使いこなしてきた建築を、地域の人びととともに「手入れ」することによって、一緒に答えを探したい。さらに言えば、建築を丁寧に「手入れ」し続けることによってしか見出せない「その地域固有のビジョン=これからの建築と社会の関係」を見出したい。

今日、私たちは、建築と社会の関係を考える上で、「計画的・構造的」な建築のみならず、「非計画的・自然発生的」な建築・都市・自然にも目を向けなくてはならない。その際に、人びとがつくる『場所』という現象、そこに流れる「固有の時間」、そして「手入れによる建築文化の継承」を意識する必要がある。このことは、建築に関わる私たちに課せられた社会的役割でもあると考えている。

<注釈>

- 1) Gibsonは、心理学における視知覚の問題を生態学的に扱い、「affordance (アフォーダンス)」という語を造った。彼は、文献3)などで、「環境のアフォーダンスとは、環境が動物に提供するもの、良いものであれ悪いものであれ、用意したり備えたりするものである。」と述べている。
- 2) 本演習は、2008・2009年度、和歌山大学環境システム学科にて行われた。実施に当たっては文献6)などを参考にした。
- 3) 施策やプログラムなどによる社会的現象が先に立ち、建築空間がそのための要求に迫っている例は多い。例えば、「子ども食堂」は、子育て支援のための『場所』として社会的要請が大きい、その多くは既存建築物の利活用に限られている。
- 4) 文献1)による。
- 5) 「Drive」は、「(人が車などを)動かす」という意味である。また、パソコンからプリンタを動かすためにインストールされるプログラムを「Driver」という。ここでは、「ヒトが自らの意思でモノやコトを動かしている感覚」を強調している。
- 6) ここでは、「ヒトが自らの意思に関わらずモノやコトに動かされている感覚」を強調している。いつでも、どこでも、スマートフォンを肌身離さ

ず持ち歩き、1日の大半の時間をSNS (Social Networking Service) に費やす人びとは、ふとこのような感覚を抱く瞬間があるのではなかろうか。

- 7) この場合の既存建築物とは、主に江戸末期から昭和戦前に建てられた町家・長屋などの商家及び農家を指す。これらの建築物には、「うだつ」「虫籠窓」「格子窓」「箱軒」「ばったり床几」「大和棟」「土間」「ミセ」「長屋門」など、地域固有の伝統的意匠・伝統的空間が残存している。2014年に奈良県桜井市中心部に存する1283棟の建築物の悉皆調査を実施したところ、このような建築物は381棟(約30%)残存していた。
- 8) 『生きられた家』という語は、文16)から引用した。文16)の著者である多木は、「建築家がつくりだす作品」としての空間と「生きられた家」としての空間を明確に区別した上で、特に日本の建築空間において、そこに住む人間の使用、活動、出来事、すなわち生活が場所を形成し、そのような場所の連鎖によって「家」という「生きられた空間」が形作られるとしている。
- 9) 文献17)から、養老の述べる「手入れ」を筆者が要約した。

<引用・参考文献>

- 1) 隈研吾 (2012)『場所原論 建築はいかにして場所と接続するか』市ヶ谷出版社
- 2) 三浦展 (2016)『人間の居る場所』而立書房
- 3) James J. Gibson著、古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬受訳 (1985)『生態学的視覚論』サイエンス社
- 4) 林田大作ほか (2004)『場所』の様態表現に関する基礎的分析—都市生活者の「居心地の良い場所」に見る人間—環境関係の研究一、日本建築学会計画系論文集 第579号, pp45-52
- 5) Daisaku Hayashida (2012) Basho-kouchiku "Place Constructing Behaviors", Journal of Asian Urbanism, No.6, pp.28-29
- 6) 小林健治ほか (2005) 人が居る場面記述に見る人間—環境関係の基礎的分析—都市の中の“いい感じ”に人が居る場面の研究一、日本建築学会計画系論文集 第589号, pp77-83
- 7) Amos Rapoport著、大野隆造・横山ゆりか訳 (2008)『文化・建築・環境デザイン』彰国社
- 8) Bernard Rudofsky (1984)『建築家なしの建築』彰国社
- 9) 林田大作 (2011) オフィスワーカーの『居心地の良い場所』『居心地の悪い場所』における行動場面の分析、日本建築学会大会 (関東) 学術講演梗概集E—1 分冊, pp.21-24
- 10) 林田大作ほか (2013) 共働き家庭の日常生活における子育て支援としての居場所に関する研究—和歌山市中心部におけるケーススタディ—、日本建築学会大会 (北海道) 学術講演梗概集, pp.703-704
- 11) Louis I. Kahn著、香山壽夫訳 (2007)『建築家の講義—ルイス・カーン』丸善出版
- 12) Louis I. Kahn著、前田忠直編訳 (2008)『SD選書ルイス・カーン建築論集』鹿島出版会
- 13) Jon Lang著、高橋鷹志監訳、今井ゆりか訳 (1992)『建築理論の創造 環境デザインにおける行動科学の役割』鹿島出版会
- 14) 三浦展 (2012)『第四の消費 つながりを生み出す社会へ』朝日新書
- 15) 布野修司編 (2005)『世界住居誌』昭和堂
- 16) 多木浩二 (1984)『生きられた家 経験と象徴』岩波現代文庫
- 17) 養老孟司 (1998)「手入れ文化と日本」『養老孟司特別講義 手入れという思想』新潮文庫収録

建築と社会の幻想曲

伊熊昌治

伊熊昌治建築設計事務所

1957年東京都生まれ。東京大学工学部建築学科卒業。戸田建設、松田平田、AZ環境計画研究所（山崎泰孝氏）を経て伊熊昌治建築設計事務所設立。近畿大学、立命館大学、現在、神戸国際大学、摂南大学等にて非常勤講師を勤める。住まいのリフォームコンクール、現代日本の建築家優秀建築選、省エネ照明デザインアワード、グッドデザイン賞等

1. はじめに

様式は「過去を振り返った歴史家によって作り出されたものだ」ということを私たちは忘れがちである。^{*1}様式はその時代にはまだ命名されていない。後世になって振り返ったときその時代をあるいは時代精神について命名することができるだけである。ツァイト・ガイスト（時代精神）は後からついてくる。

これからの建築と社会との関係については、現在の建築と社会についての傾向を省みることではあるかもしれない。今後の建築と社会の姿を論じることは可能であろうか。果たすべき役割を決めることはできるだろうか。

建築・社会・人間の時間について検討し、意思決定についての変化を概観し、決して新しくはないが、しかし忘れられがちな幾つかの価値観について振り返り、今後の建築と社

会の関係についての「将来の姿の幻想」を追いかけてみる。

2. 建築に関しての多様な価値観（日本的な価値観を再発見する）

2-1 日本の伝統的建築物から見出す時間に基づく価値観

社会の時間と人間の時間との関係については以下の4分類された時間認識が我々の今後の時間への対応を考える際に役に立つと思われる。

①反復的な時間（原始共同体）

具象的な質、かつ可逆性としての時間

②線分的な時間（ヘブライズム）

具象的な質、かつ不可逆性としての時間

③円環的な時間（ヘレニズム）

抽象的な量、かつ可逆性としての時間

④直線的な時間（近代社会）

抽象的な量、かつ不可逆性としての時間

（真木悠著、時間の比較社会学 岩波書店より ^{*2}）

直線的な時間、万国共通の時間感覚はグローバルな社会では必要ではあるが、現在でも祭祀等で残っている地域や伝統的な時間感覚は、地霊等の考えと同様に今後ますます重要になってくると思われる。建築の時間については反復的な建築として伊勢神宮を取り上げることができる。また円環的な時間として常時改修をし続ける建築が含まれるかもしれない。時間の可逆性からの発想も有効かもしれない。少なくとも時間の要素を再度見直していくことで何かが変わる可能性がある。

アルテポベラの作家ペノーネの作品（下写真）^{*3}では、丸太をある年輪に沿って掘り起こし、ある時期の樹形を出現させた作品がある。我々には普通の丸太から単なる彫刻を施したものになってしまう形態が、実は各年代の樹形が丸太の中に宿っていることを教えてくれる作品である。



保存再生について多くの保存運動が各地域で発生しており、当然それぞれの建物にそれぞれの価値観があると思われるが、ペノーネの作品のように、建築単体に潜む価値観について検討することで、建築と社会の関係をもっと少し具体的に、かつ多様な解釈ができるようになるのではないかと。^{*4}

事例として伊勢神宮等に見られる式年遷宮をもとに考えてみる。

1) 時間が経てば経つほど上がる価値（経年価値・連続的時間）

日本の古建築を見る時、往々にして言及される侘び・寂びに似た木材の質素な風化した

肌合いについて。旅愁や、懐かしさのような感情が湧き上がることがある。時間が経てばたつほど価値が上がるという見方である。

究極は「廃墟」を意味する価値観と言えるかもしれない。軍艦島や遺跡の多くはそれに該当するものである。

伊勢神宮においては式年遷宮を行う直前の建物の状態を想起できる。苔むした屋根や風化した木材の小口等、年代を感じる光景である。解体後は御神木として末社の建材として再利用される点では完全腐敗ではなく、表層の経年変化にのみ対応していると考えられる。式年遷宮以前の旧社殿と新社殿の写真でその対比がより一層明確になっている。（下写真）



2) 使用できるかどうかで決まる使用価値（使い続ける円環的時間）

使用できるかどうかで価値が与えられる考え方であり、機能主義の考え方で進められる。

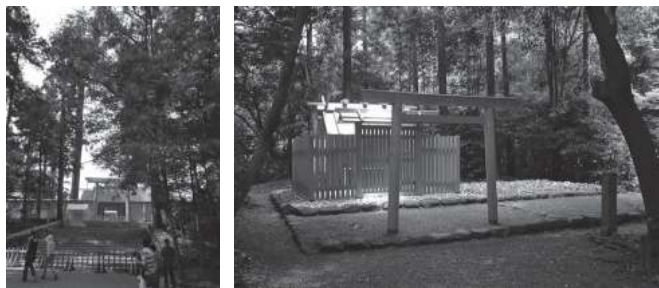
合理主義に慣れている我々には身近な考え方である。使用できるという判断基準は明確ではない。冷暖房が入っていないくとも、使用はできるわけで、どこまで使用可能、不可能と決定することは場合によって異なるであろう。しかし少なくとも人間が使用できるかどうか、ドアが開くかどうか、壊れないか、雨風は防げるのか、あるいは生活ができるのか（これらの判断は人により異なりその判断範囲は広い）等の基準に従って価値付けを行う項目である。使用価値が見当たらなくても、オブジェとして建物を残すこと、原爆ドームのように何らかのメッセージを我々に届けるような場合も、記憶のメッセージという使用価値があると考えられる。

伊勢神宮での使用価値は内に神が鎮座し、お祈りができるという点であり、使用価値だけから見ると、社殿が形態を保っている限りにおいてはその役割を果たすことになる。

3) 新しい価値（始まりがある線分的時間）

経年価値とは正反対の考え方である。風化の見られない全く新しいという、ただその一点で価値を持つという考え方である。新しいから価値があるというものに、伊勢神宮の式年遷宮後の新しい、精気みなぎる神宮新社殿を想起できる。

一般に新しい建物は新しいというだけでその価値を持つことになる。たとえ形態として物質的なものでなくとも、新しい考え、新しい取り組みに対しても、「新しい」という価値観は存在する。いままで見捨てられていた



式年遷宮したあとの伊勢神宮 新しさの価値が前面にだされている。
経年価値、使用価値、反復する意識的記憶の価値も含んでいる。

民家が建築史研究者達の精力的な見直しと発見により新たに価値を付加され、新しく位置づけられたという歴史的行為もこの「新しさ」の価値とみて良いと思われる。

4) ある時点から風化を止めて不変と永遠を目指し改修し続ける価値観

(意識的記憶価値・反復的時間)

風化に特化した経年価値に対して、ある時点から全的風化を食い止め、その後は歴史的価値に対して不変と永遠なる現在を求めるために修復を前提とした価値がある。

建築物への説明文言や由緒の説明・案内板等が該当する。記載文字が見えなくなった時点で意識的に修復していくものである。現在の時点で判別できたり、利用できたり、使用できることが優先される場合である。伊勢神宮の式年遷宮について、白木の持つ黄金の輝きと潔癖さが伊勢神宮の本分の一つとした場合、その輝きが失せた時、新しい材料で神性を再現するという見方もできるが、この意識的記憶の価値という考え方では新社殿は年数に無関係に朽ち始めたら一新することになる。保存運動に散見される、有名な建築家の創った建築を改修において、その外観に一切手を加えずに保存することを望む姿勢が該当すると思われる。

5) ある時点から完成直後に戻し、そのまま維持保存し続ける価値観

(完成した直後の姿の価値)

風化の痕跡でなく、人工物として完成した直後の姿、経年価値としての衰微の兆候は避け、来たるべき復元作業のために可能な限り純度の高い現物を保管するという考え方である。現時点からのさらなる風化は絶対に避けられるべきもの。

現在伝えられている姿を可能な限り維持することに意を用いる価値。ある時点で文化財と認定された段階から腐敗を止めるという考え方である。

使用主体である市民のその建物への愛着の薄さにもかかわらず著名な建築家の作品であるという理由で手を加えないでなんとか保存したいと考え、風化をさけるべく努力をするケースと捉えてもよいかと考えられる。価値の将来への先延ばしという点では問題はないが、耐震等への使用者への安全の確保、コストをかける価値についての議論をすることなく、ひたむきな保存をする危険性を持っている

る価値観ともいえるであろう。さらに誰も使用せずに遺跡として耐震上内部にも入れなくとも維持・保存を望むという姿勢になりかねない危険性を持っている。

6) 相対的芸術価値

(再評価或は発見による価値・円環的時間)

後世になってから価値が上がるという点では芸術活動としての印象派をあげる

ことができるであろう。作家が亡くなってから評価されるという点では聴竹居で知られている藤井厚二氏の建築をあげることができるであろう。生前に建設された住宅のいくつかは、保存の機運もなく解体されてしまっている。

聴竹居が評価され始めたのはここ数年のことである。ここに至るまでには数多くの研究者・実務者の方々の努力があったのはいうまでもないが、重要なのはこうした再評価あるいは発見の可能性を我々は後世にまで繋げていくべきであると思われる点である。

価値判断の先送りという名目で保存していくという意味での価値と考えることもできる。

2-2 日本が培ってきた発想とみられる価値観

インスタグラムで国際的に好評を得るという点では名所図絵と同様に（日本語が理解できるという領域内での言説であるが）多くの俳句・歌に詠まれてきた光景を通して心象風景を作り上げてきたともいえる。

以下にみるように、我々に親しみのある詩歌を通して、我々は無意識に独自の空間概念を形成してきたように思える。

1) 詩歌等の言説からみられる多様な価値観

藤原定家の歌

・見渡せば花も紅葉もなかりけり

浦の苫屋の秋の夕暮れ

茶書「南方録」において紹鸛が、これぞ茶の本心であると言ったとされるこの歌において「なんとも表現のし難い様相を感じ取る」日本人も多いことと思われる。^{*5}^{*6}

例えば記紀歌謡においては住まいの原型一棲家（すみか）が安全・安らかな狭い空間として扱われている。^{*7}

古事記においては

・八雲立つ出雲八重垣妻籠みに

八重垣作るその八重垣を

・葦原の密しき小屋（おや）に

菅疊いやさや敷きて我が二人寝し

垣根に囲われた棲いや秘そかな小屋という住居の原型ともいえるべき守ってくれる認識がみられる。

さらに徒然草（兼好法師1283?～1352?）では「夏を旨とすべし」が強調されているが、装飾もまたよいもののだとした住居論も述べられている点は忘れられがちな箇所ではないか。

松尾芭蕉（1644～1694）においては家屋の

細部への感覚が見受けられ、蜂が巣を作る場所が屋根の下、軒先にあることを伺うことができる。また寄りかかる柱の存在も大黒柱を想起させ、当時の家の構造的な中心と精神的中心との兼ね合いを感じることができる。

・春雨や蜂の巣つたふ屋根の漏り

・冬籠りまたよりそはん此はしら

与謝蕪村（1716～1783）では住まいを巡る夢が読み取れる。

・小鳥来る音うれしさよ板びさし

・屋根ひくき宿うれしさよ冬ごもり

・うずみ火や我がくれ家も雪の中

シベリアからくる渡り鳥の板の上を通る音によって季節を感じるという、板びさしの持っている機能以外の趣が感じられる。次の句では、低い屋根の下で竈の感覚が受け取れ、最後の句では、雪の中の方が暖かく静か、火鉢のなかのうずくまっている炭という情景が浮かぶ。

放浪者の嘆き（ひねくれ一茶?）とも取れる小林一茶（1763～1827）においては、棲まいの存在、独立した柱の存在や庇の存在、立って半畳寝て一畳という究極に広さの感覚、鳥の羽が当たって音がする庇とその音を聞いて余計寒さを感じる情景が伝わる。

・涼しさや一疊敷もおれが家

・浮き世とてあんなことりも巣を作る

・よりかかる度に冷やつく柱哉

・鳥の羽の庇にさはる寒さ哉

夏目漱石（1867～1916）では縁に差し込む陽光をまた良しとしている。

・行く秋や椽にさしこむ日は斜

以上の詩歌から、家が住み手にあわせる、あるいは住まい手が家にあわせるという両義的な考え方が読み取れるのではないだろうか。住みなす→住みこなす、目に光が入ってくる→奥ゆかしく思わせる家（日照権ならぬ月照権?）という発想も詩歌から学ぶことができる。

文学においては、日本建築の良さとして頻繁に引用される「陰翳礼讃」（谷崎潤一郎著1935年）では関西に移住した谷崎が日本家屋、照明、筆、和紙、日本女性の肌等を礼讃している。「試しに電燈を消してみることに」によって初めて現前する陰翳を謳っているが、一方では「日本文化私観」（坂口安吾著1943年）において京都文化を否定する安吾は「伝統の美だの日本本来の姿などというものよりも、より便利な生活が必要なのである」と記述しており、日本での両義的な価値観として意識する必要があるように思える。

2) 多数の価値観が混在できる日本的価値観

これらの価値観からみると解体された建物も、伊勢神宮の式年遷宮のように全く新しく作り変えてしまうという日本の伝統的行為において、新しさの価値と意識的記憶の価値を持っていると考えることができ、一定の統合的価値観を得ることができる。

形態は古代からのものであるが、物質、木

材は新しいとすることも一つの価値観であるという考え方は、日本の考え方の一つとして、もっと強調されてもよいのではないだろうか。

以上の価値観の事例はすべての価値観を列挙したものではないが、それでも保存のみならず、新築等を扱う場合においても今後の建物の価値観や評価の視点のなかに組み込まれ、多様な価値観について意識的になるよい契機になると思われる。

3. 価値観の変容の可能性

3-1 価値観を変容させる社会構造の現在

1) 建築と仮想社会に実存する人間の時間

車社会、鉄道、航空機等移動手段やネットやSNSの発達により21世紀は距離感がますます変化している。

物理的距離の遠いところが時間的に近く、物理的距離の近いところが却って遠くなる現象が起きている。さらにネット社会では人間関係が変化し、物理的な近さとは無関係に人と人が結びついている。自閉症の方々のなかにはネット上での仮想空間で己の個性を発揮できるという現象も報告されている。アバターのようにネットのおかげで発言できるとで救われている方々もいる。同様に我々はいつでもロールプレイングを行っているにすぎないし、仮面はいくら剥いても次の仮面がでてくるにすぎない(坂部恵著「仮面の現象学」)と言われて久しい。仮想空間ではコンサートも体験でき、役所の手続きも可能になる。もはや時間や距離が支配せず、同時性が新たな原則となっていると言える。

満員電車に乗って通勤し、決まったオフィスに通う必要もなくなり、家庭で家事の合間を利用しての仕事も可能になる。直接人と会わないでも仮想空間での社会(ここでも社会はやはり存在するのだが)で自己主張、交流を図ることができる。

これによって通常の労働時間と報酬という関係から成果に対する報酬という賃金システムへの移行も想定される。さらにAIでの代替行為による仕事の減少も想定される。ルーティンワーク等は当然AIによる機械に支配される日が来るであろう。

このような中でも人間の肉体は、身体を持った存在としてある。事実存在としての肉体には死という期限がある。人は空間、建築、都市、社会、土地のなかに生まれ、そしてそのなかで死を迎えるのである。建築の持っている時間、都市の持っている時間、社会の持っている時間との兼ね合いのなかで人間は生きているのである。建築・都市・社会もデジタル技術によるバーチャルな仮想空間内で精神的な部分で生きることができるが、身体は具体化されそれぞれの場所を与えられた「そこにある」建築や都市、社会に生きているのだ。

従って建築の時間、社会の時間を人間の寿命・建築の寿命の時間との対比で考えていくべきであろう。即ち事実存在の中を身体は生

き、事実存在に基づいた仮想存在に想いを馳せている、あるいは希求する人間の営みを再確認する必要があるように思われる。^{*8}

2) 社会基盤としての建築という考え方

人間の身体は、建築と社会のなかにおいて存在している。

建築に限って考えた時、「建築単体は私有財産であるが「建築(行為)を社会基盤に位置付ける」ことが社会から求められている喫緊の課題」^{*9}と記されているような「社会と建築」の関係が今求められていると考えられる。これは社会の趨勢に流されることを意味しない。

「完成した建物が社会の財産になる時代」^{*9}と石川高重氏は語っているが、社会の財産になるということは、コーリン・ロウの「コラージュ・シティー」^{*10}のように都市の中(街あるいは社会)が多様な時代の建物で活きた博物館になっていくことを意味するのではないか。一方で建築史家の鈴木博之は「間違ってもフェイクな年代建築を建設し、イミテーションの博物館にしてはならない」^{*11}と警鐘を鳴らしており、社会基盤としての建築の位置付けはフェイクな建物についての是非について考える際にも重要な視点であるとも思われる。

1970年代、街に対する懐疑心から街に対して閉じた住宅が多く建設された。その後、その反動として街に対しての開放性を求めた住宅が現在まで続いている。アクティビティの向上や街と溶けあうという名のもとに一方的に開放した空間が建設される。都会にあって、対面の家から見たくないその活動を見なくてはならないという計画は、「街に開放する」という言葉の履き違えではないだろうか。見る、見られる関係がある中、何を見るのか何を見られるのかについての配慮は必要と思われる。京都の町家のばったり床几や内外の関係を繋いでいる格子窓、しかし排他的な要素も持っている町家という伝統建築物からもその形そのものではなく精神として学ぶべきところは多いと思われる。街に対して開放的であるという時流のなかで、パブリックとは他人に対する敬意＝リスペクトのある開放性が求められることが望まれる。

芦原義信氏「街並みの美学」^{*12}における反転地図や横文彦氏による代官山ヒルサイドテラスのパブリックとプライベートを柔らかく繋いだ中庭空間等の思想の連続性を今後も絶やしてはならないのではないか。

「社会基盤としての建築」と捉えたと、設計、施工等の専門家として利益追求だけでなく立場のありかたや建物のメンテナンス等への相談、マンション組合と設計者、施工業者との利潤追求についての不正工事受注等の問題についての立ち居振る舞い、建設における多様化している発注方法とその対応についても解決の方向がみえてくるのではないだろうか。さらにこれらの状況から新たな建築家の関わり方、或は立ち位置を模索していくこと

は、今後の日本独自における建築家、設計者のあり方を模索することに貢献できるのではないだろうか。

3) 排他的専門性を含んで専門化する建築

「国家・国民の意思決定システムは、中央主権国家の体制からNPO, 市民グループ等の自主的な組織で意思決定がなされる体制へと変化して」^{*9}(前述石川)おり、建築分野のパラダイムシフトと捉えることができる。これまでの設計が設計者と行政だけの専門家集団(エリート集団)による意思決定から設計者と行政に加えて社会という三者による決定に変化してきているという。そういう状況でも昨今のまちづくりや美術館の運営においては「かたち」についてはかたちの専門家である建築家あるいは建築設計者に委ねられるという傾向も見られてきているようだ。

民意合意の為に意見を聞くが最終的な形態・かたちは建築家あるいは建築設計者に委ねられるという動きも起こっているようだ。^{*13}

即ち餅屋は餅屋に任せるという考え方は今後ますます細分化していく傾向にあるのかもしれない。

この際重要になるのが建築行為の説明責任である。公的資金を使用している発注者である建築(多くは行政)と出資者と利用者である市民に対する説明である。

設計プロセス、コスト、問題点やその解決方法等について広く世間に説明を行い、さらにレファレンダムを取り付けることが社会的ということと考えられる。

一般に広まれば広まるほど、専門性への分化が発生するというものである。木材の普及と同時に、茶室建築のように、素人にはその使い方がわからない、素人が手を出すなどという領域の出現である。流派によって決まりごとがあり、それを守るのは流派の中にある限りは必然かと思われるし、また基本的な型を知った上での自由ということも納得できる。守・破・離である。

この時に何も知らず使用する人たちをどこまで非難できるかという点が重要である。これにより専門分化はますます進むことになる。また専門のなかでの競争による差異の細分化により専門用語や専門的な使用方法が深化し、素人にはますます理解し難い世界が広がっていく。一般に建築用語自体が一般に受け入れ難い、理解し難い言葉となっている。広く建設業が一般に理解され受け入れられるためにも専門用語だけでなく言語体系の構築も必要になってくると考えられる。一般に設計論(設計者各位が自分の流儀で説明する論)・建築論・空間論等の哲学的要素を含んだ分野ではその性質上、難解な言葉が使用されている。

これは言語体系だけでなく複雑な請負形態や様々な建築設計の関与の仕方にも及ぶべきである。

一方で街との関わり方は上から目線ではなく、住民を巻き込んだコミュニティの参加が求められている。これにより維持も活用も可能

になるというものである。市民は税金を払っているからサービスを受けて当たり前、行政や社会はサービスをして当たり前という関係から、市民自ら行政や社会に参加して社会との共生を積極的に行っていくというスタンスが重要なのではないだろうか。建物の維持管理をボランティア活動で積極的に関わる、家の前の道路の清掃も行政まかせでなく、自分達で可能な範囲は清掃を行っていくという活動から街や公共建築物への愛着も広がっていくのではないだろうか。

4) 「他者の眼」という価値観 ― 観光客から考える建築と社会 他者の存在

「他者の眼」という価値観も重要な要素となるように思われる。

東浩紀氏は観光学の哲学で「共同体にのみ属する「村人」でもなく、どの共同体にも属さない「旅人」でもなく、基本的には特定の共同体に属しつつときおり別の共同体「観光客」的なあり方が、必要性（必然性）からでなく不必要性（偶然性）から考える観光客というふまじめな存在として大切だ」という主張をしている。^{*14}また観光客が観光地に来て住民が期待した楽しみ方とは全く別の形で楽しみ、そして「一方的に満足して帰るあり方と二次創作が構造的に似ている」という。最初は嫌われるにもかかわらず、時間が経つにつれ受け入れられ、いつのまにか住民や原作者の経済がそれなしに成立しなくなってしまう。少なからぬ地方自治体の経済が観光に依存している。



観光客の視線は今や現代のコミュニティー分析や地域研究では避けて通れない事象になっている。

あらゆる場所が観光客の視線をあらかじめ内面化し、街並みやコミュニティーをつくるように変わってしまい、全てがテーマパーク化しているのではないかと語っている。さらに大衆社会と消費社会の出現が労働者階級の共同体を生み、大衆観光が近代以降に作られ、いまや世界は急激に均質になりつつある、フラット化しているという。遊園地とは異なりなんらかの共通の目的をもったテーマパークは最終的には閉じたスペースとなり、異種を排除することになり、閉鎖的な場となる危険性を孕んでいる。

伏見稲荷（おいなりさん）が外国人によって新たに発見され、京都の文化も表層的な部分にしても意識の変化が現れている。周辺の地価の高騰までみられている。

平面的な画像での判断が横行する一方で、我々が建物・風景を見るときには経験というものが存在する。そしてその周囲の土地との関係、地霊との関わりも重要なものである。人は単に眼に映ったものを見ているのではなく取捨選択をして認識をしている。そこに何らかの歴史や無意識の周囲の景色も含まれて各自の体験に即して観ているのである。

従って観光客がもたらし、単なる他者でなく、移動する他者の存在の影響に即した結果各地で失われつつある風土・建築が持つ本来の豊かさは一旦途切れると再生は難しいと思われる。

グローバル化の社会においてはIT産業やIoTの躍進する中、これからの社会は他者の意見に対して耳を傾けることに重点を置かざるを得ない状況にあるが、それだけで今までの地域が育んできた文化が変わっていった良いのだろうか。しかしながら地域固有性は他者からの方が良く理解される。

このジレンマに対処するためには、一度失ってしまうと復活は困難である地域文化という意識をもって、地域・地元の意向と、地域の育んできた文化を「他者」が大切にす意向とのバランスをとっていく必要がある。

5) フォトジェニックな建築の社会的存在価値

伏見稲荷は頂上までにいくつもの社が存在している。しかし「インスタ映え」するようなショットのある風景、千本鳥居に代表される風景が一人歩きをしていく。

絶景の美学として名所図絵に見られるおきまりの景色やアングルからの風景、これは写真でのカットと同じ役割を果たしている。

つまり具体的な経験がなくとも、止められた時間、平面で表現された図像での判断によっている。

「現代社会では、ある作品がそれ自体の価値だけで評価され流通することはほとんどない」^{*14}といわれている。あらゆる作品は他の消費者がその作品をどう評価するか、そして

自分がこの作品に評価を与えたとして他の消費者は自分のその評価についてどう考えるかといった他者の視線を内包したかたちで消費されることになる。ネットワークでの「いいね」機能と同様である。特に二次元的な図や写真においてはその傾向が強い。

デザインビルドのコンペあるいはプロポーザルが多く採用され始めてきた。^{*15}

これは今までのプロポーザルにおいて審査員の目を引くために、コストを度外視したと思われるような計画案が多くだされ、かつ実施の段階でそのフォローをする技術的な設計事務所をさらにプロポーザルで選択するような傾向が一時期みられたことに起因しているのかもしれない。プレゼンテーションで獲得するためにやむを得ない部分もあるが、それにしても自ら招いた事象と考えることもできる。

建築家に設計を依頼したのに、スタッフにまかせて肝心の「建築の先生」が来ない、一体どうなっているのかという話はよく聞く話である。また積算についても工務店の見積もり内容に差が大きく、一体どの程度が設計建物の大筋の適正価格なのかがわからないという話もよく聞く。設計者側が見積・積算を行っていておおよその適正価格の算出を行う場合ではその積算・見積への報酬という問題が生じる。

お金を払えば良い仕事をするのか、良い仕事をするからお金を払うのかイタチごっこであるが、いずれにしろ作業や価値に対する報酬という概念を建築と社会がもっと身につけるべきではないだろうか。

3-2 ヴァージョンアップ（アップデート）する世界・社会の必要性

1970年大阪万博時の未来は、今どの程度現実化されたのだろうか。東京都臨海副都心開発で関わったモデルビルや副都心という未来型であった都市は今我々の生活にどのように関わっているのだろうか。現在の臨海副都心は都市のスケールや住居パターンからも時代遅れに近い感じがしないでもない。

時代遅れというよりはあの頃の未来は一体何だったのだろうかと思わざるを得ない都市がそこに存在していると感じた。

1) 結論を急がず途中の長い、長いプロセスに耐え続けること

「性能が高いものは価値が高いと考える傾向があるが、性能が価値そのものではない。」「性能は建物の属性であり価値は使う側の評価である。使う人の評価能力で変化する。」^{*16}

上述の様々な価値観から導きだされた「もの」や「こと」は、その保持している性能とは必ずしも一致せず、評価する人や評価において用いられる価値観によって決定されるであろうということである。したがって同一人物においても時間によって異なるだろうし、所属する社会や因習によって価値は異なっていくことになる。価値観の違う人たちのため

の領域をどのようにして確保していくのか。

「結論を急がず途中の長い、長いプロセスに耐え続ける能力というネガティブケイパビリティが建築史学にとって重要な能力である」と鈴木博之氏が語っているが、建築と都市・社会の関係も同様ではないだろうか。これによって保存や再生の問題も見えてくるのではないだろうか。今結論するのではなく、先延ばしをするのである。大きな目標でなくその都度容認し対応していく、対策していく、どこに行きつくかは誰も知らない。ユートピア^{*17}を作り出すことを諦める。

これは戦後の日本、明治以来の日本が発展という名のもとに急激に変化し、スクラップアンドビルドを繰り返してきた政策に対して、何でも保存という運動が活発化している昨今の保存運動の新しい根拠の一つにもなるのではないだろうか。

世界製作の方法として新たに作り出すということから、ヴァージョンアップしていく社会^{*18}に対してその都度の対応を検討し、対処していく立場としての建築家像や社会像を作り出すことは重要なことではないか。

アイデアとしての目標を定めてそこに邁進する計画型から、その都度対応していく対処型への変換は今後の未知の社会に対して柔軟な対応ができるものであると思われる。

本質存在として都市とは何か、都市はどうあるべきか、社会と建築の関係はどうあるべきかと問うことではなく、事実存在として建築と社会は現在どういう関係があって、どう問題が生じていて、それに対して現時点ではどのように対処していこうかというスタンスである。一見無計画、無自覚、非創造的に聞こえるかもしれないが、これからの思考パターンの一つになるのではないか。いまだに我々はプラトンの影響力から逃れていないというわけである。^{*8}

2) 長い時間の中での創造的な建築は可能か。

都市が建築博物館となるにつれ、「建築」と「建物」の差がなくなるのだろうか。その選別のラインはどこに引かれるのか。「建築」は一般の「建物」とは異なり、崇高な理念のもとに設計者が作ったものであると西欧建築の教育を受けてきた日本の建築教育のなかで、当然神社仏閣や豪邸以外の木造民家は建物に分類され建築教育を受けたものの眼中には入ることがなかった。自然は既にあるものを発展させているだけであること。なにひとつ新しいものを発明はしていないという点にも注視する必要がある。

建築の形態も進化していくというよりは、ゆっくり引き起こされる軽微な改変だけであると考えることができる。

日本において西欧近代建築の影響はその発生からして避けて通ることはできず、未だに西欧建築と日本の伝統建築或いは在来工法との共存状態にある。和風について伊藤ていじ監修「和風住宅の手法」(新建築)1987年において、鈴木博之氏は「極めて水準の高い有益

な試み」としながら、それでも「江戸時代の和風から大正期のアーキテクトによる和風との断絶」を感じている。

当時の建築家たちの主眼が建築あるいは近代的な建築であったことを前提とした和風の扱いに対して、「和風を単なる手法の問題として扱うのではなく、ひとつの文化階層の営みとして解明し続けていただきたいものだ。」と語っている。

また明治期の疑似洋風についても単なる猿まねではないとしながらも、自己流と創造性を区別している。自己流と創造性の違いに我々はもっと自覚的になることで創造性の領域は作られていくのではないか。

4. おわりに

1) 社会資本を市民が守っていく

ある駅前に劇場を創る計画を想定した時、西日が見えている利点を生かした計画は、将来周囲に建物が建ってしまうからその計画は無意味だとして廃棄してしまう考え方がある。

社会資本としての建築として、公共建築に「西日を避ける建物の建設を抑制させるという力をもたせる」ことはできないだろうか。

資本主義の世界では無意味な抵抗であるだろうが、社会資本を市民と一緒に守っていくスタンスから、その建設を抑制することは可能である。もちろんその建物が魅力を持ち、市民に愛されていないならならぬだろうが。

この力により法的に建設可能かどうかという条件を超えた地域らしい町や社会ができてくるのではないだろうか。

2) きのこの成長できる土壌をつくる

きのこは適した土壌にしか生育しない。(篠原一男氏)^{*19}きのこの生育できる土壌かどうか、あるいは今後きのこが生育できる土壌に改良できるか、これは建築・街並景観・社会にとっての指標になるであろう。今はきのこの育成に適していないとしても、地域の努力により、あるいは保存活動(先延ばしされた保存)によりきのこ(良い景観、のこすべく建築等)が育っていくことを望む。またもし現在は豊かな土壌であっても、社会としての対応が何もないければ、次第にやせ細った大地になっていくであろう。生かすも殺すも我々市民、社会なのである。もし突飛な建築物が建設されてもその判断を次の時代に託すことも視野にいれたい。それにより今後の価値観の変化により芸術的価値が上がることも可能である。

そして都市は建築の博物館、地域の文化の博物館となることを期待する。

都市は集中型大土地所有者層(住宅地開発型)、集積型土地所有者層(貸地経営型)、小規模土地所有者層(貸家経営)の三種類の地主の振る舞いが変化していく原動力であった^{*11}という分析事例もある中で個別の建築が都市を変革する可能性は低いが、それでも建築博物館としての都市、歴史と記憶が語れる建築の集積である都市は魅力あるものになるはずで

ある。

建築は時代精神をやはり表していると思われるし、当時の技術を表しているとも考えられる。技術優先だけの建築でなく、小規模事務所の存在意義である成熟技術を優先としながらもその成熟化を拒み続けるところに開かれるであろう領域の存在を都市は語り続けることができるのである。社会は技術とそれを拒み続けるスタンスの双方を受け入れるだけの許容力を持つことが求められる。

世界は新しい発見があり、ヴァージョンアップしていくことが世界製作の方法であるという考え方がある。^{*18}おそらくできるのは、最終的な目標を設定せずに、その時々の変化に対してその都度新たに対処していくこと、対処し続けること(アップデート)、建築と社会が持っている時間は、一人の人間の持っている時間よりも長いことを意識して、結論を先延ばしすること、幾つかの想定を無責任に設定し、その錯覚から次の錯覚への連繋していく構図をみるのが我々に可能な事ではないだろうか。

結論を急がず途中の長い、長いプロセスに耐え続けるという建築と社会と人間との新しい関係を社会のなかに注入することで新しい発見、ヴァージョンアップ(アップデート)が実現するかもしれない。

参考文献

- ※1 Colin Davies 著 朽木順綱訳「建築を考えるとときに大切な8つのこと」丸善出版
- ※2 真木悠介著「時間の比較社会学」岩波書店を参考にした。
- ※3 Giuseppe Penone The Viens of Stone 豊田市美術館1997
- ※4 アロイエス・リーグル 尾関幸訳 現代の記念物崇拜 中央公論美術出版
リーグルの提唱している価値を参照している。
- ※5 西山松之助校注 南方録 岩波文庫
- ※6 原広司著 空間<機能から様相へ>岩波書店
- ※7 平成19年(社)滋賀県建築設計家協会主催 芳賀徹氏講演会 住まいへの郷愁ー日本詩歌における家屋の表象ー
- ※8 木田元著「わたしの哲学入門」講談社学術文庫
- ※9 石川高重 日本女子大学 建築社会学 HP
- ※10 C・ロウ、F・コッター著 渡辺真理訳「コラージュ・シティー」SD選書 鹿島出版会
- ※11 鈴木博之著ー伊藤毅編「建築 未来への遺産」東京大学出版会
- ※12 芦原義信著「外部空間の設計」彰国社
- ※13 鷺田めろ「公共の概念と建築家の役割」201710 HP
- ※14 東浩紀著 観光客の哲学 ゲンロン 0
- ※15 小野田泰明「多様な発注方式の中に建築家の立ち位置を考える」JIA MAGAZINE344
- ※16 内田祥哉著「現代建築の造られ方」市ヶ谷出版社
- ※17 巖谷國士著「シュルレアリスムとは何か」ちくま学芸文庫
もともとtopos＝場を持たないという意味で桃源郷、アルカディアとは異なる
- ※18 ネルソン・グッドマン著 菅野盾樹訳「世界制作の方法」ちくま学芸文庫
- ※19 篠原一男・監修「アフオリズム・篠原一男の空間言説」鹿島出版会

健全な民泊サービスの 推進に向けて

～住宅宿泊事業法の概要～

村井香菜

国土交通省観光庁観光産業課主査

平成29年6月9日、「住宅宿泊事業法」（平成29年法律第65号。以下「法」という。）が成立し、同年6月16日に公布され、平成30年6月15日に施行される予定である。本法は、急速に拡大するいわゆる民泊について、安全面・衛生面の確保がなされていないこと、騒音やゴミ出し等による近隣トラブルが社会問題となっていること、観光旅客の宿泊ニーズが多様化していること等に対応するため、一定のルールを定め、健全な民泊の普及を図るものである。

本稿では、本法の基本的な内容を説明することとする。筆者は、立案事務を担当した者であるが、本稿中の意見は個人的見解であることをあらかじめお断りしておく。

法の制定の経緯等

JNTO（日本政府観光局）の調査によると、2017年（1月～12月）の訪日外国人旅行者数は2,869万人となり、5年連続で過去最高を更新した。今後、2020年の訪日外国人旅行者数4,000万人という目標の達成に向け、これらの者の宿泊先を確実に確保することが喫緊の課題となっている。

また、近年、訪日外国人旅行者が急増しているとともに、訪日外国人旅行者の間では、安価かつ日本のライフスタイルを体感することができるとして、住宅での宿泊サービスを利用したいニーズが高まっている。

他方、少子高齢化社会を背景に、近年、空き家・空き室となっている住宅等が増加し、宿泊サービスを提供する住宅所有者側からも、宿泊施設として、その有効活用を図りたいというニーズが高まっている。

このような状況の中、宿泊サービスの利用側・提供側双方のニーズを満たす新たな形態のサービスとして、いわゆる「民泊サービス」が世界各地で出現・展開しており、我が国でも急増している。そのため、民泊サービスに

ついては、急増する訪日外国人旅行者のニーズや多様な宿泊ニーズへ対応し、観光先進国を実現していく上で、その活用を図ることが急務となっている。

一方、感染症のまん延防止等の公衆衛生の確保や、地域住民等とのトラブル防止に留意したルールづくりはもとより、人を宿泊させる事業を行うために必要とされている許可等を受けずに無許可で実施されているものが多数存在している。その是正を図ることも必要となっており、本法はこのような課題に対応するため制定されたところである。

法の内容

本法は、健全な民泊サービスの普及を図り、制度の一体的かつ円滑な執行を確保するため、住宅宿泊事業のみならず、関連する事業として、住宅宿泊事業者から委託を受けて住宅宿泊事業の用に供する住宅の管理を行う住宅宿泊管理業、住宅宿泊事業の仲介を行う住宅宿泊仲介業を規制の対象とし、これら性格の異なる3つの事業を一体的に管理することとしている。以下では、住宅宿泊事業に係る基本的な事項について、法令の内容を解説する。

■住宅の定義

宿泊営業を行うには、原則、旅館業法に基づく許可が必要であるが、本法では、一定のルールの範囲内で、一定の設備を備えた居住性のある施設で一時的に宿泊営業が行われるものについて「住宅宿泊事業」として、必要な届出を行った場合には旅館業法の許可を不要と定めている（法第3条第1項）。

住宅宿泊事業を実施できる「住宅」の設備要件は、台所、浴室、便所、洗面設備が備えられた施設である（法第2条第1項第1号、住宅宿泊事業法施行規則（平成29年厚生労働省・国土交通省令第2号。以下「国・厚規則」という。）第1条）。また、居住要件として、現に人の生活の本拠として使用されていること、入居者の募集が行われていること、又は随時その所有者、賃借人又は転借人の居住の用に供されていること等を求めることとしている（法第2条第1項第2号、国・厚規則第2条）。

■180日の考え方

住宅宿泊事業は、一定の設備を備えた居住性のある施設を用いるという性質上、通年ではなく一時的に実施されるものであることから、人を宿泊させる日数は1年間で180日を超えないものとしている（法第2条第3項）。

■届出

住宅宿泊事業を営もうとする者は、都道府県知事等に当該事業を営む旨の届出をする必要がある（法第3条第1項）。

■宿泊者の安全の確保

宿泊者は、届出住宅の環境に慣れていないことが想定され、火災等の災害が発生した場合、円滑に避難することができないおそれがある。このため、住宅宿泊事業者に対し、災害発生時における宿泊者の円滑な避難を確保するための措置を義務付けた（法第6条）。

当該措置については、届出住宅に、非常用照明器具を設置すること、避難経路を表示すること等を規定している（国土交通省関係住宅宿泊事業法施行規則（平成29年国土交通省令第65号。）第1条）。

■周辺地域の生活環境への悪影響の防止に 必要な事項の説明

住宅宿泊事業は主に住宅地で実施されることから、宿泊者による騒音等、届出住宅の周辺地域の生活環境への悪影響を未然に防止する必要がある。このため、住宅宿泊事業者に対し、騒音の防止、ごみの処理及び火災の防止に配慮すべき事項等を宿泊者に対して書面の備付け等の方法により説明しなければならない（法第9条、国・厚規則第8条）。

■苦情等への対応

主に住宅地であることから周辺地域の住民からの苦情や問合せが想定される。このため、住宅宿泊事業者に対し、適切かつ迅速に処理することを義務付ける（法第10条）。

■標識の掲示

届出を行った住宅宿泊事業者であることを明確にすること、住宅宿泊事業者が居住していない住宅について住宅宿泊管理業者の連絡先等を示すこと等により、届出住宅の周辺地域の住民に対して、苦情及び問合せ先を明らかにする必要があることから、届出住宅ごとに、公衆の見やすい場所に、標識を掲げなければならないこととしている（法第13条、国・厚規則第11条）。

■条例による住宅宿泊事業の実施の制限

本法は、全国的に一定のルールを作り、健全な民泊の普及を図るものであり、当該ルールの下で、住宅宿泊事業の実施を可能としている。本法の趣旨を踏まえると、住宅宿泊事業に対して、事業の実施そのものを制限するような過度な制限を課すべきではない。

しかしながら生活環境の悪化を防止する観点から必要があるときは、本条に基づき合理的と認められる限度において、一定の条件の下で例外的に都道府県等が住宅宿泊事業の実施を制限する条例を定めることを認めている（法第18条）。

（むらい かな）

●村井香菜

平成26年京都大学法学部卒業。平成27年国土交通省入省。

IoT ホーム Link
「Life Assist」

田代達一郎

株式会社LIXIL
ZEH推進事業部 ZEH推進商品開発部

はじめに

我が国の家庭部門における最終エネルギー消費量は石油危機以降約2倍に増加し、全体の15%程を占めている。¹⁾ この大きな問題に対し、国は地球温暖化対策の促進を図るため、ZEH（ネット・ゼロ・エネルギー・ハウス）の仕様を規定し、様々な支援を行うことでZEH普及を期待している。²⁾

ZEHにするためにはエネルギー監視をするHEMS（Home Energy Management System）を設置しなければならないが、当然ながら従来のHEMSは「エネルギーの見える化」がメインだった。しかしユーザーは、どこが消費エネルギーに大きく影響しているかわかると、その部分を見直し、以後は必要ないと判断され、画面を見ることすらない。

また、エコネットライト規格対応の家電と連携することで、宅内での遠隔操作を可能としたが、機器付属のリモコンの方が便利と判断されてしまい、便利な機能とは認識されていなかった。

このような中でLIXILでは、ZEHにより省エネで健康・快適な住まい（住宅性能の向上）とするだけでなく、付随するHEMSの機能を進化させてIoT（Internet of Things）として日々の暮らしに寄り添い、より便利で安心な暮らし（生活価値の向上）を実現できることをねらった開発を試みた。

LIXILのHEMSシステム

■Life Assistの概要

住宅のIoT に関しては、前述のHEMSのように、エネルギーマネジメント及び家電や建材を遠隔操作できるものと、センサ類に反応してカメラで静止画や動画を撮影してメール送信するといった簡易な見守りシステム等がある。だが、これまでこれらは別々に扱われ販売されてきた。

簡易な見守りシステムには、生活シーン



図1 Life Assist概要図

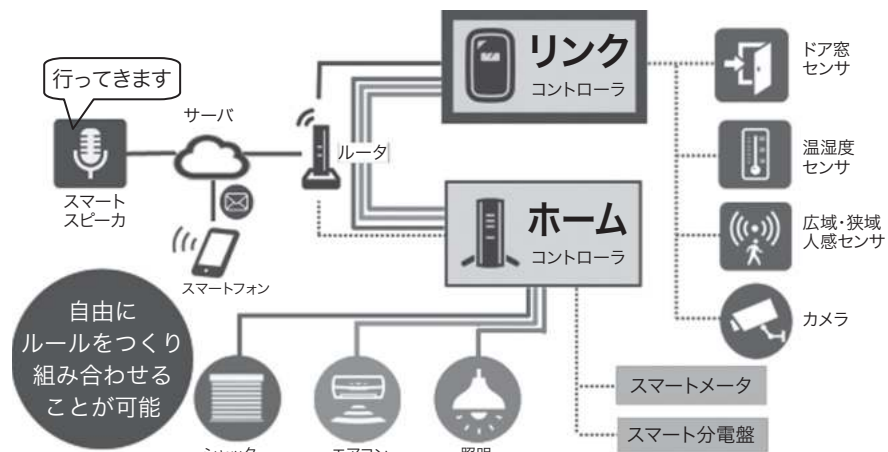


図2 アシストルール機能例（外出時）

(Mode) に合ったきっかけ (Trigger) で何かを動かす (Action) という機能が備わっている。Life Assistでは、この機能をHEMS側と連携することで、ただ単に何かを遠隔操作ができるというものから、何かをきっかけに複数のIoTデバイスが動き出せるしくみ（アシストルール機能）を開発し、商品化することに成功した。本システムの概要図を図1に示す。このシステムの活用例の一つが、スマートスピーカーで一言依頼するだけで、複数のIoTデバイスが一斉に動作することである。日々の暮らしの困りごととして、家中のエアコンのON/OFF、照明のON/OFF、シャッターの開/閉など、時間のない朝の外出時は一つ一つ確認しながら操作していた。それが、スマートスピーカーに「行ってきます」と一声かけるだけで、一斉に操作され、出かける準備が完了し、消し忘れ、閉め忘れを防止してくれる（図2）。ルール機能は、自由な組合せを簡単に設定できる作りとなっている。

専用のエネルギー監視モニタを採用せず、スマホ、タブレットから操作できるようにしているため、宅外からの遠隔操作も可能としている。そのため、玄関の鍵の閉め忘れを心配してわざわざ家に戻る必要もなくなり、その場で確認して、もし解錠状態の場合は、遠隔で施錠することが可能となっている。

家に帰る前にエアコン、照明を自動させる

ことも、浴槽に給湯することも可能となる。

エコネットライト規格対応を標準としているため、遠隔操作時に状態確認ができるだけでなく、様々なメーカー品を選ぶことができる。

■本システムの将来性

スマートスピーカーと本システムの連携はIFTTTを採用している。IFTTTは位置情報アプリや天気アプリ等との連携も可能となるため、自動操作性がさらに向上しやすい作りとなっている。当然防犯を考慮した箇所の操作になるが、温湿度センサをトリガーとして、開口部の開閉による通風や付属物の日射遮蔽操作がアシストルールによって可能となり、室内温湿度をコントロールすることができ、さらなる省エネ制御が可能となる。

今後、社内外を通して様々な機器・機能とつながっていくことでさらなる生活価値向上に貢献できると期待している。

■参考文献

- 1) 資源エネルギー庁：ZEHに関する情報公開について
- 2) 閣議決定、地球温暖化対策計画2016.5.13

（たしろ たついちろう）

●田代達一郎

1997.4 新日軽株式会社入社
2011.4 株式会社LIXILへ統合
2017.4～ ZEH推進商品開発部所属

「建築と社会」誌

特集一覧 ●1996～2017

大正6年3月に誕生した日本建築協会（当時・関西建築協会）の、機関誌は大正6年9月に「関西建築協会雑誌」と題して創刊された。大正8年に「日

本建築協会雑誌」、さらに1年後には「建築と社会」と改題し、今日に至っている。
取り上げてきた特集テーマは下記のと

おりで、バックナンバー購入希望は、日本建築協会事務局（TEL 06-6946-6981、FAX 06-6946-6984）まで。
販売価格は1,230円(税込・送料別途)。

号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1996 vol.77	● 阪神大震災から学ぶ	● 大阪府住宅供給公社創立30周年記念*	● 遠江―その地方振興と文化*	● 立体駐車場設備 ● 大建設計	● 災害！非常時に生きる法体系 ● OAPタワーズ	● いま、プールがおもしろい	● 住まいの未来像	● マルチメディアが活躍する世界	● キーコンセプトの新時代	● 最新の大規模スポーツ競技施設の設備	● 私の空間作法*96 ● 九州の元気 ● りんくうの3作品	● 第43回青年技術者 ● 近畿地建協緒部
1997 vol.78	● 建築のロングライフ化をめざして	● 鉄ものがたり*	● 東海支部会員作品 ● 金沢・能登―風土・文化とまちなみ・建築*	● 創立80周年記念 復興―法・制度の運用と新たな展開へ― ● 住都公園関西支社	● 木造建築物の伝統技術とその将来	● 住む空間の復興―法・制度の運用と新たな展開へ― ● 住都公園関西支社	● 素材の不思議 ● 大阪ドーム	● 新エネルギー ● 住宅・都市整備公社改革への提言	● クロスワード都市OSAKA*	● モザイク都市の住む人たち ● 昭和設計40周年	● 私の空間作法 ―会員作品―	● 第44回 青年技術者 ● 京都駅ビル
1998 vol.79	● 新しいまちづくりの予感 ● 東畑建築事務所創立65周年	● Concrete ● 九州とわたし、そして建築	● 東海支部会員作品 ● 信州―諏訪とその周辺―	● 街並みの演出―最近の外構材料	● 生活環境の安全・安心	● 地球環境保全と建築	● 心と体を元気にするインテリア	● 建築設備―ビルメンテナンスの立場から	● 建築への証言*98 ―21世紀に向けて	● ゆれをとめる―たえざる技術からかわす技術へ	● 私の空間作法 ● 2001年の医療施設	● 第45回青年技術者 ● 駅とともに歩んだJR西日本の12年
1999 vol.80	● “らしさ”のデザイン ● 建築を結ぶ、小粋なモノの仕掛人	● 大阪市都市整備局	● 東海支部会員作品*99 越中・富山―街並み風景と地域文化の再構築	● 都市のパブリック	● 関西建築界の流れと東畑謙三の足跡をたどる	● 大阪城天守閣平成の大改修	● 改正建築基準法―まちづくりの展開―	● 私の目でみた環境問題	● アーバンインテリア―都市空間としてのインテリア	● 木とともに*	● 私の空間作法	● 第46回 青年技術者
2000 vol.81	● 21世紀のデザインの動向を見る ● 安井建築設計事務所所創業70周年*	● 中国支部―しなみ海道と中国地方の街づくり―	● 東海支部会員作品2000 越中・富山―地域文化の振興と新たな展開―	● 東海支部会員作品2000 越中・富山―地域文化の振興と新たな展開―	● 測る―測定方法と測定結果が意味するもの―	● スケルトン&インフィル	● 改正建築基準法―パートII―	● 100年後へのメッセージ ● 日建設計創業100周年	● 来世紀に引き継ぐ―わさ、もの、こころ―	● 時間*	● 私の空間作法 ―会員作品― ● 21世紀の高齢者の居住環境	● 第47回 青年技術者
2001 vol.82	● エヌ・ティ・ティファンリティーズ*	● 21世紀の建築設計教育	● 東海支部会員作品 ● 岐阜・大垣	● IT社会におけるさずおける	● 自然素材をめぐる「もの・わざ・ひと」	● 成熟社会をささえるまちづくり	● 現代の日本の空間・文化を探る	● いま、インテリアデザインは ● 洋リバープレイス*	● 建築とボランティア	● 緊張 ● 都市基盤整備公社関西支社	● 私の空間作法 ―会員作品―	● 第48回 青年技術者 ● NHK大阪放送会館・大阪歴史博物館
2002 vol.83	● 国土交通省近畿地方整備局管轄部	● 再生・リサイクル	● 東海支部会員作品 ● 愛知・名古屋	● 生活環境の安全・安心 ―パート2―	● 塗装のいろいろ	● 都市再生に向けた建築基準法集団規定のあり方	● いま、インテリアデザインは ● 洋リバープレイス*	● 建築をささえるセンサー	● 建築とボランティア	● 時を超えて―サステナブルエンジニアリングの現在―	● 私の空間作法 ―会員作品―	● 第49回 青年技術者 ● 大阪市中央公会堂
2003 vol.84	● 東畑建築事務所創立70周年	● 九州の地域づくり・まちづくり	● 東海支部会員作品2003 愛知・名古屋―二の地の文化・芸術と建築・街づくりを考える―	● サステナビリティ―光世代に引き継ぐ都市・建築・暮らしのデザイン―	● 建築と五感	● 都市計画法及び建築基準法等の改正	● コンバージョン―インテリから発信するまちなみ―	● 介護と建築・設備	● 建築とノスタルジー―建築の主観的価値について―	● 力と楽しくつき合う方法	● 私の空間作法 ―会員作品―	● 第50回 青年技術者 ● 青年技術者顕彰50年
2004 vol.85	● 大阪市住宅局	● 都市緑化	● 東海支部会員作品 ● 愛・地球博*	● 省リスクな「まち再生」	● リニューアルの技	● 地域住民主体のまちづくりと支援制度	● Product Design+1	● 銭湯～心地よさを求めて～	● 建築家とは何か	● 巨大地震にそなえて	● 私の空間作法 ―会員作品―	● 第51回 青年技術者
2005 vol.86	● 震災から10年	● 「健やか」 ● 長崎医療センター	● 東海支部会員作品2005 東海における施設づくりへの新たな試み	● 建築の経済化	● 住まい方の変化	● 人工栽培	● 次世代に伝える「木」の建築 ● 「建築と社会」1000号記念	● 改正建築基準法と景観緑三法	● 火災から守る	● 構造の過去から未来へ	● 私の空間作法 ―会員作品―*	● 第52回 青年技術者
2006 vol.87	● 都市環境デザインと参加のまちづくり	● 「地方空港の時代」～まちと共存する空港づくり～	● 東海支部会員作品2006 十東海支部特集3部作	● 都市再生の本質～光と影のはざまで～	● 変容する家族形態とあたららしいライフスタイル	● 身近な省エネルギー～エネルギーをたぐい、有効利用する～	● 設計図が伝えるもの	● 建築物の安全・安心	● 第53回 青年技術者	● 「セキュリティ」	● もしも… ―構造が未来へつなぐ夢―	● 私の空間作法 ―会員作品―
2007 vol.88	● 光り輝く京都の景観まちづくり	● 学校新時代	● 東海支部会員作品2007 十東海支部特集3部作	● 創立90周年記念―この10年、これからの10年	● あそび考	● ここのが創る住まいのかたち	● 住まいの設備と空間の移り変わり	● 建築系雑誌が伝えるもの	● 建築基準法等大改正	● 第54回 青年技術者	● ガラスを考える	● 楽しい構造の世界
2008 vol.89	● 私の空間作法―会員作品―	● PFI事業、その後*	● 東海支部会員作品2008 十東海支部特集3部作	● まちづくり2011年宣言	● 新ホテル物語	● 設備に役立つ地震対策	● 中国地方を訪ね歩いて見えるもの ● 小林聖心女子学院	● 建築と景観	● 第55回 青年技術者	● 木造住宅を巡って	● 建築においてROBOTが活躍する日は来るのか？	● 自然と戦う構造
2009 vol.90	● 私の空間作法―会員作品― ● 京阪電車 中之島線―新線が延伸・延伸時代―	● 水の都にぎわいのある未来に向けて	● 東海-TOKAI オムニバス	● 楽しい福祉	● 体感するインテリア	● 建築空間が求める空気環境（空気質）	● 建築と水	● 実用レベルで展開される施工管理のIT化	● 第56回 青年技術者	● 地域の歴史資産を活かしたまちづくり	● 第16回 会員作品特集 “私の空間作法”	● 構造家日記～頭の中をのぞいてみたら～
2010 vol.91	● 創業110周年記念特集 NIKKEN SEKKEI	● 建築とエコ技術	● 東海支部復活50周年記念号 東海-TOKAI オムニバス	● 食と建築・都市	● ホスピタリティのあるケア空間	● 太陽光発電	● 建築と石	● 再生・受け継ぐ・繋がる*	● 第57回 青年技術者	● 建築ストック社会の形成への展望	● LED照明の活用・将来を考える～人・地球への思いやり～	● 東京スカイツリー
2011 vol.92	● Uターン促進第一回地産地消再生実践試案～ストロガ活時代～の展開 第17回 会員作品“私の空間作法”	● BIMは設計を革新するものか？	● 東海支部復活50周年記念号 東海-TOKAI オムニバス	● まちなかのサードプレイス	● 変遷する“身の置きどころ”	● ECO～建築設備が出来るECO技術～	● 建築と土	● 鉄道駅に注目する	● 第58回 青年技術者	● 火災に強い建築を考える	● コンクリートという素材	● 構造教育と社会
2012 vol.93	● 自然災害に立ち向かう力を求めて	● 今、私が思う「和」	● 東海支部特集	● 第18回 会員作品“私の空間作法”	● 中国市場に挑む	● ZEB ネット・ゼロ・エネルギー・ビルを目指して―低炭素社会の実現に向けて―	● 建築と窓	● 巨大地震に備える	● 第59回 青年技術者	● 超高齢社会に求められる住まい	● 歴史的建造物の保存活用	● 身のまわりの世界の「構造」を探る
2013 vol.94	● 東畑建築事務所創立80周年 U-35のまなざし ● 脱成長の時代を考える	● “らしくない”空間 ● 小特集 中之島フェスティバルタワー	● 東海支部特集	● 第19回 会員作品“私の空間作法”	● コミュニティの“かたち”―人と人のつながりを再考する―	● 無駄から見える節電	● 第60回 青年技術者	● グランフロント大阪	● 素材としての建築	● 建築に携わるものに求められること	● 木の街をつくる	● 実験
2014 vol.95	● エリアマネジメントの展開に向けて	● 融合する空間～新たな試み～	● 東海支部特集 ● 小特集 「ABENO REBORN」	● 第20回 会員作品“私の空間作法”	● オフィスビル設備の変遷とこれから	● オフィスのこれから	● 第61回 青年技術者	● 建築と時間	● 省エネ・低炭素のこれまでもこれから	● 大阪・土町台地・あべのハルカス ● 複層・高度化する建築とその技術について	● でっかいものはすごいぞ	● 安井建築設計事務所90周年
2015 vol.96	● フォー・オールの時代に向けて	● 場をつくる～プログラムの挑戦～リノベーションのリアル	● 支部復活55周年記念 東海支部特集	● 第21回 会員作品“私の空間作法”	● あかり・文化・創造	● これからの学びのかたち	● 第62回 青年技術者	● 建築の価値	● 空き家と向き合う	● 職人がいなくなる!!オリンピックと10年後に備えて	● 形態にあらわれた構造	● 「図面」を愛する～BIMの深化が誘う建設プロセスの変革～
2016 vol.97	● 都市の記憶をたどって	● 非日常の棲み処～寝泊まりの進化	● 東海支部特集	● 第22回 会員作品“私の空間作法”	● 人の移動・物の移動・情報の移動	● 第63回 青年技術者	● おもてなしと建築	● UR都市機構西日本支社～暮らしの先駆けのまちづくり	● 人口減少社会のまちづくり	● 見えないうものを語る～新たな技術による施工管理・検査システムへの展開～	● 構造を支える人と技術のつながり	● ボーダレス～消失する境界と拡張する領域
2017 vol.98	● ニュータウンから学ぶこれからの「計画」	● 第23回 会員作品“私の空間作法”	● 日本の「建築と社会を繋ぐ」プロジェクト100	● 東海支部特集	● 建築設備の伝統と革新	● 第64回 青年技術者	● 100年前の建築、100年後の建築～意匠・空間の視点から～	● 観光立国を目指した宿泊施設について	● 100年前の建築、100年後の建築～施工・材料の視点から～	● 社会と繋がるディテール	● 関西で木と生きる	● 時間軸に挑むクリエイター達～時をデザインするということ

*は欠号

国立飛鳥資料館

基本設計：谷口吉郎
実施設計：近畿地方建設局営繕部
施工：村本建設

(1976年1月号)

福嶋啓人

奈良文化財研究所
都城発掘調査部遺構研究室 研究員

三宅拓也

京都工芸繊維大学
デザイン・建築学系 助教

■古都・飛鳥の保存

戦後の高度経済成長は急激な都市発展をもたらした。日本全国で郊外や農村の開発が進んだ。宅地開発による都市化の波は、飛鳥時代の遺跡が数多く残り、1966年に古都保存法による「古都」に指定されていた明日香村（奈良県高市郡）にも押し寄せる。

住民の生活向上を図りながら、飛鳥地方の歴史的風土と文化財をいかに保存していくか。保存と開発をめぐるこの「飛鳥保存問題」は、全国的にメディアで取り上げられ、やがて政界にまで波及して、当時の内閣総理大臣・佐藤栄作や文部大臣・坂田道太も現地視察をおこなった。こうして、1970年12月に「飛鳥地方における歴史的風土および文化財の保存等に関する方策について」の閣議決定へと至る。閣議決定では、飛鳥地方の歴史的風土と文化財の保存・活用に資するための環境整備として、明日香村北部の大字奥山に歴史資料館を設置することが掲げられた。これを受けて整備計画が進められ、1975年に開館したのが飛鳥資料館（以下、資料館）である（図①）。

『建築と社会』は、1976年1月号で前年に完成した新建築としてこれを掲載している。この時は写真による紹介のみであったが、以下では奈良文化財研究所（以下、奈文研）に残された図面資料を参照しながら改めてこれを紹介したい。奈文研が所蔵する図面には「谷口吉郎建築設計研究所」によるものが含まれ、設計変更後の基本設計図（1972年）と外構基本設計図（1974年）には、「谷口」と「砂川」の押印がある。砂川の印は当時製図担当を務めた砂川雄二郎のものであろう。

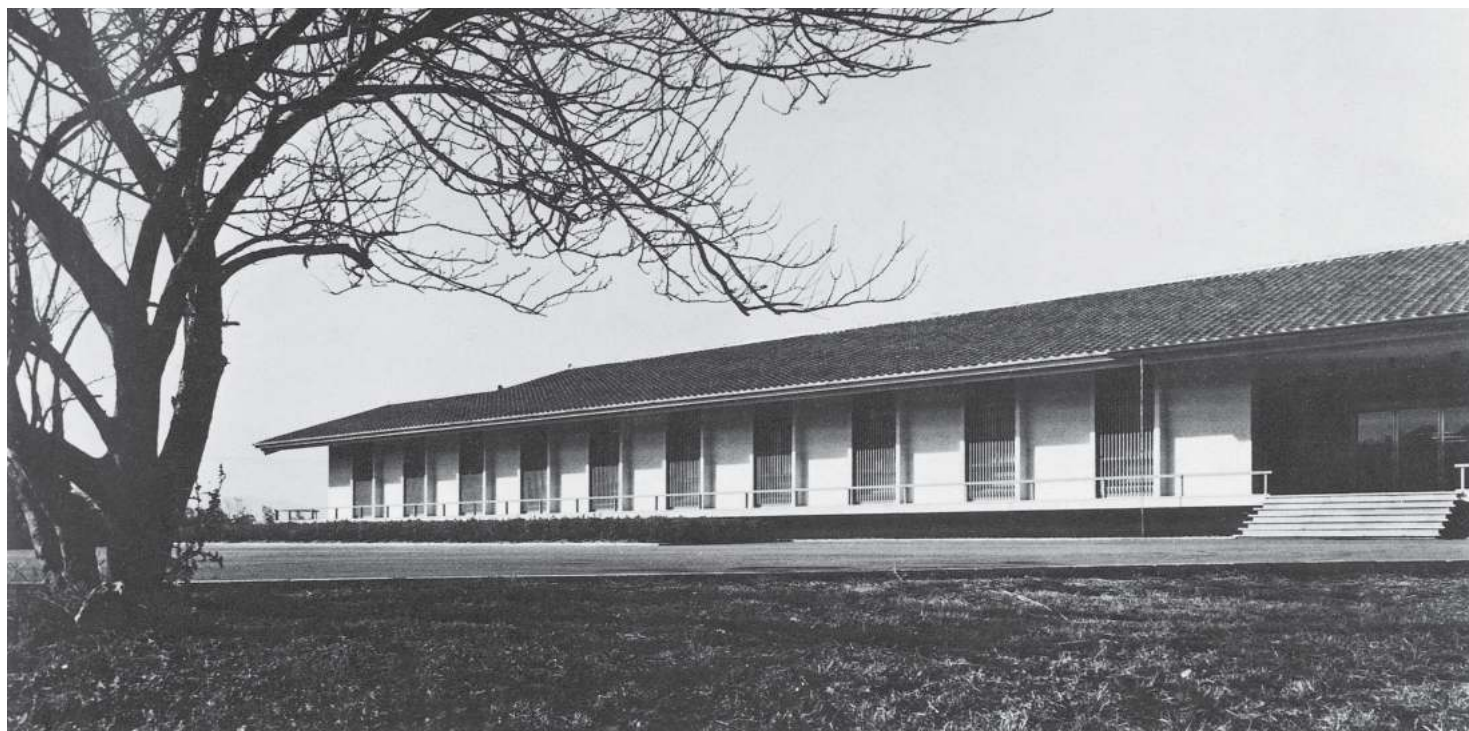
■建設の経緯

資料館の設立準備は文化庁が主導した。文化庁は1971年4月に学識経験者による設置準備会議を置き、施設の建設や展示を含む基本構想を検討する。委員には浅野清、内田祥哉、大屋富美雄、菅野誠、関野克、谷口吉郎の建築関係者に加え、奈文研所長、奈良県教育委員会委員、そして文化庁からも参加があった。

同年9月、この会議のなかで基本設計が谷口吉郎に依頼されることになる（のちに外構計画も依頼される）。選定理由は不明だが、東京国立博物館東洋館（1968年）や東京国立近代美術館（1969年）といった国立の博物館を手がけてきた実績は少なからず影響しただろう。なお、当初、資料館は独立機関として設立される予定であったが、結果的には、奈良国立文化財研究所（現・独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）に置かれた。

1972年春には基本設計が完了し、すぐに実施設計が建設省近畿地方建設局によって進められた。しかし、その後の奈文研による敷地内の発掘調査で7世紀中頃の石組暗渠遺構が発見され、これを受けて設計変更が行なわれることとなる。その後、1973年2月に最終的な設計案が設置準備会議で決定され、同月、建築工事が起工された。

建築施工は村本建設、展示設計・施工は日本エキシビション企画プロダクションが担当。資料館の建築工事は1974年3月に竣工し、翌年3月には車庫や売所などの付属建物とアプローチの橋梁や造園工事も竣工する。こうして、谷口を含む関係者も参加した開館式の翌日、1975年3月16日に開館を迎えた。



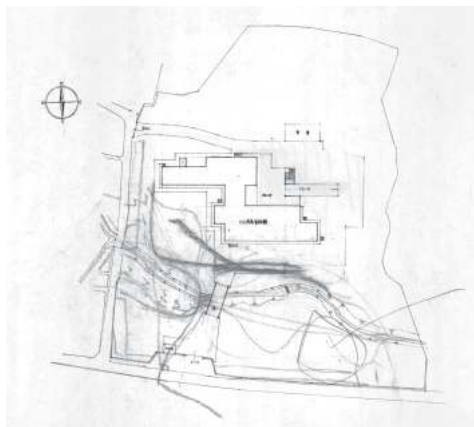
①飛鳥資料館（竣工時）＝『建築と社会』1976年1月号から 東出清彦氏撮影



②飛鳥資料館と周辺（1995年頃）



③竣工時の配置図

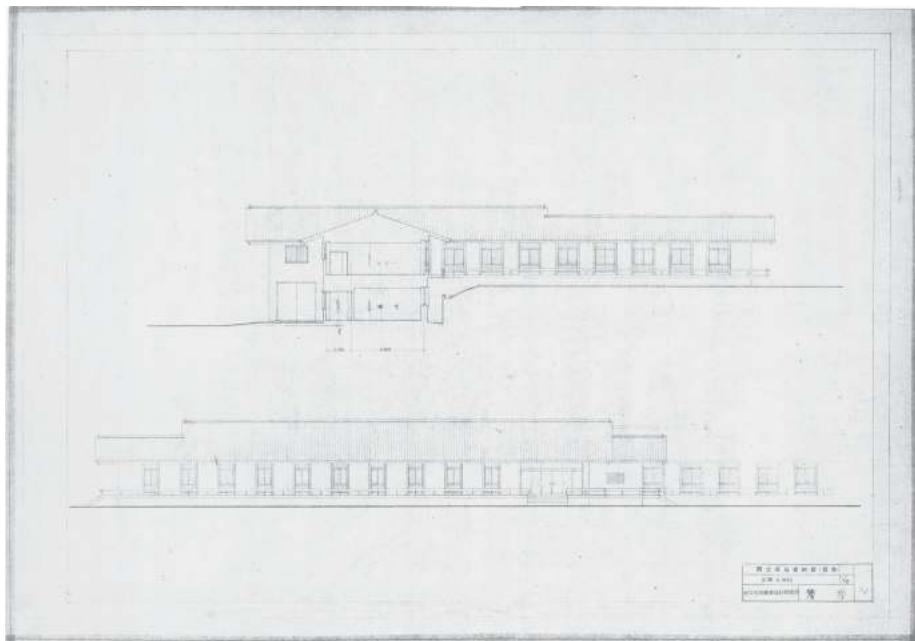


④基本設計（原案）の配置図

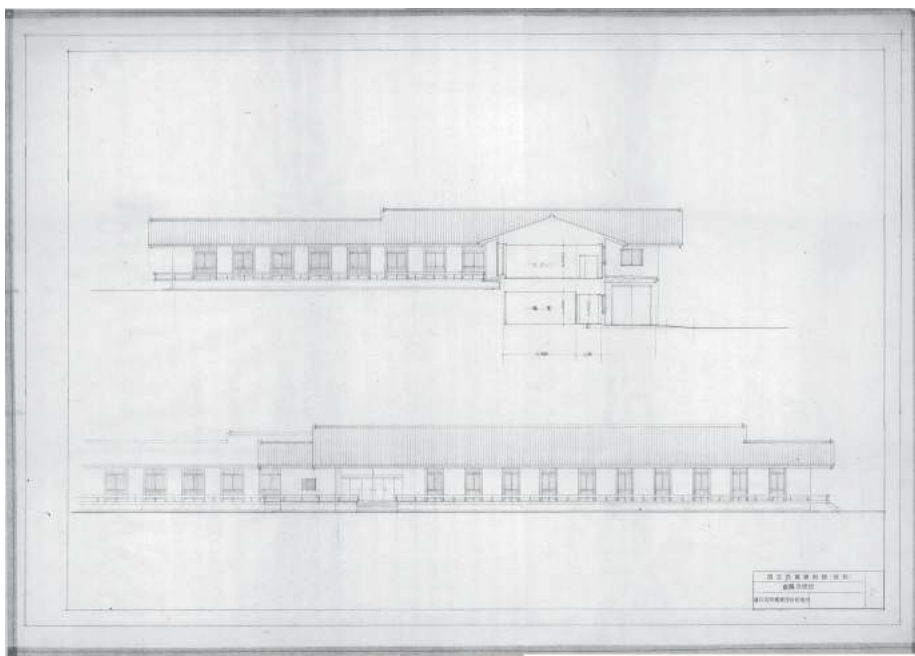
■竣工施設の概要

近代的な施設の建設が歴史的景観を損なうことのないようにとの配慮から、資料館の敷地には明日香村大字奥山の、丘陵が北と東を囲む谷間が選ばれた（図②）。敷地の南方には古代の幹線道路である山田道（現・県道15号桜井明日香吉野線）が通り、また東方には山田寺跡が位置する。敷地の南半には深い谷状の水路が東から西に流れ、これによって敷地が南北に分節されている。

この水路には橋が架けられ、正門や売札所がある南側と、資料館と屋外展示場がある北側をつなぐ（図③）。実際に架けられたのはアプローチに架かるひとつだが、基本設計図にはさらにふたつの小橋が描かれており、当初は敷地全体をひろく回遊する遊歩道が計画さ



⑤基本設計（実施案）の展示棟立面図（北・南）



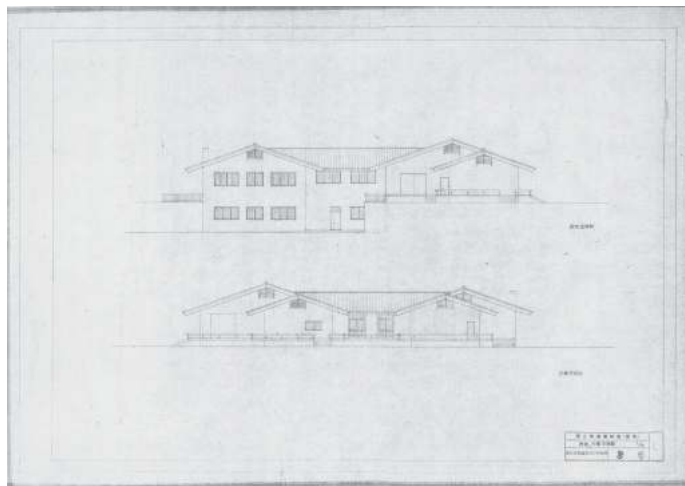
⑥基本設計（原案）の展示棟立面図（北・南）

れていたらしい。小橋のひとつが位置した敷地南東部分には、外構基本設計図の段階で正門や券売所とともに道路に面した駐車場が置かれており、施設整備の関係で外構計画も見直されていったものと思われる。

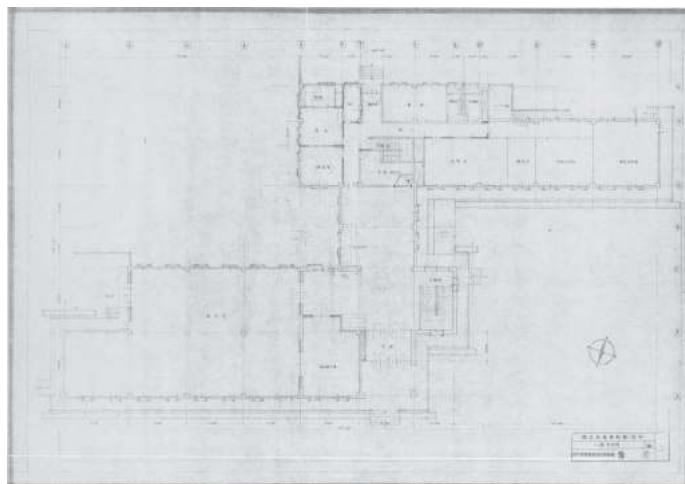
谷口事務所が作成した「外構工事設計説明書」によれば、外構は、（１）導入スペース、（２）遺構・屋外展示スペース、（３）屋外作業スペース、（４）植栽スペースの４つに区分される。（１）は敷地南面および西面の外周部分で、土塁や生垣で敷地境界を囲む。（２）は敷地の南西部分と遺構を含む東側の部分で、将来の屋外展示物の設置を配慮して植栽が施された。資料館東側の石組暗渠遺構はのちに露出展示として整備された（図⑩、1987年に再び埋め戻されている）。（３）は敷地北西隅

の搬入路や職員用のスペースで、資料館の正面側とは１階分の高低差がある。（４）は敷地内の植栽部分をＡ～Ｆに分け、それぞれに樹種や縁石の仕様を挙げている。孟宗竹を植える計画だった屋外展示スペース付近が芝生に変更された他は、資料館南側のツツジをはじめ、基本設計通りに進められたとみられ、現在も青々と生い茂っている。

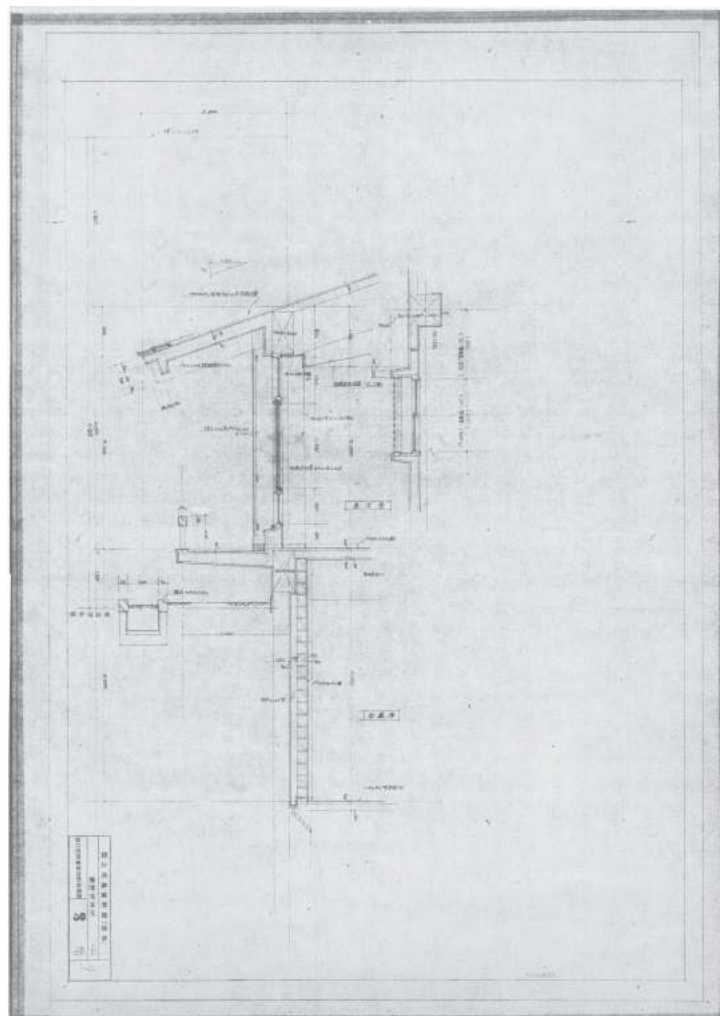
資料館の建築は、この緑あふれるなか、竹に覆われた山の斜面を背景に建てられた。正門からは、敷地内を西に進んだところで北へと伸びる橋を渡ってアプローチする。正面に建つ展示棟（展示室／収蔵庫〔前者が１階、後者が地下１階。以下同〕）の北側に管理棟（事務関係の諸室／機械室）を東にずらして並べ、棟を直交させた中間棟（資料閲覧室／講



⑦基本設計（実施案）の立面図（西・東）



⑧基本設計（実施案）の1階平面図



⑨基本設計（実施案）の矩計詳細図

堂）が両者をつないだ。いずれの棟も地上1階・地下1階建の鉄筋コンクリート造で、切妻の屋根に瓦を葺き、外周には高欄と縁をまわす。求められたのは飛鳥保存を先導した御井敬三が「日本の心のふるさと」と呼んだ明日香村の歴史的風土との調和であり、谷口は日本建築の伝統を引き継ぐモダンな和の造形でそれに応えた。

なお、1982年に山田寺の東面回廊が倒壊したままの状態出土したことを受け、その出土建築部材を用いて復原展示する新棟を、既存展示棟の北側に増築している。自然光を取り入れていた展示室（図⑫）は、展示のリニューアルにともなって窓を内側から塞ぎ、現在は人工照明のみとなっている。

■暗渠遺構の出土と設計変更

基本設計完了後、敷地内での暗渠遺構の出土により設計が変更されたことに触れた。その変更とはどのようなものだったのだろうか。

敷地選定と同様に建築の設計についても歴史的景観への配慮がなされ、現地形を大きく変えないこと、建物は平屋として屋根には瓦を葺くことが、設置準備会による基本構想として示されていた。これに沿って谷口がまと

めた最初の基本設計案（原案）において、資料館は水路北側の敷地中央に位置し、展示棟・管理棟は東西軸に重ねて配置されていた（図④）。平面計画は実施案を左右反転した形で、展示棟の背後にずらして置く管理棟を西側へと伸ばす（図⑧）。これは変更前後の立面図にも明らかで、左右反転している点を除けば原案をそのまま引き継いでいる（図⑤・⑥）。正門は敷地の南西に設けられ、そこからアプローチが東に寄りながら一直線に北へと伸びていた。

すなわち、原案に次の変更が加えられて、実施案が作成されたことになる。

1. 建設位置を敷地北西隅に移す
2. 平面計画を左右反転する
3. 平面計画を反時計回りにやや回転させる
4. 正門の位置を敷地南東に移してアプローチも改める

これらの変更は、限られた時間のなかで、敷地東側で出土した遺構への影響を避け、敷地に施設を収めるために必要な操作であった。しかし、原案では目立たぬよう建物と背後の山で囲むように敷地北東奥に設けた搬入や屋外作業のスペースを資料館西側に移動させることとなり、搬入用のスロープや経路が大幅

に変更されるなど、外構計画にも少なからず影響をもたらすことになる。それでも、設計決定後に急遽生じた大幅な設計変更の要請に、限られた時間の中で対応せねばならなかった設計者たちのこうした苦心によって、資料館は発掘調査終了から短期間のうちに着工まで漕ぎ着けたのである。

■谷口作品の系譜の中で

途中で設計変更がなされたとはいえ、それは配置と平面計画に関するものであり、内外の意匠は原案をそのまま引き継いだ。

外観を特長づけるのは簡素ながら端正な構成美で、棧瓦葺の黒く大きな切妻屋根と、豎格子のついた縦長窓が整然とならぶ白い壁、そして欄干をつけた濡れ縁が水平線を強調するように重なる（図⑩）。展示棟には中心をずらして踏み板だけの簡素な階段（のちに手摺を増設）がとりついて水平に延びる立面に変化を与え、濡れ縁はさらに妻側にも廻りこんで雁行しながら奥へと続く（図⑬）。

こうした造形上の特徴は、谷口が手がけてきた作品にも見出せる。例えば建物外周にまわされた簡素な濡れ縁とそこへと上がる階段は東宮御所（1960年）から用いられ、東京国



⑩竣工した飛鳥資料館（南から見る）



⑪石組暗渠遺構（展示整備後）



⑫竣工直後の展示室



⑬雁行して続く濡れ縁（竣工時）



⑭玄関ポーチの照明器具



⑮展示棟の換気用ガラリ



⑯欄干

図版出典

③・⑩・⑬：『奈良国立文化財研究所
飛鳥資料館』（奈良国立文化財研
究所、1975年）
②・④・⑨・⑪・⑫：奈文研所蔵資料
⑭・⑮・⑯：著者撮影

立博物館東洋館でも濡れ縁の水平線が立面の重要なアクセントとなっている。しかし、規模の大小もさることながら、これらが柱や梁を強調するがゆえに資料館とはやや印象を異にする。一方で、良寛記念館（1961・64年）や乗泉寺八王子別院（1971年）の回向院は、壁面を用いた立面構成を含めて酷似する（資料館はラーメン構造であり、南側の窓には格子を支持するリブの凹凸を付けるが）。こうした違いは、濡れ縁の構造にも現れていて、東宮御所などが柱から梁をのばして縁を支える軸組の構造を持つのに対して、良寛記念館などは縁のスラブ面のみを壁面から持ち出す。資料館は後者である（図⑨）。この点におい

て、資料館は良寛記念館などにみられる面の造形の系譜に連なるものといえようか。

谷口らしい造形は、展示室にみられる屋根形状を現した内部空間や、東宮御所以来繰り返して使用される六角形の照明器具（図⑭）など、建築の内部や細部にも見ることができる。妻壁上部で棟木と組み合うガラリ（図⑮）も、春日大社宝物殿（1973年）のそれに類似する。

さすれば、資料館の独自性はどこにあるのか。それはやはり屋根だろう。雁行して伸びる平面形状と梁行に合わせて変わる大小の屋根の重なりが、その配置の非対称と相まって、なごやかな個性をもたらす（図⑦、奥にある管理棟の棟をやや下げていることも、遠近

による見え方の差を強調して効果を上げている）。それは、飛鳥のおおらかな環境がもたらしたものであったとも言えるだろう。

開館式の日、訪れた人々は飛鳥の歴史や文化をわかりやすく楽しく見せる展示とともに、周囲の自然と調和する建築を賞賛したという。そして開館から40年以上を経た現在も、飛鳥資料館は変わらず飛鳥の風景とともにある。

参考文献：

- ・『奈良国立文化財研究所飛鳥資料館』（奈良国立文化財研究所、1975年）。
- ・佐原真、鈴木嘉吉「飛鳥資料館の建設」（『奈良文化財研究所年報』、1974年）、pp.44-45。
- ・『文化庁月報』（文化庁、1971-75年）。

日本建築協会創立100周年記念誌 頒布のお知らせ

日本建築協会は、2017年3月30日に創立100周年を迎えました。その記念すべき年にあたり、100周年記念事業の一環として、3冊の記念誌を発刊いたしました。

それぞれの誌面では協会100年の歴史を振り返るのみならず、本会が社会の中で果たしてきた役割を見つめ直すとともに、かつて会誌に掲載された貴重な記録を再発見するほか、現在の建築に携わる人々の想いなど、様々な視点から「建築と社会」を取り上げております。

つきましてはこの度、記念誌を頒布することとなりましたので、ぜひお手元に備えていただきたく存じます。

<お申し込み方法>

ご注文の書籍名（もしくは3冊セット）、お名前、ふりがな、ご住所（〒から）、電話番号、メールアドレスをご記入の上、下記宛てにFAXまたはメールでお申し込みください。ご記入いただいたご住所に請求書をお送りしますので、お振込をお願いします。ご入金確認後に冊子を発送いたします。※価格はいずれも税込、送料別です。

お申込先 一般社団法人日本建築協会

FAX : 06-6946-6984 Mail : soumu@aaj.or.jp

◆3冊セットでご注文の場合は

特別価格 **¥5,000** にてご提供いたします。

■日本建築協会100年史1917-2017

¥2,000

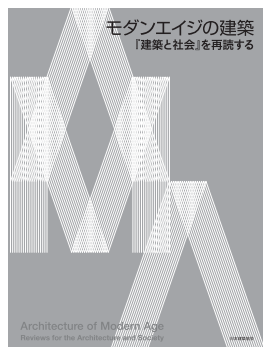


<目次> (全96頁)

- 序 香西喜八郎
- 第1部 日本建築協会100年の概要
石田潤一郎／石川祐一／平井直樹／玉田浩之／三宅拓也
- 第2部 座談会
 - 1 座談会 回顧と展望—坂本勝比古先生を囲んで
坂本勝比古／佐野吉彦／山形政昭／設楽貞樹／和田康由
 - 2 座談会 大阪万博から阪神淡路大震災復興の時代
上田篤／鳴海邦碩／小林郁雄／天野直樹／大井昇二／設楽貞樹／橋爪紳也
 - 3 座談会 21世紀を拓く建築
本多友常／鈴木 毅／安原 幹／横山俊祐
 - 4 座談会 支部活動をめぐって
香西喜八郎／高松隆夫／篠原佳則／長瀬博一
- 第3部 年表 (1917—2017)
- 第4部 協会活動の記録

■モダンエイジの建築『建築と社会』を再読する

¥3,000



2009年～2016年にわたって会誌『建築と社会』に掲載された連載「再読 関西近代建築」をまとめたものです。会誌に収められた貴重な建築記録や論考を取り上げ、解説しています。

<目次> (全352頁)

- はじめに 史料研究会一同
- 第1部 『建築と社会』の100年 山形政昭
- 第2部 建築作品編
 - 1 官庁・公共建築・学校 (泉布観・大阪城天守閣ほか全13件)
 - 2 業務ビル (旧住友ビルディング・御堂ビルほか全22件)
 - 3 会館・劇場・博物館 (綿業会館・自泉会館ほか全15件)
 - 4 ホテル・病院・駅舎・百貨店 (宝塚ホテル・新大阪駅ほか全16件)
 - 5 住宅・住宅地 (千里山住宅地・住宅改造博覧会ほか全6件)
- 第3部 論考・記事編 (全10件)
- 第4部 掲載記事一覧

■関西の建築界／群像

¥2,000



2009年より70回にわたり『建築と社会』に掲載された、建築に携わる方々へのインタビュー記事をまとめたものです。(追録あり)

<目次> (全164頁)

- 関西の建築界／群像 本多友常
- 「群像」全70組
- 「大阪」フォトギャラリー 撮影：河合止揚
- 公開討論会 1987年と2017年の「関西」
倉方俊輔、本多友常、岡村吉展、奥 貴人、清原健史、河合止揚、駒井陽次、杉山美納、藤原芳寿、三谷勝章、三矢大祐、吉永規夫
- 委員プロフィール

1

世界報道写真展2018 記録された瞬間 記憶される永遠

世界中の約100会場で開催される世界最大規模の写真展「世界報道写真展」は今年で61回目を迎える。今回は125の国と地域から4,548人のフォトグラファーが参加し、73,044点の応募があった。大賞などを含め、受賞作品を紹介する「世界報道写真展2018」は6月9日から東京都写真美術館（恵比寿）で開催される。今年、「現代社会の問題」、「一般ニュース」、「長期取材」、「自然」、「人々」、「スポーツ」、「スポットニュース」、そして昨年の「日常生活」にかわり「環境」の部の8部門において、22カ国42人の全受賞者が決まった。

「一般ニュースの部」では、イヴォール・ブリケットがイスラム国（ISIS）からのモスル奪還を巡る戦闘に巻き込まれる市民や廃墟と化す街を捉えている。また、「人々の部」ではイスラム過激派「ボコ・ハラム」の誘拐から逃げだし、自爆用の爆弾から免れた少女たちの姿をアダム・ファーガソンが撮影した。このほか、密猟者からの保護のため自由を脅かされざるを得ない動物、大統領に対するベネズエラでの抗議活動の模様（大賞作品）など、世界の「いま」を克明に伝える写真の数々を紹介する。



ロナルド・シュミット（ベネズエラ、AFP通信）
2017年5月3日（カラカス・ベネズエラ）

期 間 6月9日（土）～8月5日（日）
10：00～18：00（木・金曜日は20：00まで、
ただし7/19・20・26・27、8/2・3は21：00まで）
※入館は閉館の30分前まで

休 館 日 月曜日（ただし7/16は開館、7/17は休館）

会 場 東京都写真美術館 地下1階展示室
東京都目黒区三田1-13-3
恵比寿ガーデンプレイス内
TEL.03-3280-0099

観 覧 料 一般800円、大学生600円
中高生・65歳以上400円
*小学生以下、都内在住・在学の中学生無料
*障がい者手帳等をお持ちの方とその介助者1名は無料
*第3水曜日は65歳以上無料

2

プラド美術館展 ーベラスケスと絵画の栄光ー

1819年に王立の美術館として開設されたプラド美術館（スペイン、マドリッド）は世界屈指の美の殿堂として知られている。歴代スペイン王によって収集された収蔵品は、ベラスケスやスルバラン、ムリーリョらスペイン人画家による絵画のほか、イタリア、フランドル絵画などヨーロッパ美術の粋を示す第一級の作品から成り、ハプスブルクとブルボンのスペイン王朝の栄華を今



ディエゴ・ベラスケス
《王太子バルタサル・カルロス騎馬像》
1635年頃
マドリッド、プラド美術館蔵
© Museo Nacional del Prado

に伝えている。同展は、17世紀スペインを代表するのみならず西洋美術史上最も傑出した画家のひとりであり、後世の印象派の画家たちにも大きな影響を与えたベラスケスによる初来日作品を含む重要作品7点を中心に、イタリアやフランドル絵画をあわせ、61点の油彩画と9点の資料で17世紀スペイン宮廷をめぐる美術を紹介するものである。プラド美術館の核となるベラスケスと17世紀絵画のコレクションを通してスペイン黄金時代の社会と文化に触れる貴重な機会となる。

期 間 6月13日（水）～10月14日（日）
10：00～18：00（金・土曜日は20：00まで）
※入場は閉館の30分前まで

休 館 日 月曜日（祝休日の場合は開館、翌火曜日休館）

会 場 兵庫県立美術館
神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1 [HAT神戸内]
TEL.078-262-0901

観 覧 料 一般1,600円
大学生1,200円、70歳以上800円（要証明）
*6月の平日は大学生無料（要証明）
*高校生以下無料
*障がい者手帳等をお持ちの方（70歳以上を除く）は半額、その介助者1名は無料

3

聴竹居

ー藤井厚二の木造モダニズム建築ー

日本を代表するモダニズム建築の傑作として2017年に重要文化財に指定された「聴竹居」。自邸として「聴竹居」を設計した藤井厚二は、竹中工務店設計部の黎明期に在籍しその基礎をつくり、その後、京都大学で建築環境工学を学問として確立しながら、その実践としての「住宅」の設計に没頭した。藤井による真に日本の気候風土にあった住宅群は、“環境の世紀” 21世紀の今、我々に様々な示唆を与えてくれる。2018年は藤井厚二の生誕130年、没後80年、そして聴竹居建設90年目に当たる。その節目の年に、自邸「聴竹居」を中心に現存する幾つかの住宅作品を通じて「其の国を代表する建築は住宅建築である」と言う名言を残した藤井厚二の「日本の住宅」への想いを紹介する展覧会が開催される。

なお本展は2009年にGallery A4にて開催された「聴竹居」と藤井厚二展をベースとし、近年に発見された新たな資料を付加して、より充実した内容を準備している。



聴竹居外観 © 古川泰造

期 間 7月16日(月・祝)まで
9:30~16:30
※入館は16:00まで

休 館 日 月曜日(ただし7/16は開館)

会 場 竹中大工道具館1Fホール
神戸市中央区熊内町7-5-1
TEL.078-242-0216

観 覧 料 一般500円、高大生300円、65歳以上200円
(常設観覧料含む)
*中学生以下無料

4

没後50年

藤田嗣治

モディリアーニ、シャガール、キスリングなど名だたる芸術家を輩出した1920年代のパリ。

「エコール・ド・パリ」と呼ばれる画家たちが活躍したこの時代に、藤田嗣治(1886-1968)は、白い地塗りを施した独自のキャンヴァスに、日本画の墨線に着想を得たしなやかな線描で描いた「乳白色」の裸婦像で人々を魅了し、パリ画壇の寵児と称されるようになった。没後50年に開催される本展覧会では、初期の風景画・水彩画から晩年多くえがかれた子ども像まで、油彩画を中心とした山王美術館コレクション全28点が一挙に展示される。藤田嗣治がめざした美の世界をぜひご覧いただきたい。



藤田嗣治
《家馬車の前のジブシー娘》
1956年／山王美術館蔵
© Fondation Foujita
/ADAGP,PARIS&JASPAR Tokyo 2017
G1119

期 間 7月31日(火)まで
11:00~17:00
※入館は16:30まで

休 館 日 土曜日・日曜日

会 場 山王美術館
大阪市浪速区湊町1-2-3
ホテルモントレグラスミア大阪22階
TEL.06-6645-7111 (ホテル代表)

観 覧 料 一般1,000円、高大生500円
小中生500円(保護者同伴に限り2名まで無料)
※学生は要証明

本欄掲載の1~4の美術館等の招待券ご希望の方は、電話等で申し込み後、招待券送付用の切手(82円)を日本建築協会事務局までお送りください。

理事会

第 1 回常任理事会

4月25日（水） 16：00～17：30

日本建築協会会議室

出席者 設楽会長ほか 8 名

- 議 事
- (1) 平成29年度事業報告（案）
 - (2) 平成30年度事業計画（案）
 - (3) 平成29年度収支予算・30年度予算（案）
 - (4) 常設委員会の新設（案）～未来創生プロジェクト～
 - (5) 平成30年度役員、評議員の回答状況
 - (6) 「建築と社会」誌のアーカイブ化と公開
 - (7) 4 団体提言書の共同作成プロジェクト
 - (8) 大阪都市景観建築賞幹事会委員の交代
 - (9) 第65回青年技術者の選考結果
 - (10) 総会の講演会講師

編集委員会

第 1 回広告企画・編集合同委員会

4 月 2 日（月） 18：00～19：00

日本建築協会会議室

出席者 勝山委員長ほか 7 名

- 議 事
- (1) 5 月号特集 スポーツイベントを支える設備技術
 - (2) 6 月号特集 片岡安賞
 - (3) 7 月号特集 青年技術者
 - (4) 8 月号特集（仮）平成の建築ブーム～30年で建築はどう変わったか？～

建築計画系分科会

4 月 9 日（月） 19：00～21：15

日本建築協会会議室

出席者 桑原幹事ほか 2 名

議 事 (1) 2018年特集

4 月16日（月） 19：00～21：30

日本建築協会会議室

出席者 桑原幹事ほか 6 名

議 事 (1) 2018年特集

第 1 回構造分科会

4 月 6 日（金） 18：30～20：00

日本建築協会会議室

出席者 角田幹事ほか 6 名

議 事 (1) 構造の頁の企画

(2) 2018年特集の企画

第 1 回設備分科会

4 月 4 日（水） 18：00～19：30

日本建築協会会議室

出席者 橋本幹事ほか 7 名

議 事 (1) 2018年特集の企画

(2) 「設備の頁」の企画

第 1 回施工材料分科会

4 月17日（火） 17：00～18：00

日本建築協会会議室

出席者 高橋幹事ほか 5 名

議 事 (1) 2018年特集の企画

第 1 回法令分科会

4 月18日（水） 15：00～17：00

日本建築協会会議室

出席者 垣内幹事ほか 6 名

議 事 (1) 法令コーナーの企画

(2) 2018年特集の企画

第 1 回作品作風小委員会

4 月26日（木） 19：00～19：45

日本建築協会会議室

出席者 東井小委員長ほか 4 名

議 事 (1) 作品の選定

- (2) 作品の掲載状況、予定
- (3) gallery掲載報告、予定
- (4) その他

事業委員会

第 1 回情報見学小委員会

4 月12日（木） 18：30～19：00

鯛よし 百番

出席者 中尾委員長ほか 9 名

- 議 事
- (1) 見学先の検討
 - (2) イケフェス協力の検討

出版委員会

第 1 回出版委員会

4 月24日（火） 18：00～18：50

日本建築協会会議室

出席者 西委員長ほか 4 名

- 議 事
- (1) 既刊書籍経過報告
 - (2) 制作進行中の書籍
 - (3) 今後の出版テーマ
 - (4) 建築セミナー

教育委員会

第 1 回大阪府住まい・まちづくり普及協議会

4 月20日（金） 10：30～12：00

大阪建築会館会議室

報告・議題

- (1) 出前講座
- (2) マニュアル作り
- (3) 通常総会について
- (4) その他

第 1 回史料研究会

4 月10日（火） 18：00～19：30

日本建築協会会議室

出席者 山形委員長ほか 4 名

- 議 事
- (1) 新たな連載
 - (2) 委員長交代

未来創生プロジェクト

第 1 回建築次世代委員会

4 月 3 日（火） 18：35～19：50

日本建築協会会議室

出席者 菅原幸也委員長ほか 4 名

- 議 事
- (1) 現場見学会の検討
 - (2) 日本建築協会 新パンフレット作成

第 1 回2040委員会

4 月 3 日（火） 19：30～21：30

PARK Lab.

出席者 駒井リーダーほか 6 名

- 議 事
- (1) 企画内容
 - (2) 今後の委員会活動

第 1 回 U-35 小委員会

4 月11日（水） 19：00～

鹿島建設会議室

出席者 宮武リーダーほか11名

- 議 事
- (1) 活動／予定
 - (2) 次回予定／その他

第 2 回 U-35 小委員会

4 月27日（金） 19：00～

安井建築設計事務所会議室

出席者 宮武リーダーほか 6 名

- 議 事
- (1) 活動／予定
 - (2) 次回予定／その他

審査会

第65回青年技術者選考委員会

4 月16日（月） 14：00～17：00

日本建築協会会議室

出席者 勝山委員長ほか 7 名

議 事 (1) 青年技術者選考

編集委員会（平成30年度）

■副会長

米井 寛

本多 友常

■編集担当理事

◎勝山 太郎

佐藤 榮一

杉本 浩

竹中 統一

西 博康

松崎 公一

船越 淳久

吉村 英祐

香西喜八郎

■副委員長

○戸川 勝之

■特集小委員会

■計画分科会

★計画系

飯田 匡

鈴木 克彦

△田中 直人

松田奈緒子

守井 辰

吉村 英祐

★建築計画系

神戸 嘉也

△桑原 悠樹

下坂 浩和

中辻 浩介

東 拓郎

樋口 展寛

松岡 英緯

三谷 帯介

米山 剛史

渡部 剛

★インテリア・住宅系

赤川貴世友

今井 充彦

岩田 圭司

川合 隆之

河西 孝平

△黒柳 亮

塚口 洋之

ペリー史子

■構造分科会

宇野 綾真

岡田 健

岸本 光平

瀧野 敦夫

△角田 耕一

穂原 学

松本 裕之

宮久保秀樹

向井 洋一

■設備分科会

有尾清二郎

木谷 晃之

北野 勝也

佐々木章二

寺井 千佳

夏井 重行

△橋本 直樹

梶井 貴廣

宮崎ひろ志

森山 正和

山本 雅洋

■施工材料分科会

東 琢

桜井 和男

△高橋 秀一

藤丸 啓一

山口 紀宏

山崎 順二

吉田 正友

吉居 哲

■法令分科会

植平 浩司

岡田 耕介

△垣内 明

河野 学

福岡 誉顕

■作品作風小委員会

▲東井 嘉信

居内 章夫

池上 明

稲垣 和江

太田 栄治

加嶋 章博

菊池 浩輔

倉瀬奈千子

澤田 純一

高木 秀晃

鞆野 淳司

西田 佳代

芳谷 晴彦

平野 尉仁

増田 敬彦

■広告企画小委員会

小川 雄介

金築 雄

小山 昭

野山 将男

藤田 昌宏

▲前田 衛

山辻 直樹

（順不同）

◎委員長

○副委員長

▲小委員会委員長

△幹事

印刷 2018 年 5 月 29 日

発行 2018 年 6 月 1 日

発行人 一般社団法人日本建築協会

大阪市中央区大手前1-7-31

電話 06-6946-6981

印刷所 ㈱中島弘文堂印刷所

定価 1230円（税込）

©「建築と社会」誌の記事の無断転載を禁じます

**お客様の抱える問題やニーズに
より速やかに、より丁寧に対応できるように**

企画・デザイン、制作、製版、印刷

株式会社 中島弘文堂印刷所

本 社 〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号
TEL.06-6976-8761 / FAX.06-6976-8765

東京支社 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町1丁目4-2 風雲堂別館ビル2階
TEL.03-3526-5580 / FAX.03-3526-5582

<http://www.n-kobundo.co.jp/>

地球環境を守り、100年建築に貢献する

NACL のアルミ表面処理

株式会社 日本電気化学工業所

<http://nacl.jp> E-mail: sc@nacl.co.jp

本部営業部 〒560-0036 大阪府豊中市蛍池西町2丁目7番26号 NACLビル2階

TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632

東京事務所 〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目6-7

TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

年間広告のご案内

会誌「建築と社会」では、後付部分に
広告スペースを設けております。

1年を通じて、社名広告を掲載されませんか？

掲載期間：4月号～翌年3月号までの1年間

掲 載 料：48,000円（消費税込み）

サ イ ズ：1/12頁（タテ40mm×ヨコ90mm）

※毎月掲載誌をご送付します。

※原稿は1年間同じ原稿を使用します。

お問い合わせ先

一般社団法人 日本建築協会 内山・井筒

TEL : 06-6946-6981 FAX : 06-6946-6984 E-mail : koukoku@aj.or.jp



雨漏り事件簿

原因調査と対策のポイント

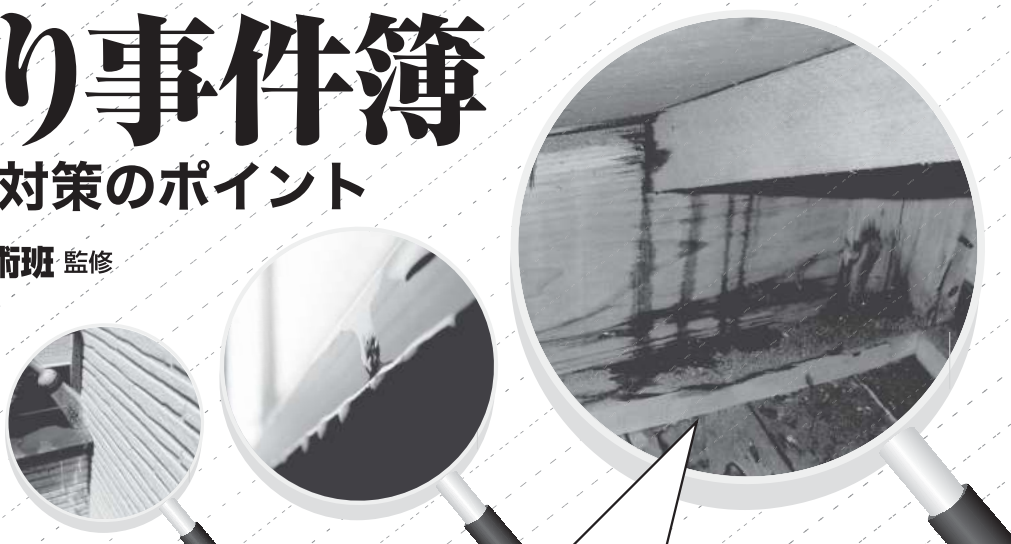
雨漏り110番技術班 監修

玉水新吾・唐鎌謙二 著

日本建築協会 企画

A5判 216ページ

定価 本体2,500円+税



修理実績 1万1千件以上・解決率97%超、日本最大のプロ集団

「雨漏り110番」が総力を結集

イチから経験していたら数十年かかるノウハウをぎゅっと詰め込みました！

「ヒアリングシート」&「現場写真」で原因と対策を完全図解

学芸出版社

〒600-8216

京都市下京区木津屋橋通西洞院東入

Tel 075-343-0811

Fax 075-343-0810

<http://www.gakugei-pub.jp/>

E-mail info@gakugei-pub.jp

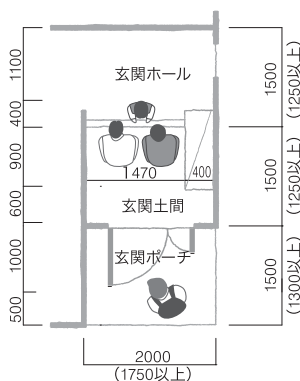
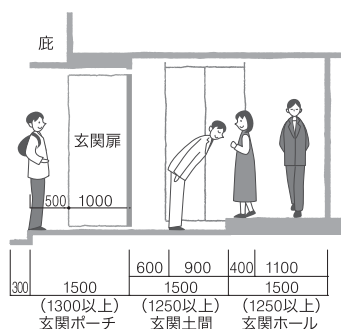
洗面室の窓の高さは2.0m超でプライバシーと防犯性向上

玄関の靴箱は4人家族で棚延長10m(50足分)

子供室は足掛け+800mmの手すり追加で転落防止...etc.

13の空間の機能と要素から、生活行為に適した寸法を図解

◇図解例◇



暮らしから考える
設計のポイント

図解 住まいの寸法

堀野和人・黒田吏香 著/日本建築協会 企画
A5判・200頁・定価 本体2600円+税

学芸出版社

〒600-8216

京都市下京区木津屋橋通西洞院東入

Tel 075-343-0811

Fax 075-343-0810

<http://www.gakugei-pub.jp/>

E-mail info@gakugei-pub.jp